

疹、猩紅熱、百日咳、實布達里亞、流行性感冒、赤痢、腸炎、肺炎、小兒ノ瘧疾、氣管支炎、肺癆、胃腸炎、腎臟炎、產褥熱、先天性梅毒、老衰、外因ニ依ル死、各年ニ於ケル主ナル死亡原因ノ地位、ヒラデ
(參照) 第十一圖版。第三八表。

主ナル小兒死亡原因

主ナル小兒死亡原因、海外諸國ト一致シテ死亡原因、
(參照) 第十二圖版。第三九表、第四〇表。

飲料水

飲料水、水、水道ノ發達、水道布設地ニ於ケル水道使用ノ普及、水道布設前後ノ死亡率比較、消化器性傳染病ト水道、飲料水ノ種類ニ依リ別ケタル人口、水道ノ水質検査成績、各水道通過床ノ構成、通過設置ナリセサル水道。
(參照) 第二十二圖版、第二十三圖版。第六〇表、第六一表、第六四表。

傳染病

(甲) 腸炎、赤痢

各年ニ於ケル腸炎、赤痢ノ流行、其減少ノ原因。
(參照) 第十九圖版。第四四表、第四八表。

(乙) 赤痢

赤痢病原、各年ニ於ケル赤痢ノ流行、其減少ノ原因。
(參照) 第十九圖版。第四五表、第四八表。

(丙) 實布達里亞

各年ニ於ケル實布達里亞ノ流行、治療血清ノ實布達里亞患者數、實布達里亞死者數ノ原因。
(參照) 第十九圖版。第四六表、第四八表。

(丁) 痘瘡

各年ニ於ケル痘瘡ノ流行、痘瘡ノ流行型。
(參照) 第十九圖版。第四七表、第四八表。

種痘

種痘數、種痘ノ由來、痘苗ノ變遷、善惡比例、地方別種痘數及善惡比例、氣温ト善惡比例トノ關係、甲種醫師數ト善惡比例トノ關係、郵便到達時間ト善惡比例トノ關係、年齡ニ依リ別ケタル種痘者。
(參照) 第二十圖版。第四九表、第五〇表。

自殺中毒及其他ノ變死

(甲) 中毒死

中毒死、男女ニ依リ別ケタル中毒死、工業藥中毒、ブトマイン中毒、河豚中毒、其他ノ中毒。
(參照) 第十八圖版。第四一表、第四二表。

(乙) 變死

五四

變死ノ外傷死、變死數ノ總計

(參照) 第十八圖版。第四一表、第四二表。

(丙) 自殺

男女ニ依リ別ケタル自殺。
(參照) 第十八圖版。第四一表、第四二表。

(丁) 自殺、變死、中毒死ノ月別

自殺、中毒死、變死。
(參照) 第十八圖版。第四三表。

精神病者

精神病者監護法、監護セラレタル精神病者、監護ヲ要セサル精神病者、病院ニ收容シタル者ト其他ノ場所ニ監護シタル者トノ比例、初發者ト再發以上ノ者トノ比例、治療比例、死亡比例。
(參照) 第十七圖版。第五一表、第五二表、第五三表、第五四表。

飲食物

飲食物、法令ヲ以テ取締ヘキ飲食物、乳及乳製品、清涼飲料水、氷雪、飲料水及其他ノ物品検査、有害品、検査件數ニ對スル有害品發見件數、屠宰數、乳用牛ノ頭數年比較、腎臟管內牛乳採取量年比較。
(參照) 第二十四圖版、第二十五圖版。第五七表、第五八表、第五九表、第五七表追加。

醫師、藥劑師、產婆

醫師ニ關スル業務者、醫師ノ種別、藥劑師ノ種別、產婆ノ種別、醫師、藥劑師、產婆ノ消長、現在調査ノ制度變更ノ影響、醫師ノ種別別比例、醫師補充ノ問題、齒科醫師、醫師ニ對スル藥劑師ノ比例、產婆ノ人口比例。
(參照) 第二十七圖版。第六二表。

死亡率及平均壽命

調査ノ由來、生存者及死亡者ノ平均年齡、壽命ノ觀察、平均壽命前後調査ノ差、各國ノ平均壽命比較、(附錄) 壽命ノ計算ニ就テ。
(參照) 第十圖版。第三五表、第三六表、第三七表。

氣象

人體ニ直接關係アル氣象、全國代表スヘキ測候所、氣温ノ人體ニ及ボス關係、氣温ノ人體ニ及ボス關係、降水量ノ人體ニ及ボス關係。
(參照) 第二十八圖版。第二十九圖版。第三十圖版。第六三表。

衛生統計ニ關スル描畫圖ノ説明

本年五月開設セラレベキドレスデンノ萬國衛生博覽會ヘ本邦政府ノ出品致サレマシタ統計ノ描畫圖ニ關シ概略ノ説明ヲ茲ニ致サウト思ヒマス。

人口及人口ノ發達

先ツ第一ニ申上ゲマスルノハ人口並ニ人口ノ發達デアリマス。日本ノ人口ハ如何ニ發達シツ、アルカ、ソレヲ示スニハ、總人口ガ幾何アリテ如何ニ發達スルヤト云フコトヲ示スバカリデナク、一般ノ大勢トシテ都會ニハ人口ガ集中スル、其狀況ガ如何デアアルカ、ソレヲ同時ニ知ルベク、人口ヲ其住スル地ノ都府ニ分テテ、都府各ノ人口ガ幾何アリテソレガ如何ニ發達シタルヤヲ示スコトニ致シマス。本邦ノ人口ニハ種々アリマスカラ、ソレヲ御斷リシナケレバナラスノデアリマスガ、此場合ニ用非マシタル人口ハ總テ現住人口デアリマス。其現住人口ヲ、餘リ古ク遡ラサル、而カモ多少ハ統計ガ規則正シク取リ得ラル、ヤウニナリマシタカラノ分ヲ蒐集シマシタ、即チ明治二十一年カラ各五年毎ノ年末人口ヲ調ベテ見マスルノニ、明治二十一年ノ全國ノ總人口ハ四千四百七十九人デアツタノガ、二十五ヶ年後ノ最近明治四十一年ニハ五千七百七十三萬六千三百四人ノ大數ニ上リマシタ。斯ク増加致シマシタル人口ヲ都會ト其他トニ分ケル、其都會ト云フコトニモ研究ヲ要スル、單ニ市區ヲ都會ト見、郡町村ヲ都會ト見ルカ、或ハ人口幾何以上ノ地ヲ都會ト見幾何以下ノ地ヲ都會ト見ルカ、此選擇ニハ仲々困難ガ伴ヒマス、何トナレバ人口ノ多少ニ依ツテノミ都會ト郡町村ヲ分ツ譯ニ行カヌコトガアル、大都市ハ別問題デアリマスガ三萬人ヤ三萬五千人ノ人口アル地ニ於テハ、唯是レ々々ノ人口アリト云フノミデ全ク都

内閣統計局技師 二階堂保則

會ノ形ヲ爲サヌモノモアル、又多數郡村ヲ合併シテ人口ノ多イ町又ハ村ト爲リタルモノアルデアリマス。ソレ故ニ人口ノ多少ノミヲ以テ都會ノ區別ヲ爲スコトハ出來マセヌ、ガ併ナガラ一應ハ之ヲ區別シテ調ベテ見マシタ。サウ致シマス、人口ガ都會ト都會以外ノ土地トノ間ニ於テ如何ニ偏倚スルカト申シマス、明治二十一年ニ於テ現住人口三萬以上ヲ有シタル三十市區ノ人口總計ハ三百五十七萬四千七百八十七人ニシテ之ヲ總人口ニ對比スルニ、其ハ九一%ニ當リマス。此三十市區ノ人口ハ次ノ五年自即チ明治二十六年ニハ少シ減ジマシタハ八九%ニナリ、更ニ明治三十一年ニハ一〇%ニ上リ、同三十六年ニハ一一%ニナリ、同四十二年ニハ一二%ニナリマシタ、最初ノ明治二十一年ト同四十二年ト此兩者ヲ比較致シマスレバ凡ソ四%即チ明治二十一年ノ二分ノ一弱ヲ二十五年間ニ増加ヲ致シタルデアリマス。之ヲ人口總數ノ増加率ニ比シマスレバ其増加ノ割合ハ非常ニ著シキモノデアリマシタ、市區ノ發達ハ郡村ニ比シマスレバ餘程著シイコトガ知ラレマス。更ニモ少シ大キイ都市ニ就テ見タラドウデアラウカト思ヒマシタ、人口五萬以上ノ都市ノ合計又調ベテ見マシタ。サウ致シマシタル明治二十一年ニ總人口ノ七三%デアツタモノガ、廿五年後ノ同四十二年ニハ一一%ニ上リマシタ人口三萬以上ノ都市ノ合計ニ於ケルト畧ボ同一ノ形勢デアリマシタ。然ルニ此人口五萬以上ノ市區ハ明治二十一年カラ同四十二年マデノ間ニ屢々増加ガアリマシタ、會テ人口五萬以下ノ市區デアツタノガ五萬以上ニナリマシタリ、其間ニ種々ナル變遷ガアリマシタ、之ヲ調査スルニ當リテハ其初メノ人口五萬以上ノ市區デアツタ所ヲノミ各年トモ調ベベキカ、或ハ又各年ニ段々市區ヲ増加シ、明治

二十一年ニ人口五萬以上ノ市ガ十四アツタトシマスレバ其年ニハ其十四市
區ヲ、明治二十六年ニハ十八ニナツタトスレバ其十八市區ヲ、明治三十
一年ニハ二十ニナツタトスレバ其二十市區ヲ、同三十六年ニハ二十一市區ヲ、
同四十二年ニハ二十四市區ヲ各合計シタモノニ就テ調ベキカ、之ニ付テ
モ疑問ヲ生シタノデアリマシタガ、遂ニ人口ノ甚ダ多カラザル市區ヲ除キ、
人口十萬以上ヲ有スル最モ大ナル都市ニ就テノミヲ數ヘテ見ルコトニ致
シマシタ。然ルニ此人口十萬以上ノ都市ト云フテモ、調査ノ年ヲ異ニスル
毎ニ都市數ニ増減ガアツテ明治二十一年及同二十六年ニハ六市、同三十
一年ニハ八市、同三十六年及同四十二年ニハ九市アリマシタ、此最初ノ年
人口十萬以上ノ地ヲ最後マデノ各年ニ數フベキカ、最後ノ年ノ人口十萬以
上ノ地ヲ溯リテ最初マデノ各年ニ數フベキカ將タ各年異ナリタル市區數ノ
事實ヲ算シテ比スベキカ、問題デアリマシタガ、私共ハ其何レモ取ラズ、
此二十五ヶ年間ニ於テ人口十萬以上デアツタ(總合一調査年ニ於テモ)東
京、大阪、京都、名古屋、横濱、神戸、金澤、廣島、仙臺、長崎ノ十市ヲ以テ
大都市ト見做シ、此十市ノ事實ヲ各年ニ於テ算シテ其他ノ地ト比較スルコ
トニ致シマシタ。其比較ガ如何デアツタカト申シマス、明治二十一年ニ
ハ大都市ノ總計人口ハ二百七十二萬四千四百二十八人アリマシタノガ、同
二十六年ニハ二百八十三萬七千二百二十八人ニ増加致シマシタ、併シ其増加
ノ割合ハ甚ダ微々タルモノデアリマシタ、極ク僅カシカ増加シテ居ラナカ
ツタ、然ルニ其次ノ五年目ナル明治三十一年ニハ三百六十六萬四千八百九
十七人ニ増加致シマシタ著シキ増加ヲ見マシタ、又同三十六年ニハ四百五
十六萬九千二百二十一人、同四十二年ニハ五百五十三萬四千四十三人ト云
フヤウニ増加致シマシタ。コレヲ表章スル爲メニ圖ニハ實數ノ比較ト比例
數ノ比較トヲ掲ゲマシタ、即チ實數ノ比較ハ面ヲ立テマシタ、第一ニ總人
口、次ニ大都市、次ニ其他ノ地ノ大ウヲ示シマシタ、コレヲ以テ三者ノ量
ガ大體ニ知レマシヤウ、而シテ比例數ノ比較ハ總人口、大都市、其他ノ地共
ニ明治二十一年ヲ一位ト爲シ各五年毎ニ圖ヲ作ツテ其發達ヲ示スコトニ致

シマシタ、其増加ノ割合ヲ申シマス、總人口ニ於テハ明治二十
一年ヲ一〇〇ト致シマシテ、同二十六年ニハ一〇四・九ダケノ大サニナツ
タノデアリマス。大都市ニ於テハ此期間ノ増加割合ハ總人口ヨリモ寧ロ低
クアリマシテ一〇四・一ニシカ上ツテ居リマセシタ。ドウ云フ原因デ
此期間ニ於テ都會ニ人口ノ集中スルコトガ少ナカツタカ今ソレヲ知ルニ困
リマスガ、事實ハ斯様デアツタノデアリマス。其次ノ明治三十一年ニハ大
都市ハ非常ニ膨脹致シマシテ、明治二十一年ノ一〇〇ニ對スル總人口ガ一
二三・二デアツタ場合ニ大都市ハ一三四・五ニ上リマシタ、大都市以外ノ地
ハ一一・六ダス、其次ノ五年目ニハ總人口ハ一二二・〇ニナリマシタノ
ニ大都市ハ一六七・七ニ上リ、其他ノ地ハ一一七・六ニシカ増加シマセン、
又其次ナル最近明治四十一年ニハ總人口ハ一二九・〇デホンノ僅カシカ増
加致シマセヌノニ、大都市ハ一三〇・三ニ上ルト云フヤウニ大變著シキ増加
ガアリマシタ、併シ其他ノ地ハ一二三・六デアリマス。以上ノ事實ニ由リ
テ大都市人口ノ總人口トノ増加割合ヲ比較スルニ明治二十六年ニ於テハ總
人口ノ増加割合ニ對スル大都市人口ノ増加割合ハ〇・九九ニ當リ、三十
一年ニハ同上ニ對スル一・一九、三十六年ニハ同上ニ對スル一・三九、
四十二年ニハ同上ニ對スル一・五七ニ該當致シマス。以テ本邦ノ大都市カ
如何ニ膨脹シツ、アルカ人口偏倚ノ趨勢ガ知レルデアリマシヤウ。イヤ更
ニ之ヲ海外ノ事例ト比スルニ於テ一層明瞭ニナリマス。試ニ英吉利(愛爾
蘭、蘇格蘭ヲ含ム)ヲ見ルニ一八八十年ヲ一〇〇ト爲シタル總人口ノ
増加割合ハ一八八十年ニ於テ一〇七・三、一九九十年ニ於テ一二七・八
デアルノニ、一九九十年ニ於テ人口十萬以上ヲ有シタル三十九大都市ノ増
加割合ハ一八八十年ニ於テ一四・五、一九九十年ニ於テ二二・三・四デ、
又獨逸帝國ヲ見マスルニ一八八十年ヲ一〇〇ト爲シタル總人口ノ増加
割合ハ一八八十年ニ於テ一〇八・四、一九九十年ニ於テ二二・三・四デ、
一九九十年ニ於テ人口十萬以上ヲ有シタル三十三大都市ノ増加割合ハ一
八八十年ニ於テ一三八・六、一九九十年ニ於テ一九三・五デアリマス。又佛蘭西ハ總

人口ノ増加割合ハ同上ノ一八八十年ニ一〇二・一、一九九十年ニ一〇
三・五デ、同上ノ大都市十五ヶ所ノ増加割合ハ一八八十年ニ一〇九・七、
一九九十年ニ一一二・六デアリマス。此事實ヲ以テ總人口ト大都市トノ増
加割合ヲ比スルニ、英吉利ニ於テハ一八八十年ニ總人口ノ増加割合ノ
一ニ對スル大都市人口ノ増加割合一〇七、一九九十年ニハ一〇二ニ該
リ、獨逸ハ同上ノ割合ガ一八八十年ニ總人口ノ一ニ對スル大都市ハ一
二八ノ増加割合ヲ有シ、一九九十年ニハ同二・五七ニ當リ、佛蘭西ハ一
八八十年ニ同上ノ大都市ノ増加割合ハ一〇七、一九九十年ニ一・七ニ當
リマス、是ヲ以テ見マスルト日本ノ都市ノ膨脹力ハ恰モ獨逸ニ彷彿タルモ
ノデアツタ、其偏倚ハ英吉利、佛蘭西ニ比シテ強キモノデアリマス。但シ
此問題ハ大都市ノ數、其人口ノ量ガ總人口ノ量ト如何ナル比例ヲ有スルカ
ノ對照ニ依リテ完成スルモノデアリマスガ、今ハ夫マデハ論ジマスマイ。
人口ノ増加トカ又ハ人口ノ異動トカ何故ニ衛生ニ關係ヲ有ツテ居ルカ
ト云フヤウナ、或ハ御疑ヒガアルカモ知レマセヌガ、私ハ茲デ是等ノ統計
ヲ衛生博覽會ニ出品スルニ至ツタ理由ヲ述ベテ置カウト思ヒマス、凡ソ人
口ハ之ヲ觀察スルニ諸般ノ方面ガアリマスガ、彼ノ人口統計乃至社會統計
ノ方面カラ見ル見方ト、醫學衛生ノ方面カラ見ル見方ニ於テ多少
目的ノ異ナルモノガアリマス。全體衛生ノ統計ハ、人ノ健康狀態並ニ人ガ健
康ヲ毀傷セラレタル有様、其健康ヲ毀傷スヘキ原因、其毀傷セラレタル結
果ト云フヤウニ調ベテ行クノデアリマスガ、其人ノ健康ノ毀傷セラレタル有
様或ハ毀傷セラレタル有様ヲ見マスルニハ總テ人ノ上ニ關スルノデア
リマスカラ、第一ニ人ノ員數並ニ其人ガドウ云フ異動ヲスルカヲ知ルコト
ガ必要デアリマス。殊ニ都市ニ人口ノ集中スルコトノ如キハ、餘程衛生上
注意ヲ要スル點デゴザイマシテ、此次ニ申上ゲヤウト思ヒマス人口ノ疎
密ガ健康ニ著シク關係スルコトヲ知リマシタ以上ハ、都市ニ人口ガ集中ス
ルト云フヤウナコトハ、餘程注意シテ見ナケレバナラヌコトデアアル。ナゼ
都市ニ人口ガ集中スルコトガ衛生上注意スベキデアアルカト申シマス、

都市生活ノモノガ人ノ健康ヲ毀傷スル程度ハ、田園生活ニ比シテ甚ダ大
デアアル。ソレハ利人羣居スルコトモ先ツ一ノ原因ト爲リマシヤウ、ソレカ
ラ利人羣居スルニ因テ土地ヲ不潔ニシ空氣ヲ不潔ニスル、又生活上ノ困難
モソレニ伴ヒ、隨ツテ種々ナル健康ノ障礙ガ起ツテ來ルノデアリマス。又
人ノ健康ヲ毀傷スル最モ重大ナル原因トナル傳染病ノ如キハ、利人羣居ノ
場合ニ於テ最モ傳播ノ危險ヲ多クスルノデアリマスカラ、ソレ等ノ關係上
都市ニ人口ノ集中スルコト云フコトハ、健康ノ毀傷サレル點ニ於テ甚ダ損失
デアアル。勿論都市ニ人口ノ集中スルコトハ社會ノ大勢デアアルカラ、縱シヤ
衛生上危險ガアツタモ人口ノ都市ニ集中スルコトハ已ムヲ得スデアリマセ
ウ、併シ凡ソドノ位ニ集中スルカラ知ルコトガ必要デアリ、隨ツテ其結果
トシテ來ルベキ危險ヲ豫防スルコトガ急務デアリマスカラ、此人口ノ統計
ハ醫學衛生ノ統計ノ基本デアリ、且ツ人口ソノモノ、研究トシテモ衛生上
決シテ等閑ニ附スルコトハ出來ナイノデアリマス。

人口ノ疎密

人口ガ都會ニ集中スル有様ト殆ト同シヤウナ觀察物トシテ見ナケレバナ
ラスノハ人口ノ密度デアリマス。私共ハ此人口ノ密度ヲ、最近明治四十
一年末ノ事實ヲ府縣別ニ致シテ地圖ヲ製シマシタ。

日本ノ人口ノ密度ハ豫テ御承知デモアリマシヤウガ、全國ヲ通ジマシテ
最近明治四十一年ニ於テハ土地ノ面積ノ一平方キロメートルニ付キマシ
テ百三十五人デアリマス。之ヲ他ノ諸外國ニ比較スレバドウカト申シマス
ルト、即チ他ノ文明諸國ニ比シマシテ土地ノ割合ニ人口ハ決シテ少ナイ方
デハナイノデアリマス。歐羅巴ノ極ク山嶽ノ少ナイ國ト比較致シマスル
幾ラカ稀疎デアアルカ知レマセヌクレドモ、大體ニ多クノ諸國ト比シマシテ
寧ロ多イ方デアリマス。一九九十年ノ事實ナル英吉利(英格蘭及威爾斯)ノ
二百十五人、白耳義ノ二百二十七人、和蘭ノ百五十七人ヨリハ低イ位地ニ
居リマスガ、獨逸ノ百十二人、伊太利ノ百十三人ナドヨリハ多ク、埃地利

ノ八十七人、佛蘭西ノ七十三人、匈牙利ノ五十九人等ニ比スレバ適ニ密ナル方デアリマス、ソレ故ニ隨分人口ハ國ニ充實シテ居ルコト云フテモ宜イ有様デアリマス。ソレカラソレヲ各地方ニ就テ見マス、大體ニ於テ西南ニ密ニシテ東北ニ稀疎デアリマス。更ニソレヲ細カク府縣ニ分ケテ見マスルト、東京大阪ノ如キ大都市ヲ包有スル地方ニ密ニシテ、餘リ人ノ集中セザル左マデ著名ナル都市ノナイ地方ハ人口ガ稀疎デアアルデアリマス。即チ其最モ稠密ナルハ東京ノ一平方キロメートルニ付千五百六十七人デ、大阪ノ千二百一人之ニ次キ神奈川、香川、愛知等次第シテ多イ方デアリマス、又最モ疎稀ナルハ北海道ノ十六人デ岩手ノ五十六人ガ之ニ次テ少ナク、宮崎秋田、青森、福島等其少ナキ方ニ屬シマス、概シテ東北地方ハ稀疎デ中部カラ西南ニカケテ稠密デアリマス。併シ是ハ餘リ細カク申上ケマセズデモ御承知ノコト、思ヒマス。ソコデ人口ノ斯ク疎密アルハ何ニ因スルカト云フニ、夫ニハ隨分種々ノ原因ガアリマシヤウガ、第一ニ交通ノ便ヲ得テ土地ノ開ケタ所ハ人口ガ密デ、文化ノ程度ノ進ミタル所ニハ人口ガ集中シテ來ル、通商貿易地、商業ノ繁盛ナル地、開港地ノ如キハ人口ガ集ツテ來ル傾向ガアル。又政治上ノ關係ニ依リテ、例ヘバ之ヲ小ニシテハ府縣廳ノ所在地デアルトカ若クハ之ヲ大ニシテハ中央政府ノ在ル地ニハ多數ノ人口ガ集中シテ來ル、其他工業ノ盛ナル地遊ニ一般ノ生産地ニハ人口ノ密度ガ増ス、又地勢ノ上カラ言フテ見マスレバ平面ヲ成シテ居ル地ニハ人口ガ集中シ、山嶽丘陵ノ多イ所ハ自ラ人口ガ稀疎デアアル。ソレ故ニ東北ニ人口ノ稀疎ナル地方ガ多クシテ西南ニ人口稠密ノ地方ノ多イト云フノハ、畢竟本邦ノ文化ガ西南ノ方カラ早ク開ケテ來タコトニモ因リマシヤウガ、地勢ノ關係上東北ノ地方ニハ山嶽丘陵ガ多イ、ソレガ爲ニ隨ツテ人口ノ集中スルコトガ少ナイト云ツテ宜イカモ知レスト思ヒマス。ソコデ人口ノ疎密ヲ衛生上カラ觀察致シマスニハ、今日知ラレテ居リマスル山嶽丘陵ヲ含ンダ爾總面積ノ一平方キロメートル又ハ一方里ノ中ニ幾何ノ人口ガ在ルト云フコトヲ比較スル、ソレガ如何ニ健康ニ影響スルカト云フコトヲ見ルハ、餘リ漠

然トシテ居ツテ類リナイヤウニモ思ハレルノデアリマス、モウ少シソレヲ細カイ所マデ觀察シテハドウデアロウカ、私ハソレヲ行ツテ見タイト思フテ居リマス、ガ併シドウモ材料ガ思フヤウニ揃ハナイノデ困ツテ居リマス。ソコデ私ハ斯ク云フコトモ考ヘテ見マス。山嶽、丘陵、原野、耕地ナドヲ含ンダ爾各府縣ノ面積、ソレニ其縣ノ人口ヲ比例シテ見ル、サウシテ一平方キロメートル「トカ一方里トカニ幾何ノ人口ガアリシヤト云フヤウナコトヲ見ルヨリモ、モウ一層進ミマシテ、山嶽、丘陵、原野、耕地等ヲ除キタル人ノ住居地ニ比例シタル人口ノ多少ヲ見ルコトガ寧ろ適切デアリハセスカト思ヒマス。果シテソレガ爲シ得ラレルカドウカ餘程ムツカシイノデアリマスガ、假ニ此民有地ノ宅地デアリマス、統計年鑑ニ依リマスルト、此宅地ガ郡村ト市街トニ分カレテ出テ居リマスガ、其郡村ト市街トノ區別ガ私ニハ能ク分リマセズノデ、ドウモ明瞭デアリマセズデシタガ、郡村ト市街トノ宅地ヲ合セマシテ、其總量ノ中ニドレダケノ現住戸數ガアルカト云フコトヲ見テ、サウシテ更ニ其現住戸數中ノ平均人口ヲ見ルト、ドノ府縣ハ人口ガ稠密デアリ、ドノ府縣ハ稀疎デアアルト云フコトガ山嶽、丘陵、原野、耕地等ヲ加ヘタル總面積ニ比スルヨリモ人ガ幾何ノ土地ヲ占メルカ、幾何ノ氣領ヲ占メルカト云フコトヲ見ルニ於テ、少シク精密デアリヤウニ思ハレマス。ソレデ明治四十一年末ノ現住戸數ト人口トヲ右ノ方法ニ依リテ明治四十二年ノ初メノ土地ノ面積ニ比例シテ見マスルト、全國ヲ通シテ百二十五坪七合ノ中ニ平均一戸アルコトニナルヤウデアリマス。其一戸ノ平均人口ガ五人三三デアリマスカラ、一人ニ對スル宅地ノ平均面積ハ二十三坪六合デアリマス。之ヲ既往ノ各年ニ遡リテ見タリ、或ハ各府縣別ニシテ見マシタナラバ、ドウ云フモノニナルカト思ヒマシテヤリ掛ケテ見マシタガ、チヨット出來マセナンダ、ソレカラ唯五年前ノ同比例ヲ見マスルト、明治三十六年末ニ於テ一戸ニ對スル宅地ノ平均面積ガ百三十五坪六合デアリマス。而シテ一人ニ對スル宅地ノ平均面積ガ二十五坪四合ニナルノデアリマシテ、僅カ五年間ニ一人ノ占メル土地ノ面積ガ凡ソ二坪許リ狭クナツタ

ノデアリマス。是ガ果シテ正確ナル數カドウカハ分リマセズガ、先ヅサウ云フコトニナルノデアリマシテ、從來通りノ比例ヲ其儘存スルコトハ當然デアルガ、ソレト同時ニ今後コンナ調ベモヤツテ見タラドウカト思ツテ居リマス。

ソレカラモウ一ツ、人口ノ疎密、詳ニ言ヘバ稠人聚居スルコトガ如何ニ人ノ健康ニ影響スルカ、群居ガ不衛生ノデアルコトハ理論トシテ異議ナキ所デアルガ、人口ノ疎密ト云フガ如キ漠然タル事實ガ、如何ニ人ノ健康ニ影響スルカヲ數量的ニ示シタルモノハ嘗テ見ナイ、ソレヲ少シク類リアルベク調ベテ見タイト思ヒマシテ、一昨年デゴザイマシタカ、我統計局長閣下ニ依ツテ日本ニ紹介セラレマシタ彼ノトインニス氏ノ比較法ヲ茲ニ應用シテ見マス、其トインニス氏ノ比較法ハ御承知デモゴザイマシヤウガ、之ヲ概説イタシマスルト、統計上ニ二種ノ現象ノ間ニ何等カノ關係アルヤ否ヲ觀察スル方法デアツテ、二種ノ現象ノ數列ヲ比較シテ一方ノ増減カ他ノ一方ノ増減ニ伴フカ、又ハ之ト反對ニ一方ノ増減ガ他ノ一方ノ増減ト相反スルカヲ見ルノデ、兩者ノ間ニ因果ノ關係ガ存スルカ若クハ同一原因ニ支配セラルカ、又ハ全ク何等ノ關係ヲモ有セザルカ若クハ反對ノ原因ニ支配セラルカ等ガ之ニ依テ察セラル、ノデアリマス、其方法トシテハ、比較スベキ兩現象ノ數列ヲ各同數(奇數)ノ階級ニ區別シ、例之ハ本邦ノ府縣別ノ人口ノ密度ト死亡率トヲ比較スルモノトシテ、私ハ北海道ト沖繩トヲ除外シタル残り四十五府縣ニ就テ一階級九府縣ツ、ノ五階級ニ分チテ調ベマシタガ、縱(甲)ニハ人口ノ疎密ノ最モ密ナルモノヨリ順次ニ五階級ト爲シ、横(乙)ハ死亡率ノ多少ノ高キモノヨリ順次ニ五階級ト爲シ、之ヲ豫メ引キタル欄廓内ニ盛り込ムノデアリマス、斯クシタル場合ニ於テ若シ甲乙兩種ノ現象ガ積極的關係ヲ有スルモノナラバ、盛り込ム多數ハ總欄廓ノ高位ノ上端ヨリ低位ノ下端ニ引キタル對角線上ニ集マラネバナラヌ、若シ又兩者ニ消極的關係ガアルモノナラバ右ト反對ニ引キタル對角線上ニ集マルベキ筈デアリマス、トインニス氏ハ右ノ積極的關係ヲ相聯ノ

關係ト云ヒ、消極的關係ヲ反相聯ノ關係又ハ對衡ノ關係ト申シテ居リマス、多クノ場合ニ於テ右ノ如キ單純ナル數列ヲ取ルコトハアリマセズ、數ハアチラコチラヘ散蔓スル、其場合ニ兩者ノ關係ヲ如何ニシテ判スルカト云フニ、先ヅ兩對角線上ニ集マリタル數ヲ算ヘテ見ル、即チ私ノ場合ニハ相聯の對角線上ノ數ハ十三デアツテ、反相聯の對角線上ノ數ハ二デアリマシタ、然ルニ兩者ノ傾向ハ管ニ對角線上ニ集マリタル數ニ於テノミ見ルベキデナイ、此對角線ノ傍線ニ集マリタル數モ亦縱シヤ前者ニ比シテハ強カラズトモ、其相聯反相聯ノ傾向ヲ有スルコトハ勿論デアリマス、依テ之ヲモ算スル、私ノ場合ニ於テ其相聯の數ハ十六、反相聯の數ハ十二デアリマシタ、ソコデ此數ノ價值ヲ定ムルノニ對角線上ノ數ヲ各二ノ價值アルモノトシ、傍線線上ノ數ヲ一ダケノ價值アルモノトシマス、斯クスルト相聯のノ價ハ(16x2)+11=43ニテ反相聯のノ價ハ(12x2)+11=35デアリマス、此四十二ハ積極的ノ價值デアリマスカラ之ヲ+16ト呼ビ十六ハ消極的ノ數デアリマスカラ之ヲ-11ト呼ビマス、而シテ+11ト呼ビ差引シマスル茲ニ+10ト云フモノヲ得マス、之ガ本邦ノ人口密度ト死亡率トノ相聯の關係ノ價值デアリマス、唯コレダケデハ+10ノ比價ガ知レマセズ、ソコデ之ヲ見ル、私ノ場合ニ於テ觀察ノ全數ガ四十五デアリマス、若シモソレガ純相聯のデアツタナラバ+10ヲ得、純反相聯のデアツタナラバソレハ-10デアアル筈デアリマス、併シ中央ノ一欄廓ハ十一ノ相殺點デアリマスカラ、何レニシテモ之ヲ除クトシテ、私ノ場合ニハ之ニ九ダケノ價值ガアリマスカラ、残りノ總價ハ+90カニナリマス、而シテ此對角線上ノ數ハ各二ダケノ價ヲ有スルノデアリマスカラ、比價ノ基數ハ90x11=990デアリマス、換言スレバ甲乙兩現象ガ純相聯のデアレバ+10又純反相聯のデアレバ-10デアリマス、ソコデ前ニ出マシタル+10ト云フ數ハ、此+10ニ對スル數デアリマシテ、若シ人口ノ密度ト死亡率トガ純然タル相聯の關係ヲ有スルモノナラバ+10デアアル筈デアリマスガ、何レノ場合ニモ秩序ヲ亂スベキ原因ガ働ク、此場合ニモ亦其働キガアツテ+90ダケ兩

マス、ソレカラ明治三十一年以後に於てハ同三十二年ノ平均ガ一・四六、次ノ五ヶ年平均ガ一・三三、次ノ三ヶ年平均ガ一・二九デアリマシテ、是亦一定ノ率アルカノ如ク遞減シテ居リマス。ソレ故ニ制度變更ノ影響ガナクトモ、本邦ノ離婚ハ遞減ノ趨勢ヲ有ツテ居ルデアリマス。長クナリマスカラ此離婚ノ事ナゾハ餘リ申シマセズガ、結婚ガ多ケレバ離婚ガ矢張り之ニ伴フテ多イデアラウ、ト云フコトハ何人モ考ヘラル、所デアリマシガ、ソレガ如何ナル關係ヲ有スルモノデアルカト云フコトヲ比較シテ見マシタ。是モトインニース氏ノ比較法ヲ試ミタデアリマス。其結果ハ結婚ノ多イ地方ニハ離婚モ亦多イ、兩者ガ同一原因ニ支配セラル、ノデモアロウシ、又結婚ノ多イコトガ離婚ノ多イコトノ、著シク離婚ノ多イ事ガ結婚ヲ多カラシムルコトノ各因果の關係ヲ有スルノデモアリマシヤウ、即チ相聯の價值ガ三・一九四デアリマシテ、兩者ノ餘程親善デアルコトヲ示シテ居リマス、ソレカラ累年ニ於ケル離婚率ノ高低ハ前ニモ述ベマシタガ、明治三十一年ニ戸籍法ガ實施ニナツテ茲ニ著シキ變動ガアツタ、其變動ノアツタト云フコトハ結婚ニ於ケル同様デアリマスガ、併シ結婚ト離婚トニ於テ其變動ノ形態ニ大ナル相違ガアリマス、即チ結婚ニ於テハ明治卅一年ニ著シク上昇シ、翌三十二年ニ俄然トシテ下降シ、同卅三年以後漸次上昇シテ常態ニ復シマシタ、ガ離婚ニ於テハ明治三十一年同三十二年ト引續キ大ニ低下シ、爾後毫モ上昇スルコトナクシテ遞減シツ、アルノデアリマス、是ハ兩者ノ性質ノ然ラシムルノデアリマシヤウガ、又以テ社會ノ趨勢ヲ察スルノ料トシテ屈強ナルモノデアルト信ジマス。或人ハ此率ノ下降シタ原因ガ、社會道徳ノ進ンデ來テ離婚者ノ割合ヲ少クシタノデアルマイカト申シマシタガ、是ハ必ズシモ右様ニ速斷スル譯ニハ行カヌダラウト思ヒマス。要スルニ戸籍法ノ實施以來離婚ノ手續ガ複雑ニナリマシタ、其一寸シタ心の影響ガ動機トナツテ離婚數ガ少ナクナツタ、又離合常ナク結婚後幾何モナク離婚スルヤウナ者ハ初メカラ公ケノ結婚ヲスル者ガ少クナツタノカモ知レマセズ、即チ離婚者總數ノ中夫妻トシテ經過シタル年數一年未滿ノ者

ガ明治三十二年ニ於テハ二・四五デアツタノガ十年後ノ明治四十一年ニハ其割合ガ一・八七六%ニ下ガツタノヲ見テモ正ニ然ルベシト察セラレマス。ソレ故ニ離婚ノ少クナルト同時ニ所謂内縁ノ夫婦ガ多クナツテ來ル譯デアラウト思フ。其内縁ノ夫婦ノ多イコトハ私生兒ヲ多生スル原因トナリマス。一寸考ヘマスト離婚ノ多イホドノ地ニ於テハ風紀モ頹廢シテ居ヤウ、隨テ私生兒ナドモ多カラウト思ハレマスガ、結果ハ反對テ離婚ノ少ナイ地ニ於テハ内縁ノ夫婦ガ多イ、其間ニ生レタ小兒ハ私生兒ト爲ル、茲ニモトインニース氏ノ比較法ヲ用テ離婚ノ多イコト、私生兒ノ多イコト、ヲ比較シマシタ、所ガ兩者ノ關係ハ反相聯のナルコト其價值一・三・八九%デアリマシタ、勿論之ニハ多數ノ破格ガアリマシテ、其破格ヲ研究スルコトガ一層兩者ノ關係ヲ闡明スル好事實デアリマスガ、今ハ唯斯カル趨向アルコトヲノミ申上ゲテ置キマス。サレバ離婚率ガ下ツタト云フコトハ事ロ喜ブベキ現象ニアラズシテ、却テ暗黒ノ間ニハ喜ブベカラザル事ガ行ハレテ居ルノカモ知レヌト思フデアリマス。先ツ離婚ニ就テハ是ダケニ致シテ置キマス。

（生産）ソレカラ生産ヲ見マスルト多少ノ高低ハアリマスルガ、概シテ増加ノ傾向ヲ有ツテ居リマス。即チ明治十九年ヨリ同二十三年迄ノ五ヶ年平均ハ人口毎千ニ付二七・八六デアツタノニ、次ノ五ヶ年平均（二十四年—二十八）平均ハ二八・〇五デ〇・一九ダケ増加シ、又次ノ五ヶ年平均（二十九—三十三年）平均ハ三〇・三一デ〇・一五デ〇・一六ダケ増加ト爲リ、更ニ第三次ノ五ヶ年平均（三十四年—三十八）平均ハ三二・七〇デ〇・一五ダケ増加ト爲ル、唯最近ノ明治三十九年ガ二八・七八ダケ著シク減シテハ居リマスガ、次ノ同四十年ハ三二・八九、又同四十一年ハ三三・七〇デ〇・一五ダケ増加ト爲リ、國民ノ出生力ガ減シタノデナイコトヲ證シテ居マス。爾テ世界ノ大勢ヲ見マスルニ歐洲諸文明國ニ於ケル出生ハ殆ト萬邦一致ニ漸次減少シテ居マス、例ヘバ英國及威爾斯ハ明治十九年（一八八六年）カラ五ヶ年平均人口毎千三一・四デアツタノガ三〇・五ニナリ二九・三ニナリ二八・一ニナリ

テ近キ明治四十年ニハ二六・三デアリマス。又獨逸帝國ハ、明治十九年カラ五年毎ノ平均人口毎千三六・五ガ三六・三トナリ、三六・〇トナリ、三四・三トナリ、明治四十年ニハ三三・三デアリマス。佛蘭西ニ於テモ同様二三・一ガ二二・三ニナリ、二二・九ニナリ、二二・二ニナリ、明治四十年ニハ一九・七デアリマス。其他ノ諸國ニ於テモ亦、高率ノ地モ、低率ノ地モ殆ト總テ減少シツ、アルノデアリマス。然ルニ此際獨リ本邦ノミハ世界ノ大勢ニ反シテ増加スル、是ハ果シテ何ニ原因スルカ、此問題ハ餘程趣味アルモノデアリマスガ、今ハ大體ヲ説クニ止メテ其原因ヲ解剖スル事ニマデハ深入リセズ事ニシヤウト思ヒマス、隨テ本邦ノ生産率ノ高低ガ何ニヨリテ來リシヤニ就テモ、今ハ省略シテ述ベス事ニ致シマス。又生産ハ之ヲ嫡出子、私生子等ニ分テ觀察スルニ依リテ趣味アルモノデアリマスガ、今ハソレニモ論及シマセズ、唯一ツ結婚ト生産トガ如何ナル關係ヲ有シテ居ルカト云フコトヲ、例ノトインニース氏ノ方法ニ依リテ比較シタデアリマスガ、其結果ハ此兩現象ノ頗ル親善デアルコトヲ示シテ居リマス。結婚率ノ高い地方ニ於テハ殆ト總テ生産ガ多イ、其價値ハ二・〇〇デアアル、此數數百ニ換算シマスルト、生産ト結婚トノ相聯の關係ガ四一・六七%デアアル。即チ結婚ノ多イコトカ生産ノ多イコトノ原因ヲ爲スコト頗ル著明デ、兩者ハ一致ノ歩調ヲ取ルモノト云フテ宜シイ、唯ダ是タケヲ見ルト、本邦ハ誠ニ幸福ノ事態ニ在ル國ノヤウデアリマス。

（死産）然ラバ死産ハドウデアアルカト申シマスルト、本邦ノ死産數ハ少シノ昇降ハアリマスルケレドモ、殆ト弛マズニ唯外洋テ行ク一方デアリマス。明治十九年ニ人口毎千ニ付一・五二デアツタモノガ、同四十年ニハ二・二四ニナツタ、即チ二倍以上ノ増加デアリマス、明治十九年カラ五ヶ年平均ノ平均ガ一・八五、次ノ五ヶ年平均ハ二・五四、其次ハ二・九三又次ハ三・一六デアリマシテ唯々漸次増加スル、併シ其増加ノ歩合ハ段々小サクハナルヤウデアリマス、兎ニ角此現象ハ誠ニ残念デアルト思ヒマス。但シ本邦ノ死産ハ妊娠四ヶ月以上ノ死胎ヲ分娩シタルモノヲ死産ト認メルノデアリ

マシテ、又妊娠四ヶ月ニナリマセズ者デモ、死産證書ヲ提出シテ埋火葬認許證ノ下付ヲ願出タ者ハ、矢張り死産トシテ取扱ハレルノデアリマス。然ルニ世界ノ各邦國ノハサウデナイ。多クノ邦國ニ於テ死産ヲ認メルノハ胎兒ノ月齡ノ六ヶ月以上ノ者デアリマス。中ニハ八ヶ月以上デアアルコトガ正シイト云フ所モアル。ソレハ娩出シタル兒ガ若シ生活シテ居ツタモノデアアルナラバ、ソレガ生育シ得ラル、月齡ヲ有ツテ居ルトノ議論ニ基クノデアリマス、之ニハ一應ノ理窟ガアリマス。本邦ノ規定明治十七年內務省達乙第四十號ガ妊娠四ヶ月以上ノ死胎ヲ死産ト認メルコトニシタノニハ如何ナル根據ガアルカ確ニハ知リマセズガ、妊娠第四月ニ至リマスト妊娠ガ進テ胎兒ト爲リ、其胎兒ハ十乃至十七仙達ノ長サトナリ、此月ニ入りテ男女ノ區別判然シ、輕微ノ運動ヲモ始ムルニ至リ、胎盤モ完成ヲ告ゲルト云フ事デアリマス、此妊娠ノ域ヲ超越シタト云フコト、並ニ男女ノ別ガ判然シタト云フ事ガ受孕以後ノ一大境界線デアリマス、ソレガ斯ク定メラレタ根據デアルヤウニ聞ヘテ居リマス、他ノ諸國ノ六ヶ月ト云フノハカ、理論ノ上カラハ大ナル根據ガナイ、言ハ、唯便宜上ノ定メニ過ギマセズ、胎兒ハ月齡八ヶ月ニ至リマセズケレバ分娩後斷シテ生育致シマセズ、唯五ヶ月マデノ胎兒ハ分娩セラレテモ動クコトモ何モナイガ、第六月ノ胎兒ハ少シク動キ且ツ暫時ニモセヨ呼吸ヲ營ムト云フ位ノコトデアリマス、併シ近頃ハ妊娠シタバカリノ胎兒モ相續ガ出來ルダケノ人格ヲ有シテ居ルトカ云フヤウナ面倒ナ議論モアルコトデアリマスカラ、醫學上胎兒ト認メラル、總テ死産ト見テ宜イカモ知レマセズ。先ツ斯様ニ本邦ト外國トハ死産ノ境域ヲ異ニシテ居ル、其境域ノ異ナルモノヲ比較シテハ正シイ比較ニナラズデハナイカト云フコトヲ能ク聞クノデアリマス。ソレデ試ニ私ハ胎兒ノ月齡ニ依リ死産數ヲ比較シテ見マシタ、御承知ノ通り、明治三十二年以來ハ胎兒ノ月齡ニ依ツテ死産數ヲ知ルコトガ出來マス。其明治三十二年カラ同四十年ニ至ル動態統計ニ依リテ集メテ見マシテ、總數ノ百ニ對スル各月齡者ノ割合ヲ取ツタノデアリマスガ、ソレニ依リマスと云フト妊娠四ヶ月未滿ノ者ガ〇・二

七%、妊娠四ヶ月ノモノガ一・六四%、妊娠五ヶ月ノモノガ四・四〇%アリ
マシタ、ソレデ他ノ文明國ガ取ツテ居ル妊娠六ヶ月以上ト云フ境域ノモノ
ト比較シマスルニハ、本邦ノ死産總數ノ中ノカラ此六・三一%ダケヲ除去シ
タモノデナケレバナリマセス、之ヲ別言スレバ本邦ニ於ケル死産ノ境域ガ
他ノ文明國ニ比シ六・三一%ダケ大デアルノデアリマス。六・三一%ハ言フ
マデモナク誠ニ輕少ナモノデアリマシテ、是ダケノ相違デハ、日本ト外國ト
ハ死産ノ境域ガ違フ、ソレガ爲ニ他邦國トノ死産ノ比較ノ上ニ非常ナル差
ガアツテ、日本ニ死産ノ多イノハ當然ノ現象デアラナドトハ無論云ハレナ
イノデアリマス。サレバ他ノ諸外國ガ取ツテ居ル死産ノ月齡ト同一ノモノ
トシマスルニハ今ノ總死産中ノ九三・六九%ダケガソレニ當ルノデアリマ
ス。而シテ此死産率ヲ他ノ諸外國ト比較シマスルト、是モ私ガ今茲デ喋々
ト申上ゲマセムデモ疾クニ御承知ノコト思ヒマスガ、諸外國中デ最モ多
イ死産率ヲ示シテ居リマスルノハ、和蘭ト伊太利トデアルヤウデアリマス
ガ、伊太利ハ現ニ人口毎千一・四ニ當リマスガ、明治十九年(千八百八十六
年)頃モ矢張り一・四デアリマシタ、其後平均率ガ一・五ニナツタコトデアリマ
スガ、今ハ一・四ニナツテ居ルノデアリマス。又和蘭ハ古ハ人口毎千一・九乃
至二・〇ナド、云フ事モアリマシタガ、明治十九年カラ五ヶ年ノ平均ハ一・
七デ本邦ト略ホ似タモノデアツタノガ、段々減ジテ明治四十年ニハ一・三
トナリマシタ。其他諸文明國中英國ハ現ニ〇・七デ、獨逸ハ一・〇、佛蘭西ハ
〇・九デアリマス、ソコデ本邦ハドウデアアルカト申シマス、先刻申上マ
ス通り六・三一%ダケ他國ヨリ多イノデアリマスルケレドモ、會テ一・七
乃至一・八位デアリマシタモノガ、唯今ハ三・二四ニマデ外ツテ居ルノデ
アリマス、此ノ如キ事ハドウセ流レテ仕舞フ胎兒ナドハドウデモ宜イト
云ヘバソレマデデアリマスガ、人口ノ増加ガ其邦國ノ幸福デアルト云フコ
トガ至當ノ論決デアラナラバ、此死産ノ多イト云フコトハ大ニ注目シテ見
ナケレバナラヌモノデアアルマイカト思ヒマス。殊ニ胎兒死亡ノ原因ヲ探リ
マスルト、御承知ノ通り之ヲ二ツニ分ケルコトガ出來ル、其ハ母體ニ於

ケル原因デ、二ハ胎兒ニ於ケル原因デアリマス。母體ノ原因トシテハドウ
云フコトガアルカト云フニ妊娠ノ各時期ニ於テ自ラ異ナルモノガアリマス
ガ、高度ノ熱性病及腹腔ノ腫瘍等モ原因ヲ爲サスデハナイガ、母體ガ微毒ニ
罹ツテ居ルコト、子宮ノ慢性疾患(殊ニ多キハ淋毒性疾患)ニ罹ツタ者ガ
最モ大ナル原因ヲ爲ス、其他心臓、肺臟、腎臟等ノ慢性疾患モ亦原因トハ
ナリマスガ、母體ニ基因スル胎兒死亡ノ原因トシテ微毒ガ第一位ニ置カレ、
之ニ次テ淋毒性疾患ガ算ヘラル、ノデアリマス。ソレカラ胎兒ノ方ノ原因
トシテハ胎兒ノ胎膜及羊膜ノ感染及胎盤ノ疾病トカ、胎盤ノ剝離シタ事
ヤ、異常位ヲ取ツタコトヤ、臍帶ノ捻轉シタコトヤ網絡シタ事ガ其死ノ原因
トハナリマスガ、胎兒ノ疾病ガ殊ニ重大ナル原因デアリマス、而シテ其胎兒
ノ疾病中デ最モ主ナルモノハ何デアアルカト云フト、是モ同ジク微毒ト言ハ
ネバナリマセス。サウシマスルト胎兒ノ原因モ母體ノ原因モ微毒ガ影響ス
ルコト確實デアツテ、而カモ其大部分ヲ占ムルト言フニ至リテハ實ニ寒心
ノ至リデハアリマセスカ。全國ヲ通ジテ最近ノ死産數ハ十五萬八千人ノ多
數ニ上ツテ居リマスガ、此中ノ少ナカラザルモノガ微毒ノ蔓延ニ影響セラ
レタモノダト云ハ、何人モ驚クコトデアラウト思ヒマス、死産ニ就テハ尙
ホ述ベベキコトガアリマスガ、ソレハ後章ニ譲リマス。

〔死亡〕 本邦人ノ死亡率ハ人口毎千比例二〇ヲ中心トシテ上下ニ微動ア
ルノミデ殆んど静止ノ狀態ニ在リマス。而シテ其動搖ノ後ヲ追フテ討メマ
スト、明治十九年ノ高率ニ四・三七ハ虎列拉大流行ノ影響デ、同二十五年ノ
二・五九モ矢張り虎列拉ノ流行ニ被ツタ侵害デアリマス、同二十六年ノ二
・六五ハ近畿中國地方ニ無慮十七萬人ノ赤痢患者ヲ出シタ年デアリマス
シ、同二十九年ノ二・三七ハ東北地方大海嘯ノ爲メ多數ノ變死者ヲ出シ
タ影響デアリマシヤウカ、同三十二年ノ二・一〇ハ不明デアリマスガ、
或ハ前年カラ急ニ生産率ガ高マツテ來タ、其レカ爲メ乳兒死亡ガ比較的多
カツタノデアリマスマイカ、ソレカラ同三十八年ノ二・一〇ハ日露戰爭
ノ影響カト思ヒマス。斯ノ如キ動搖ハアリマスガ之ヲ平均シテ見マスト明

治十九年カラ五ヶ年ノ平均ガ人口毎千二〇・一六デ、次ノ五年平均ガ二一・
二八、二〇・二〇、一九・九八デ、明治四十年ガ二〇・七一デアリマスカラ、
先ツ静止狀態ニ在ルト云フテ宜シイ、ソコデ此死亡率ヲ世界ノ各邦國ト比
ベテ見ル、ソウスルト茲ニ誠ニ喜バシカラザル一ノ惡現象ガ知ラレ。ソレ
ハ諸君ノ疾クニ御承知ノ事デアリマスガ、殆ト世界ノ各國ヲ通シテ死亡率
ハ減少シツ、アル、殊ニ文化ノ進ミタル邦國ニ於テハ著シキ減少ニナツテ
居リマス、例ヘバ獨逸國ノ如キハ明治十九年カラノ五年平均ガ人口毎千二
四・四デアツタノガ、次ノ五年平均ハ二三・三ト爲リ、其次ノ平均ハ二二・二、
又其次ハ一九・九ト爲リ、明治四十年ハ一八・〇ト爲リマシタ。又英吉利ハ
明治十九年カラノ五年平均ガ同ハ一八・九デアツタノガ、一八・七、一七・七、
一六・〇ト爲リ、明治四十年ハ一五・〇ト爲リマシタ。佛蘭西ノ如キ餘リ死
亡率ノ減ラナイト云ハレテ居ル國デモ同二二・二ノモノガ、二十五年後ニ
ハ一九・九ニナツテ居ルノデアリマス。又日本人カラ見マスルト左マデ先進
國ト云フ程ニ重シテ居リマセス伊太利ノ如キデモ、非常ニ減リ方デアリ
マシテ、二七・三デアリマシタノガ二〇・七トナツテ居リマス。其他ノ各
國何レモ減ラザル所ハ無イノデアリマス。然ルニ本邦ノミハ依然トシテ死
亡率ガ減少シナイ、否各年ニ之ヲ見レバ寧ロ増加スル傾向サヘアル、是等
ハ果シテ喜ブベキ現象デアアルカ、無論喜ブベカラザル現象デアリマシヤ
ウ、然ラハ其原因ガ何ンデアアルカ、是非トモ之ヲ探究シテ、ソウシテ之ヲ
除クコトニ努メネバナラヌト思フノデアリマス。ガ併シ其研究ヲ爲スニ當
リ第一ニ注意シナクテハナラヌ事ハ、本邦人ノ生産率ガ他ノ諸國ト反對ノ
歩調ヲ取リテ増加シツ、アルコトデアリマス。人ハ生後一ヶ年以内ニ死亡
スルコト最モ多イ、本邦ニ於テハ出生者ノ約七分一ハ一歳未満ニシテ死亡
スル、ソレ故ニ生産ガ多ケレバ死亡ノ率ノ高クナルノハ當然デアリマス。或
人曰ク文化ノ程度ノ進ムニ從テ出生數モ減ジ死亡數モ減ズル、多ク生レテ
多ク死スルノハ文化ノ程度ノ低イ徵證デアルト、一般生物ノ原則トシテ高
等ノ生物ハ高等ノ生物ホド生殖力ガ弱クテ其壽命ガ高イガ下等ノ生物ハ澤

山ニ生殖スルケレドモ大部分ハ死滅シテ餘ス所ハ僅少ニ過ギストカ申シマ
ス、此理論カラ言ヘバ日本人ナゾハ甚ダ有難クナイモノナリマス。其必
然的關係ヲ別ニシテ他ニ死亡率ヲ減ゼザル大ナル原因ガアリハセスカ、其
原因ニ就キマシテハ固ヨリ一朝一夕ニ之ヲ斷ズルコトハ出來マセスケレド
モ、私ハ、本邦人ノ乳兒死亡ガ一向減少シナイ、寧ロ多クナルソレガ一ツ、
ソレカラ死ニ誘フベキ重大ナル原因トシテ、殊ニ注目シテ見ナケレバナラ
ス結核、瘧、アルコレラニ關係アル諸病ノ如キモノガ本邦ニ於テ益多ク
ナル傾ガアルソレガ又一ツ、是等カ他ノ諸邦國ト比ベテ見テ、日本ノ死亡
率ノ降ラヌ原因ノ中ニ算ヘラルベキモノデアリハシナイカト思ツテ居ルノ
デアリマス。是等ニ就テハ後ニ再ビ申上ゲヤウト思ヒマス。

此場合ニ於テ前來申上遺シテ置キマシタ、人口動態ニ關スル諸般ノ比較
ヲ茲ニ一括シテ申上ヤウト思ヒマス、先ツ第一ガ生産ト死産トノ關係デア
リマス。是ニハ二ツノ反對ナル見方ガアリマス、即チ生産ガ多ケレバ死産
モ亦多カロウト云フ見方ガ一ツ、他ノ一ツハ死産ガ多ケレバ生産
數ヲ減殺スルカラ生産率ヲ減ズルデアロウト云フ見方デアリマス、甲ハ生
殖力ノ高マツタソレガ生産ニモ死産ニモ分配セラル、モノト考ヘルノデ、
乙ハ生殖力ニハ差ガナクテ妊娠後ノ母體ナリ胎兒ナリノ健康ヲ傷害スル原
因ガ大キナツテ來タト考ヘルノデアリマス、ソコデ事實ガ兩者ノ何レニ
傾クカ、私ハ甲ニ傾クコトガ國民健康ノ關係上比較的有利デアルト思ヒマ
ス、即チ此兩現象ヲ例ノトインニース氏比較法ニカケテ見マシタ、所ガ其
結果ハ生産ガ多ケレバ死産モ亦多イト云フ方ニ傾イテ居ルノデアリマス、
勿論部分部分ニハ乙ノ考ノ通りノ地方モアリマスガ、全國ヲ通ジテハ死産
ト生産トガ同歩調ヲ取ル、其親善ナル關係ハ、十ニ一デアツタノデアリマ
ス。之ヲ換算イタシマスト兩者ノ相聯的價值ハ二九・〇四%ニ當リマシテ、
生産ガ多イ所ニハ死産モ亦多イ、又死産ガ多ケレバ生産モ亦多イト云フコ
トヲ一般ニ考ヘラレノデアリマス。次ニ前ニモ申上マシタ、生産ガ多ケレ
バ死亡數モ亦多イト云フコト、是ハ動スベカラザル定則ノ如ク人カラ見ラ

レデ居ルノデアリマス。ソコ生産率ト死亡率トノ關係ガドレ程親善デア
ルカヲ同ジトインニス氏ノ方法ニ依ツテ比較シテ見マシタ、所ガ之ハ豫
期シタル程ニ一致シテハ居リマセヌ。一致シナイコトハアリマセヌケレド
モ左マデニ緊合シテ居リマセヌ。即チ親善ナル程度ハ「¹」デアリマシテ
矢張り一般ニハ生産ガ多ク死亡モ多イニ相違ナイノデアリマスガ、
豫期シタル程ニ高クハナイ。之ヲ換算シマスルト兩者ノ相聯の關係ガ二
二・二％トナルノデアリマシテ、其ノ親善ナル價值ハ結婚ト生産、生産ト
死産等ノ如ク著シク親善デハナカッタノデアリマス。モウ一ツハ死亡率ト
死産率トノ關係ハドウデアルカ、死亡ガ多ク死亡率モ多イカ、人ヲ死亡
セシムル位ニ不健康ニ誘フベキ原因ガ多クナツテ來ルナラバ、母體ノ胎内
ニアル胎兒モ亦同ジヤウニ健康ヲ障害セラレルコトガ大デアルカドウカト
言フコトヲ比較シテ見タノデアリマシテ、唯常識デ考ヘマシタ處デハ死亡
ガ多ク死亡率モ多イデアラウ、一皮被ツタ母體ノ胎内ニ在ル
コトデアルカラ風常リモ少ナイ、害因ノ逼迫ガソレ程強クナイカトモ思ハ
レマスケレドモ、死亡ト死産トノ多イコトガ一致スルノガ當然デアラシ
ク考ヘラレル、處ガ豈計ランヤ此二ツノ現象ハ甚ダ親善ナラヌ關係ヲ有ツ
テ居リマス、即チ比較ノ結果ハ「²」デアリマシタ、兩現象ノ親善ナラザル
程度即チ反相聯の價值ガ九・七％ニ該ツテ居ルノデアリマシテ、死亡ガ
多イカラ死産モ亦多イト云フコトハ云ヘナイ、死亡ガ多イ位ノ處ニハ寧ろ
死産ガ少ナイノデアリマス、此結果ガ果シテ真相ヲ示シタモノデアリマシ
ヤウカ、私ハ此場合ニ甚ダ残念ニ思ヒマスコトハ此著シク多ク死産ノ中ニ
眞ニ死産デナイモノガ包含シテ居リハセヌカト考ヘナケレバナラヌコトデ
アリマス、何故ニ爾カク不愉快ナ考ヲ起スカト申シマス、寔ニ悲ム可キ惡
習慣ガ本邦ノ或ル部分ニ行ハレテ居ルガ爲メデアリマス、ソレハ嬰兒ノ
故殺デアリマス、折角生レタ小兒ヲ原ノ開黒界ニ返シテ仕舞フ、此惡イ
習慣ガ大部各地方ニアルノデアリマシテ、其地方ニ依リマシテハ死産ノ殆
ンド半数ハ嬰兒故殺デアラウナドト、平然トシテ言フテ居ル人ガアリマス

ガ、要スルニ乳兒死亡トシテ取扱ハレ可キモノガ、死産トシテ取扱ハレテ居
ルノガ多イカモ知レマセヌ。トインニス氏比較圖ヲ仔細ニ觀察スルニ於テ
爾カク思ハル、コトガ多イノデアリマス。ソコデ前ニ立テ戻リマシテ、胎兒
ノ月齡ニ依リ別ツタ死産ノ比例ニ就テ一寸申上マス、此比例ニ依テ見マス
ルト死産中一番大多數ヲ占メテ居ルモノハ月齡十ヶ月ノ胎兒デアル、要ス
ルニ臨月ニナリマシタ胎兒ガ總死産ノ三・三％ガデアリテ、正ニ全數ノ
三分ノ一ニ當ルノデアリマス、ソレニ次デ多イモノハ九ヶ月ノ月齡ナル胎
兒デ二・六％アル、扱テ此九ヶ月ト十ヶ月トノ胎兒ハ、若シ健康ニシ
テ生レタナラバ、生存シ得ラルベキモノデアリマス、然ルニソレガ不幸ニ
シテ死亡シタモノト見ヘテ、總死産ノ五五・九％ヲ占ムルニ至リマシタ、
併シ此五六％中ニハ幾何ノ悲ムベキ數字ガ含マレテ居ルカ、ソレハ能ク考
ヘテ見ナケレバナラヌコト、思フノデアリマス、之ハ餘リ他ノ國ナドヘ公
ニシクナイ事柄デハアリマスケレドモ、研究上ノ必要ニ依テ斯クハ一言
致シマシタ。

〔乳兒死亡〕 次ニ各年ノ乳兒死亡ガ如何ニ消長シツ、アルカヲ見マシヤ
ウ。外國ノ人ガドウイフコトヲ云フテ居ルカト申シマス、日本ニ於ケル
乳兒死亡ハ餘程少ナイデアラウ、日本人ニハ極ク善良ナル習慣カアツテ、
母親ガ自身ニ其乳房ヲ以テ乳兒ヲ哺育スル、ソレ故ニ乳兒ノ死亡ガ甚ダ少
ナイデアラウト云フテ居リマス。今度ノ博覽會ナドニ就キマシテモ、博覽會
ノ事務所カラ當方ヘ申シテ來マシタ手紙ノ中ニ日本ニ於ケル乳兒死亡ノ間
題ハ殊ニ缺ク可カラザル重要ナモノトシテ出品シテ貰イタイ、並ニ小兒ノ
死亡ニ就テハ精シイ調ベヲ出シテ呉レト云フテ來テ居リマス。ソレ程ニ他
ノ國カラ本邦ノ乳兒死亡ヲ注目シテ見ラレテ居ルノデアリマス。御承知ノ
通り乳兒死亡ニ就テ辛イ經驗ヲ嘗テ來マシタノハ獨逸デアラウト思ヒマス
ガ、嘗テ四十年前ノ前ニハ人工營養法ガ盛ニ行ハレマシテ、乳兒ヲ養育ス
ルノニ人工營養法ヲ取ラスノハ母親トシテノ義務ヲ盡サルモノデアルト
マデ云ツタコトモアツタ位デアリマシテ、皆人工營養ヲ盛ニヤリマシタ、

ソレガ又小兒ヲ養フ一ツノ見得ニシテ居ツタヤウナ時モアツタト云フコト
デアリマス、然ルニ段々調ベテ見マスルト乳兒ノ死亡數ガ非常ニ多イ、其乳
兒ノ死亡者ハ殊ニ人工營養ヲ行フ者若クハ里親ニ預ケタ小兒ニ於テ多イコ
トガ知ラレタ、ソコデ是レ決シテ忽セニスベカラザルモノデアルト云フノ
デ、サスガハ學問ノ國デケアリマシテ色々調査ヲ行ヒマシタ、サウシテ終
ニ乳兒保護ノ法令ナドモ出、又乳兒ノ預リ所等モ特ニ公ノ費用ヲ以テ出來
マシテ、廣ク乳兒ノ保護ガ行ハレタノデアリマス、ソレデ普瀋西ノ例ヲ見マ
スルト一之ハ千八百八十六年(明治十九年)以後ノコトデアリマスカラ、餘
程少ナクナツテカラノコトデアリマスガ一千八百八十六年カラ九十年迄ノ
五ヶ年平均ガ生産數ノ千ニ對スル一歳未満ノ乳兒ノ死亡割合ガ二百八デア
ツタ、二百八ト云フ多數デアリマシタモノガ、銳意熱心ニ此乳兒ノ保護ヲヤ
リマシタ爲メニ、次ノ五年平均ハ二百五ニナリ、其次ハ二百一ニナリ、其又
次ハ百九十九ニナリ、更ニ最近ハ百七十七ニナリ、百六十八ニナリ、時ニ百六十
以下ニナラントスル狀態ニナツテ居ルノデアリマス。又英吉利ニ於テハ始
メカラ乳兒ノ保護ガ行キ届イタ處デアリマシテ、殊ニ獨逸ナドニ於ケル乳
兒ノ健康ヲ毀傷セラレル原因結果ガ明カニ知ラレマシタノデ、爾來其邊ニ
餘程注意セラレマシテ、嘗テハ(明治十九年ヨリ五年平均)生産千ニ對スル
乳兒ノ死亡ガ百四十五デアリマシタモノガ、百五十一トナリ百五十六トナ
リ少シク増多シタ事モアリマスガ、又再ビ減少シテ百二十八ト爲リ、百三十
二ト爲リ、今ハ百十八トナリマシタ。斯ヤウニ世界ノ各邦國ガ其乳兒ヲ保
護スル事ハ、自己ノ後繼者ヲ養フ就中其邦國ノ幸福ヲ求メルガ上ニ乳兒ヲ
保護スルコトガ必要デアルト云フノデ、乃チ乳兒ノ保護ニ關シテハ殆ンド
到ラザルナクヤツテ居ルノデアリマス。ソレ故ニ何レノ邦國ニ於テモ乳兒
ノ死亡數ハ唯減少スル斗リデアリマシテ、殊ニ匈牙利ノ如キハ嘗テ二百五
十ノ多數ニ居ツタ者ガ、今日デハ二百未満則チ百九十九ニマデ減少シタル
有様デアリマス。然ルニ本邦ハドウデアルカト云フト、ズット以前ハ統計
ガ不完全デアツタト云フ言フヤウナモノデアリマシヤウガ、明治十九年

ノ調ベニ依リマス生産數ノ千ニ對シテ乳兒ノ死亡數ガ九十五デアツタ、
其後百以上ニナリマシテ漸次増加致シテ參リマシテ今日ニ及ビマシテハ百
五十餘、殆ンド百六十ニ達スル迄ニ到ツテ居ルノデアリマス、之カ平均ヲ取
ツテ見マス、明治十九年カラ五ヶ年ノ平均ハ百十六デアツタノガ、次ノ
五年平均ハ百四十七ニナリ、其次ハ百五十三ニナリ、其次ハ百五十二ニ
ナリ、最近ノ明治三十九年カラ同四十二年マデノ三ヶ年平均ハ百五十四ト
ナリマシテ、唯々増加スル計リノ狀況デアリマス。再ビ言フ世界ノ諸國ニ
於テハ段々乳兒ノ死亡割合ガ減少スルニ拘ハラズ、本邦ハ段々増加シテ行
クノデアリマス、此乳兒死亡割合ノ増加ハ全體ノ死亡率ノ増加ノ上ニ大ナ
ル影響ヲ及ボスデアラウト云フコトハ明カナコトデアリマシテ、先刻申シ
上ゲマシタヤウニ本邦ノ死亡率ノ減少セザルハ種々原因モアリマセウガ、
此乳兒ノ死亡割合ノ増加モ又其一原因ト考ヘナケレバナラヌデアリマ
ス。次ニ乳兒死亡ノ割合ヲ行政區劃ニ依リテ觀察シマス、東京、大阪、
京都、愛知等ノ大都市ヲ包有スル地方ト、及一般ニ東北ノ地方ニ於テ其割
合ガ高クテ、西南ノ地方ハ其割合ガ甚ダ少ナイ、其大都市ヲ包有スル地ニ
多イコトハ當ニ然ルベシトスルモ、東北地方ニ多イト云フコトガ甚ダ了解
シ難イ、或ハ文化ノ程度ガ乳兒死亡ノ多少ヲ來タス原因トモナル、ソレデ
アリマスカラ一面カラ云フト、乳兒ノ死亡割合ノ高クナツタルト云フコ
トハ、社會生活ガ段々複雑ニナツテ、今迄ハ社會ト接觸セザリシ女子ガ自
ラ出デ、働カナケレバナラヌヤウナ事態ニナツテ來タ、ソレ故ニ自身ニ乳
兒ヲ哺育スルコトガ出來ナイ爲メニ、乳兒ノ死亡數ヲ著シク高メルコトニ
ナル、之ハ一般ニ通ジタル理窟デアリマスガ、若シ文化ノ程度ガ進ミタル
ガ爲メデアルトスレバ、本邦ノ文明ハ東漸シツ、アル、從テ東北地方ニ比
シ西南地方ハ文化ノ程度ガ進ミデ居ルト唱ヘラレル、ソレニモ拘ハラズ
西南ノ地方ニハ少ナクシテ、文化ノ程度進ミマズト唱ヘラレテ居ル東北ノ地
方ニ多イト云フコトハ、餘程奇ナル現象ト云ハナケレバナラヌ、恰モ反對
ノ結果ヲ示シテ居ルヤウニ思ハレルノデアリマス、ソレ故ニ此乳兒死亡ニ

關シテハ唯社會ノ生活狀態ガ複雜ニナツタト云フヤウナ、單一ノ理由ノミ
ヲ以テ解説スルコトハ出來ナイ、深ク考ヘネバナラヌコトガアルノデアリ
マスガ、今ハ多ク申サヌコトニ致シマス。ソコデ此項ノ終リニ例ノトイン
ニスノ比較ヲ行ヒマシタ其一二ヲ申上ケルコトニシマシタ、其第一ハ
一般ノ死亡ガ多クレバ乳兒ノ死亡モ亦多カラウト云フコト、第二ハ生産ガ
多クレバ乳兒ノ死亡モ亦必ラズ多カラウト云フコト、第三ハ死産ト乳兒死
亡トノ關係、第四ハ私生兒ノ多少ト乳兒死亡トノ關係先ヅ是等ノ事ヲ見タ
ノデアリマス、ソレデ第一ニ一般ノ死亡ト乳兒死亡トノ關係、生産ノ多少
ガ死亡率ト動カストハ會テ知ラレタ事實デアアル、サレバ乳兒死亡ノ割合ハ
總死亡ト同一ノ歩調ヲ取ルモノデアラウトハ豫期シタ所デアリマシタ、即
チ人口ニ對スル一般ノ死亡率ト前來述ベタ乳兒ノ死亡ノ割合トヲ比較シテ
見マス、兩者ノ親善ナル程度ハ、 $\frac{1}{10}$ デアリマシタ、之ヲ換算スルニ、
兩現象間ノ相聯的ノ價值ハ八・〇五%ニ當ルノデアリマシタ、勿論親善デ
ハアルガ豫期シタ程ニ親善デハナカッタ、ソコデ考ヘマスノニ是ハ府縣ト
云フ行政區劃ニ依テ見タノデアリマシタ、其府縣内ニハ都市モ村落モ包有
シテ居ル、ソレデハ確カナル指示ヲ得難イト云フ人モアルノデ更ニ都市ト
都市トノ比較ヲ試ミヤウカトモ思ヒマシタノデアリマスガ、時ガ許サズシ
テソレハ見ルコトガ出來マセヌデシタ。次ニ生産率ト乳兒死亡ノ割合トガ
同ジ歩調ヲ取ルカドウカヲ見マシタ、之ハ其親善ナル程度ガ $\frac{1}{10}$ デアリ
マシタ、即チ此兩現象ノ相聯的價值ハ二・三六%ニ當リマス、是ハ出生
ガ多クレバ初生兒ノ數ガ多イコト勿論デ、初生兒ノ數カ多クレバ出生ノ増
加スル割合ニ伴ツテ乳兒ノ死亡ノ割合ハ寧ろ高マル、強チニ育兒力疎略ニ
サレルト言フ譯デアリマスマイガ自然ニ薄弱ナル小兒モ多キ割合ヲ増ス
モノト見ヘマス。ソレカラ死産トハドウデアアルカト申シマス、是ハ死亡
トノ間ニ得タル係數ヨリモ一層兩者ガ不親善デアアルコトヲ示シマシタ、即
チ $\frac{1}{10}$ デアリマシタ、兩現象ノ相聯的價值ハ二・五%デアリマシタ、此
係數ノ低イノハ私ハ寧ろ當然カト思フ、ナゼカトナレバ乳兒死亡中ノ大部

分ハ生後十五日以内ノ死亡者デアリマシタ、死産ノ多イコトハ一面ニハ是
等薄弱ニ生産スベキ者ヲ胎内ニ於テ淘汰スルモノト見テ宜シイ、ソレ故ニ
死産ガ多クレバ生後幾何モナク死亡スルヤウナル生兒ノ數ヲ減スルハ當然
ノコト、思ヒマス、從テ死産ト乳兒死亡トカ一致ノ歩調ヲ取ラザルガ寧ろ
正シイ指示デアロウト信ジマス。次ニ私生兒ノ多少ト乳兒死亡トノ關係、
此比較コン全ク緊合スヘキモノト豫期シマシタ、然ルニ驚クベシ兩者ノ關
係ハ $\frac{1}{10}$ ヲ示シ其相聯的價值ハ唯僅ニ一・三九%デアッタノハ何タル奇觀
ゾ、唯々雖然タラザルヲ得ナカッタノデアリマスガ、之ヲ仔細ニ觀察シマ
スルト、其奇觀ナル所ニ大ナル真理ガ含マレテ居ルノデアリマシタ、前ニ
疑ヲ存シマシタ東北地方ニ乳兒死亡割合ノ高カッタコトモ、之ニ因テ臆
ナガラ理解シ得ラル、ノデアリマス、併シ今ハ其細目ニ直ルコトヲ避ケマ
ス。

(生産、死産及死亡ノ月別) ソレカラ今申上ゲマシタ生産、死産、死亡
ノ三ツヲ、明治三十二年カラ九ヶ年間ノ事實ヲ蒐メテ、夫ニ依テ月別比例
ヲ取テ見マシタ、左ガ生産、中ガ死産、右ガ死亡デアリマス。本邦人ノ死亡
ハ概シテ八月、九月ニ最多數デアルト云フコトハ殆ド一ノ定型トモ見ラレ
マス、此場合ニ於テモ矢張八月ガ最も高ク九・八二%デ、九月ガ之ニ次
九・六八%デ、ソレカラ一月ガ八・七八%、三月ガ八・七一%、二月ガ七・三
七%デ最も少ナイガ六月ノ六・九六%デアリマス。然ルニ他ノ諸外國ノ事
例ヲ見マスルト、此月別ニ大ニ異ナル點ガアル、ソレハ歐洲ノ諸文明國ハ
殆ド總テカ夏期ヨリモ冬期ニ多數デアアルコトデアリマス、人ヲ死ニ誘フベ
キ害因ノ逼迫ハ夏ニ多イカ冬ニ多イカ、別言スレバ氣温ノ高イ時期ニ多イ
カ低イ時期ニ多イカ、概シテ肺結核ノ如キ、肺炎及其他ノ呼吸器疾患、腦
神經系病、先天性弱質等ハ冬期ニ多ク、急性傳染病、腸ノ疾患等ハ夏期ニ
多イ、ソコデ冬期ニ多イ歐洲ノ邦國ハ何レモ比較的急性傳染病ノ少ナイ國
デ、歐洲デモ腸胃扶助如キ急性傳染病ノ多イ邦國、例ヘハ露西亞ノ西班
牙ダノ伊太利ダノハ歐洲ノ例外國トモ言フベク夏期ニ死亡スル者ガ多イ、

伊太利ノ千八百六十七年代ノ統計ト今日ノ統計トヲ比スルト、夏期ノ死亡
數ガ今日著シク減ジタノヲ見レバ殊ニ其間ノ消息ガ知ラレル、私ハ此事態
ニ鑑ミテ本邦ノ夏期ニ死亡數ノ高イノガ定型デアアル夫レヲ甚ダ残念ニ思ヒ
マス。ソレカラ本邦人ノ生産モ一月(一〇・九六%)、二月(九・四六%)、三
月(二〇・七九%)ニ最も多イコトガ年々ノ定型デアアル、生産ノ月別ノ型態
ハ其邦國ノ氣候ノ異ナルニ由リテ大ニ相違スルモノデアリマス、勿論社會
時事ノ影響モアリマスガ、ソレハ多クハ一時ノ現象ヲ持續シテハ現ハレナ
イ。本邦ノ此定型ハ前年ノ三月、四月、五月若クハ之ヨリ一ヶ月位前後シ
タ時期ニ於テ妊娠スル者ノ多イノガ斯ク定型トナリテ現ハレルノデアリマ
ス。本邦ニ於ケル三、四、五月ハ所謂春陽驕蕩ノ候デ陽氣萌發スル時期デ
アリマスカラ、アラユル生物ト共ニ人ノ心モ春メキ隨テ妊娠スル機會モ多
イモノト思ハレマス。此關係ハ世界ヲ通ジテ同一デアリマシタ、歐洲ノ諸
國ハ一月ニ多ク二月ニ少ナク三月最モ多ク四月五月多ク十、十一ノ二月
ニ最も少ナイノカ定型ト云フテモヨイカト思フ、併シ伊太利アタリハ多少
此時期ガ早クナリマスガ大體ニハ大差ガナイ。又南米ヲ見マスルト、私ハ
ベノス、アノレスノ統計ヲ見タノデアリマスガ、アルゼンチンナドデハ八、

ル、之ハ月齡九ヶ月ノ死胎ガ多イ爲メニ一ヶ月後ヘサガツテ居ルコトガ知
レルノデアリマス。此死産ノ月別ハ獨リ本邦バカリ斯様ノ型ヲ取ルノデハ
ナイ、歐洲諸國私ノ知テ居ル所ハ獨逸、佛蘭西等モ亦南米ニ於テモ生産ト
ノ關係ガ殆ド本邦ト同一デアリマス。

(人口増殖率) 次ニハ人口ノ増殖率デアリマス、茲デ述ベマスル人口ノ
増殖トハ、外國ニ依ル増加デナクテ、所謂内因ノ増加デ、一ニ自然増加ト
モ云フ、生産ト死亡トノ較差ヲ人口ニ比例シテ見タソレデアリマス、此増
殖率ハ外國ノ働キヲモ包含スル所謂増加率ヨリモ衛生上ニハ適切デアリマ
ス。勿論増殖率ガ高クテモソレガ直ニ出生ガ多クテ死亡ノ少ナイ微證デア
ルトハ言ハレマセヌガ、大體ニ於テ増殖率ノ高イ所デハ出生モ多カラツ、
死亡モ少ナカラウト云フ概觀ヲ下シ得ラル、ソレノミナラズ、増殖率ノ
著シク高低ナキ地ニ於テハ、變動の死亡原因ノ働キ方ガ少ナイ、先ツ急性
傳染病等ノ少ナイ所デアアルコトガ概觀シ得ラレマス。ソコデ本邦ノ増殖率
ヲ見マス、明治二十七八年前ニ於テハ其變動ガ著シカッタ、是ハ虎刺列ヤ
赤痢ヤノ流行ガアツテ非常ニ人ノ死亡シタ爲メデアリマシタデシヤウ、
又其頃ハ統計ノ調査モ今程ニハ確カデナカッタノカモ知レマセヌ、併シ近
年ニ至テ餘程平衡ヲ得テ來マシタ、明治二十九年カラ同三十三年マデノ五
ヶ年平均ハ人口毎千ニ付一二・二二、其次ノ五ヶ年平均ハ一二・三三、最近
ノ明治四十年ハ一二・三三デアリマス、即チ何ホドカツ、高クナル傾向ヲ有
ツテ居マス。

由ヲ以テ論證スルコトガ出來ヌ、否其同型デアアルコトガ寧ろ生産ノ定型ノ
由來ニ向テ疑ヲ掃マネバナラヌヤウニ思ハレルノデアリマス、ガ併シ一タ
ビ胎兒ノ月齡ニ由リテ分チタル死産數ヲ見テカラ此疑ガ釋然タルニ至リマ
シタ。即チ前ニ申シタ如ク其月齡九ヶ月、十ヶ月ノ胎兒ガ大部分ヲ占メテ
居ルノデアリマスカラ、矢張生産ニ於ケルト同ジヤウナ形ヲ取ルコトガ何
モ怪シイ譯デナイノデアリマス。殊ニ生産ノ場合ハ十二月ガ若干高クナツ
テハ居ルガ、左マデハ高クナイノニ、死産ノ場合ハ十二月ガ多クナツテ居

(人口ノ年齡構成及死亡者ノ年齡構成) 茲ニ於テ死亡者ノ年齡構成ヲ見
ヨウト思ヒマスカラ、同時ニ人口ノ年齡構成ヲモ見マス。人口ノモ又死亡
者ノモ其年齡構成ハ各五歲階級ニ分ケテ掲ゲマシタ、更ニ之ヲ一歲別ニ分
ケマス、餘程面白イ形ヲ呈スルノデアリマスシ、又此人口ノ年齡構成ヲ唯
總人口ニ於テ見ルノミナラズ、更ニ之ヲ都會ト郡村トニ分ケテ見マス、一
層興味ガ深カツタノデアリマスシ、又ソレヲ配偶ノ有無ニ由テ別ケマス
更ニ一層面白カツタノデ、ソレニ依テ社會事情ノ或ルコトヲ探クル便ニ

モナルノデアリマスガ、夫等ハ一切致シマセヌノデシタ。人口ノ年齡構成ヲ見マシテ、茲ニ出來マシタル三角ガ正三角ヲナシタル場合ハ先ツ普通ノ幸福ノ事態ニ在ルモノト見テ宜カラウ、若シ其三角ノ基底ノミガ著シク擴ガリマシタル場合ニハ、將來ハ兎モ角モ、現ニハ必ズシモ幸福ノ事態ト云フコトガ出來ナイ、ソレハ幼者ノミガ多數ノ場合デアツテ、其幼者ガ成長シテ勞働力ヲ發揮スレバヨイガ、勞働力ヲ得ル他ニ移住スル者デアレバ餘リ宜シクナイ、又中部ガ大ニ膨脹シタル場合ハ、中年ノ勞働ノ人口ガ多イノデアルカラ勿論幸福ノ場合デアルガ、若シソレガ一時ノ現象トシテノミデハナイカ、永久ニ其幸福ヲ保チ得ラル、カ、之ヲ繼續的ニ調査シテ見ルコトガ必要デアリマス。今此年齡ノ構成ニ就テハ餘リ精シイ事ハ申上ゲマセヌガ、人口ノ觀察ヲ爲ス場合ニイツモ年齡ヲ見ルコトヲ忘レテハナラヌ、例ヘハ都市ガ發達スレバ其死亡率ガ減少スル、ソレヲ見テコハ衛生機關ノ働キニ依ルモノト謳歌スル人ガアル、勿論衛生機關ノ整備モ死亡率ノ減少ニ向テ働イテハ居リマシヤウ、ケレドモ都市ノ膨脹ハ中年ノ勞働人口ノ集中デアリマス、中年ノ人口ハ死亡率ガ低イ、其死亡率ノ低イ人口ノ集中カ都市ノ死亡率ヲ減少スル働キアルハ勿論デアリマス、ザレハ是ハ都市ノ死亡率ヲ論スルニ當リテ其年齡構成ヲ見サルニ由ル過誤ノ判斷デアリマス。次ニ此年齡構成ヲモウ少シ約メテ見ル、即チ現ニ勞働スル年齡ノ者ト未ダ勞働ノ時代ニ入ラザル者ト、嘗テ大ニ働キタル功勞者トノ此三種ニ分ケテ見ル、其勞働年齡ニ就テハ御承知ノ通り隨分種々ナル區別法ガアルヤウデアリマシテ、英吉利ノハ十五歳以上六十五歳以下ヲ勞働年齡ト爲シ、佛蘭西ノハ二十歳ヨリ六十歳トシテアルノモ、又十五歳ヨリ六十歳トシテアルノモアリマス、又獨逸ノモニ十五歳ヨリ七十歳トシテアツタノヲ見タコトモアリマス、私ノ今茲ニ有ツテ居リマスノハ英吉利ノ例ニ倣ツテ調ベタノデアリマシテ、本邦ト英吉利、獨逸、佛蘭西ノ三國トヲ比較シテ見マシタ、ソレデ十五歳以上六十五歳所屬勞働年齡ニアルモノガ總人口ニ對シテドウ云フ割合デアルカラ見マス、本邦ニ於テハハ明治三十六年ノ調査

テアリマスガ、男女ヲ通ジテ六一・三五%デアリマス、然ルニ英吉利ニ於テハ六二・九一%、佛蘭西ニ於テハ六五・六九%、獨逸ニ於テハ六〇・三二%ニ當リタル居ルデアリマス、之ヲ見マス佛蘭西ニ勞働シ得ル年齡ノモノカ最も多クシテ獨逸ニ一番少ク、恰モ獨逸ト英吉利トノ中間ニ日本ガ在ルヤウニナツテ居ルデアリマスガ、乍併佛蘭西ハ御承知ノ通り出生率ノ非常ニ少ナイ國デアルカラ六五・六九%ノ多數ガアツテモ、ソレガ決シテ幸福デナイカモ知レヌノデアリマス、日本ハ餘程獨逸ニ近イ形態ヲ表ハシテ居ルト云フテ宜シイカト思ヒマス。殊ニソレヲ男女別ニ分ケテ見マスト殆ンド獨逸ト彷彿タルコトヲ知ルデアリマス、此年齡構成ニ就テハ述ブベキコトガ多イデアリマスガ今ハ唯コレガケニシテ置キマス。次ニハ死亡者ノ年齡構成、コレハ九ヶ年ノ平均ヲ取テ掲ケマシタ、之ニ依ルト男女トモニ幼弱ナルモノニ死亡ガ多クシテ、五歳以上ニ及テ俄然トシテ少ナクナリ、更ニイクラカゾ、上ツテ六七歳ニ於テ最高點ニ達シテ居ル、高年ニ及テ少ナクナルノハ、死スベキ人口ガ少ナクナルカラデ、斯ウナルノガ當然デアリマス、之ハ餘リ價值アルモノデナイデアリマスガ、人口ノ年齡構成ト併觀スルノ必要カラ茲ニ掲ゲマシタ、ソウシテ詳シイ說明ハ略シマス。ソレカラ出生、死亡、死産、乳兒ノ死亡總數此四ツノ現象ニ就テ九ヶ年間ノ平均及最近明治四十一年ノ事實ヲ府縣別ノ地圖ト爲シテ掲ゲマシタカ、總テ其說明ヲ略シマス。之ハ說明ノ必要ガナイノデハナイ、寧ロ大ニ論スベキコトガアルデアリマスガ、多クハ諸君ノ耳ニ熟シタコトデ、而カモ之ヲ述フルト、其部分の觀察ニ於テ大ニ時間ヲ費ヤスカラデアリマス。以上申上ゲマシタノハ、人口及人口ノ動態ニ關シ最モ撮ミタル大體ノ說明デアリマス。

肺 結 核

前ニ日本ノ死亡率ノ減少セザルコトノ一大原因トシテ、小兒死亡ノ益々増加スル傾向アルコト、ソレカラ結核ノ蔓延モ亦其原因トシテ考ヘナケレバナラスコトヲ申上マシタガ、肺結核ノ狀態ニ就テハ茲ニ外國ノ事實ヲ籍リテ一言シヤウト思ヒマス、ソレニハドレズデンノロイスレル氏ノ調査セラレタル歐羅巴各國ノ肺結核死亡ノ人口比例、並ニ獨逸大都市ノ肺結核死亡ノ人口比例ガ最モ便宜デアリマス、ソレニ依テ見マスルト多クノ諸國ハ年々肺結核死者ノ數ヲ減少シツ、アリマス、其減少セザルモノ乃至寧ろ増加ノ傾向アルモノハ愛蘭士、諸威、匈牙利、佛蘭西、芬蘭等デアリマス。即チ愛蘭士ハ千八百八十六年(明治十九年)カラノ五ヶ年間ノ平均ガ人口一萬ニ付一ヶ年ノ肺結核死者二・二デアツタモノガ、十年後ノ五ヶ年平均(千九百一五年)ハ二・一五デアリマシタガ、近キ明治四十年ニ二・〇・二ニ下リマシタ、諸威ハ千八百八十六年カラノ五ヶ年平均ガ人口一萬ニ付一・三六デアツタノガ明治三十八年ニ一・二六・一〇ニマデ上リ、其翌三十九年ハ二・五・三八ニ下リマシタ、匈牙利ハ明治二十四年カラノ五ヶ年平均ガ二・七・四六デアツタノガ、同卅四年カラノ五ヶ年平均ハ三・九・四ニマデ上リマシタガ、近キ明治四十年ハ三・八・四ニ減シマシタ、併シ之ハ總テノ結核死者ヲ包含シテ居マス、又佛蘭西ハ人口五千以上ノ地ノ事實ノミデアリマスガ、明治廿四年カラノ五ヶ年平均ガ三・三・六〇デ、近キ明治四十年ハ三・三・九〇デアリマシタ、芬蘭ハ明治十九年カラノ五ヶ年平均ガ二・五・五八デアツタノガ、最近四十年ニハ二・七・〇〇ニナリマシタ、又獨逸ノ大都市ニ於ケル肺結核死亡ヲ見マスルト、唯ブレスラウノミガ少シク増加ノ傾向ガアリマスタケノコトデ、他ノ四十六大都市ハ緩急コソアレ總テ年々肺結核死亡數ヲ減少シツ、アルノデアリマス、斯カル形勢デアリマシテ普魯亞ノ如キハ千八百八十六年乃至九百年(明治十九年乃至二十三年)ノ平均ガ人口一萬ニ對シ總結核死亡ノ割合ガ二九・〇デアリマシタノガ、年一年毎ニ減少シテ近キ千九百七年(明治四十年)ニハ一・七・一ニマデ減シテ居リマス、又英吉利ハ之ハ肺結核ノミデアリマスガ千八百八十六年カラノ五ヶ年平均ガ一

六・四デアツタノガ、近キ明治四十年ニハ一・四ニ減少シテ居リマス、斯クノ如ク世界文明國ノ大勢ハ、縱シヤ一二ノ破格アリトスルモ、結核ノ減少ヲ示シテ居ルデアリマス、然ルニ我日本ヲ見マスルト、明治三十二年カラノ少數事實ニハ過キマセヌガ、人口ノ一萬ニ割合シタル肺結核ノ死亡者ガ、男女ノ總數デ三十二年ニ二・一・六デアリマシタモノガ、明治四十年ニハ一・五・四ニナツテ居リマス、明治三十八年ニ一・五・九マデ上ツタノガ同三十九年四十一年ト少シク下降シタ様デアリマスガ、茲ニハ記シマセヌケレドモ明治四十一年ニハ再び上昇シテ一・五・五ヲ示シテ居マス、又之ヲ死亡ノ總數ニ比較シテ見マシテモ、明治卅二年ニ六・〇・〇%デアツタノガ同四十年ニハ七・四二%ニナリマシタ、是亦明治三十九年ヨリモ同四十年ガ少シク下ツタハ居リマスガ、大體ニ於テ矢張肺結核死者ガ著シク増加ナシテ居ルデアリマス、歐羅巴ノ諸國ニ於テ肺結核ノ死者ガ非常ニ減少タノハ、何ニ原因シテ居ルカ、之ハ申ス迄モナク人工ヲ加ヘテ減シタノデアリマス、天然ニ放任シテ減シタノデハ決シテナイ、結核ノ豫防法ガ行ハレテ其結果トシテ死者ノ數ヲ減ズルニ至ツタノデアリマス。殊ニ結核療養所ガ各地ニ設ケラレマシテ、結核患者ヲ初期ニ於テ隔離治療スルコトガ出來タノデ、一ニハ治療ノ好果ヲ見ルモアリ、又一ニハ病毒ノ散逸ヲ防クノ利ガアツテ、即チ此好果ヲ見タモノト思ヒマス、殊ニ獨逸ニ於テ著シク減少ヲ見マシタノハ、御案内ノ通り勞働保險ノ制ガ行ハレマシテ保險局所屬ノ「ザナトリユーム」ガアテラコテラニ設ケラレマシテ勞働者ノ結核患者ヲ茲ニ收容シテ治療ヲ加ヘルコトガ出來マシタノデ、其ガ大ナル効ヲ奏シマシタ、其寫眞ヲ見マスルト是ガ「ザナトリユーム」ニ收容セラレテ居ル人カト思フホド健康ラシイ立派ナ身體ノモノガ居ルヤウデアリマスガ、要スルニ肺尖加答兒ノ最モ初期ノ中ニ茲ニ收容シテ治療ヲ加ヘマスカラ、結核ガ全治スルト云フコトハアリマスマイガ、其病氣ノ進行ヲ止メマシテ、停止ノマ、デ再び勞働ニ服事スルコトガ出來ルヤウニナルデアリマス、放任シテ置ケバ勞働力ヲ減殺スルノミナラズ遂ニハ永久ノ勞働不能ニ陥テ保險局ガ非常ニ損失ヲ致サ

ネパナリマセス、ソレ故ニ労働保險局が自ら進テ是等ノ設備ヲ爲シテ労働者ヲ保護スルノデアリマス。然ルニ日本ノ状態ハドウカト云フト、殆ド一ノ豫防令ダニナリ、イハ唯一ツ多數人ノ集合スル場所ニ限リ唾嚢ヲ備ヘヨト云フ内務省令ガアリマス、其唾嚢令ト雖モ、何所ヘ行ツテ見テモ隅ノ方ニ堅ク蓋ヲ致シテ唾嚢ガ置イテアルノミデアリマスカラ、全ク無用ノ唾嚢ガアテラコナラニ陳列シテアルニ止マツテ居ルノデアリマス。サウ云フヤツニ唯一ノ唾嚢令スラ今日行ハレナイノデアリマスカラ、結核ノ豫防制度ハ全ク無イト云フテ宜イ、サレバ結核ガ年々増加スルコト云フモ、ソレハ少シモ怪ムニ足ラス状態デアリマス。尤モ今日ニ於テハ歐洲ノ文明國中地地利、匈牙利、佛蘭西等ヨリハ比例數ガ低クテ、恰モ普魯西ト伯仲ノ間ニ在ルノデアリマスガ、而カモ彼ハ年々減少シテ茲ニ至リタルモ、我ハ漸次進テ今日ニ上リタルモノデアリマスカラ、近クシテ兩線ノ交叉ヲ見、甚ダ名譽ナラザル數ガ彼ノ上ニ出ツルノ時ガ來ルデアラウト思フノデアリマス。殊ニ我死因統計ノ中ニハ少ナカラザル不明ノ病名ヲ附シタルモノガアツテ、此中ニハ幾多ノ肺結核ヲ包藏スルデアラウト想像シ得ラル、ノデアリマスカラ、今日幾ラカ少ナイ位ノコト決シテ油斷スルコトガ出來マセス。殊ニ結核ハ死ノ原因トシテ非常ニ惡ムベキモノデアアルノミナラズ、結核ハ罹リタル者ハ他ノ疾患就中他ノ慢性病ト違ヒマシテ、始メカラ勞働力ヲ減殺セララル、ノデアリマス、而カモ其治療ノ爲メニ費ス所ガ又決シテ少ナクナイ、ソレ故ニ結核ノ蔓延ハ人ヲ死ニ誘フ力ガ大ニアルノミナラズ、其勞働力ヲ減殺シテ、自己ノ生産力ヲ失フノミナラズ、ソレガ爲メニ他人ノ生産力ヲ阻害スル原因ト爲ルノデアリマスカラ、結核蔓延ハ餘程注目シテ見ナケレバナラス、衛生上並ニ經濟上ノ大問題デアルト思フノデアリマス。

次ニ肺結核ハ都鄙何レニ多イカ、假ニ人口五萬以上ノ地ヲ都市ト看做シ、人口五萬以下ノ地ト分テ見マシタ所ガ、都市ニ於テハ、其他ノ地ニ比シ殆ド倍以上ノ肺結核死者ガアルノデアリマス、即チ明治三十九年ト同四十年トノ平均デ都市ニ於テハ其總死亡二千ニ對スル肺結核死亡ガ一五・四・四デアアルノニ、其他ノ地ニ於テハ總死亡一千ニ對スル肺結核死亡ハ六七・一デアリマス。都鄙ノ間ニ斯ノ如キ著シイ差ガアリマス。茲ニ於テカ前ニ申シ上ゲマシタル人口ガ都會ニ集中スルコトガ健康上影響ヲ及ボスコト大デアアルソレガ知ラレマス。殊ニ傳染病ハ都市ニ於テ蔓延シ安イコトハ明カデアリマス。消化器性ノ傳染病等ニハ強チサウバカリ云ヘナイコトモ

アリマスガ、先ヅ肺結核ノ如キ利人群居スル場合ニ於テ斯ノ如キ状態ヲ呈スルノデアリマス。

ソレカラ如何ナル年齢者ガ肺結核ニ侵サレルコト多キカヲ見ルノモ重要デアリマス。表ニハ男女各種ノ五歲階級ノ肺結核死者數ヲ其階級ノ總死亡數ニ比例シテ比較シマシタ、之ニ依テ見ルト、一歲未満ノ幼者ハ其總死亡ノ三・二デ、此時期ニハ男女ノ間ニ差ガナイ、一歲カラ五歲マデハ一四・三デ、之モ同様、五歲以上ト段々各五年毎ニ分テ見マスト、十歲未満ニ至テハ六四・一、男ハ三八・五、總數ハ五一・四デ、此年齡階級カラ女ハ男ヨリモ肺結核ニ罹リ易イ、ソレガ十歲以上十五歲ニ至テ總數ハ一七六・〇%デ、女ハ二二・八%ヲ示シ男ハ其半ニモ足ラザル一〇四・五%デアリマス。茲ニ一寸挾ンデ申上ゲマスガ、肺結核ガ極ク幼少ノ者ヲ侵スカドウカト云フコト、之ハ醫學上餘程重要ナ問題デアリマシテ零歳ノ幼兒ニハ肺結核ガ少ナイト言フ人モアレバ、決シテ少イモノデ無イト言フ説モアル、處ガ此所ニ面白イ一ノ話ガアリマス。我々共ガ今後一層努力シナケレバナラナイ、其反證ヲ舉ゲルノデアリマシテ、殘念ナガラ日本ノ統計ガ海外諸國ニ知ラレテ居ラナイ其事ニ就テバゴザイマス。昨年物故セラレマシタコツホ先生ハ牛畜ノ結核ト人間ノ結核トハ別種ノモノデアアル。牛ノ結核ノ「バチルレン」ト人間ノ結核ノ「パチルレン」トハ全ク違フコト云フテ居ラタ。處ガ其高弟デアツテ而カモ我北里博士ト共ニ血清療法ノ發見者トシテ知ラレテ居ルベリリング氏ハ牛ノ結核ト人間ノ結核トハ同一物デアルト言フ説ヲ執ツテ居ラレタ。今日デハ大勢ガ異種説ニナツテ居ルヤウデアリマシテ、本邦細菌學ノ泰斗タル北里博士モ亦コツホ先生ト同意見デアアルヤウデアリマス、ガ併シ一時ハ學界ノ大ナル爭論デアツタノデアリマス。其當時ノコトデアリマスガ、ベリリング氏ノ所論中ニ牛ノ結核ト人間ノ結核ト同ジデアアル著明ナル一ノ微證トシテ斯ナコトヲ言ハレタコトガアル、曰ク試ニ日本ノ乳兒ヲ見ヨ、日本ノ乳兒ハ牛乳ヲ以テ養育セラレル者ガ少ナイ、ソレ故ニ日本ノ乳兒ニハ結核ガ蔓延シテ居ラナイ、然ルニ歐羅巴ノ乳兒ハドウデアアルカト云フト牛ノ結核ガ直チニ傳染スルカラ、乳兒ノ結核ニ罹ルコトガ多イト斯様ナ意味ノコトヲ言ハレテ居ル。處ガコツホ先生ノ所論ノ中ニモ、牛ト人間トノ結核ノ違フコトハ、日本人ニ徴シテモ知ラレル、見ヨ日本ノ乳兒ニハ結核罹病者ガ多イデハナイカ、世界中日本ノ乳兒比較的多ク結核ニ罹ルモノハナイ、然ルニ日本ノ乳兒ハ牛乳ヲ以テ養育セラレルノ

デハナイ、ソレニモ拘ハラズ結核罹病者ノ多イト云フハ牛ノ結核ト人間ノ結核トノ異ナル一ツノ微證デハナイカ、ト言ハレタコトガアルソウデアリマス。是等ハ本邦ノ統計ガ不幸ニシテ海外ニ知ラレテ居ラナイカラ起ツタコトデアリマシテ、偶々何カノ斷片ガ傳ヘラレテ、其異ナツタモノガ兩大家ノ眼ニ觸レテ右ノ如キ議論ガアツタモノト思ハレマス。本邦乳兒ノ肺結核ハ前申上マス様ナ割合デ、其總死亡ノ三・二%デアリマシテ、之ヲ歐洲ノ同一係數ニ比シマスト則チ獨逸ノ既往十二年間ノ平均ハ七・八六%デアリマス、英國ノ最近千九百九年ノ事實ハ二・六七%デアリマシテ、英國ヨリハ多ク獨逸ヨリハ過ニ少ナイノデアリマシテ、目下知ラレテ居ル所デ強チ多イデモ少ナイデモナイ、全肺結核數ニ比シテ先ツ斯ナモノデアラウト思ハレマス。併シ其内容ニ立入りテ論シマシタナラ尚ホ多クノ言フベキコトモアリマシヤウガ、今日表面ニ知ラレテ居ル所デハ右ノ如クデアリマス。

ソレカラ肺結核デナイ、乳兒ニ最モ多イ所ノ腦膜ノ結核ハ、後ニ少シク論ジマスガ、是非非常ニ間違ガアルト思ヒマス。再ビ前ニ戻リテ申マスガ、男女ガ結核ニ罹ル割合ハ年齡級ニ由テ異ナル、五歲カラ十歲ノ階級ニ於テハ既ニ女ノ結核ガ多イ、十歲カラ十五歲ノ階級デハ男ハ女ノ半數ニモ達シナイ、十五歲カラ二十歲ノ階級ニ於テハ男ノ結核ガ大部多クナツテ其總死亡ノ二七・〇%ニナルガ女ハ三三・一%デアリマシテ、ソレガ二十歲カラ二十五歲ニ至ルト男ハ二九・八%女ハ二八・九%デアリマシテ併行シテ居ルガ男ガ少シク女ヲ凌駕シタ、二十五歲カラ三十歲デハ男ハ二七・五%女ハ二五・八%デアリマシタ多ク、三十歲ヨリ三十五歲デハ男ハ二三・五%女ハ二二・八%デアリマシタ多イ、三十五歲カラ四十歲ニ至ルト餘程其數ガ減ジテ男ハ一九・五%女ハ一五・六%トナリ四十歲以上四十五歲デハ男ハ二五・七%女ハ二二・九%トナリ四十五歲以上五十歲デハ男ハ一三・一%女ハ一二・八%デアリマシタ減少シテ行キマス、ソコデ結局總數ニ於テ男ハ六八・七%女ハ七二・八%デアリマシタ女ノ方ガ肺結核ニ罹ルコトガ多イ、右ノ係數ニ依テ男女ノ對比ヲ求メマスト男ノ一〇〇ニ對スル女ノ一〇五・六七ニナリマス。是等ノ關係ヲ外國ノ事例ニ徴シマスト、英國ニ於テハ男ノ總死亡ニ對スル其肺結核死亡ハ二・七%ニ當リ女ハ六・六%〇七%デアアルカラ、其對比ハ男ノ一〇〇ニ對シ女ハ七九・八八ニ當リマス。又獨逸ノ此對比ハ男ノ一〇〇ニ對シ女ハ八一・二二デアリマス。サレバ本邦ノ女ニ結核多キハ一ノ異例デアアル、是果シテ何ニ原因スルカ、今ソレヲ詮索スルコト

ハ出來マセスガ兎ニ角注目スベキ現象デアリマス。併シ年齡ニ依ル男女ノ差ハ英國ニ於テモ本邦ト同一型デアリマシテ、山ノ頂上ガ本邦ハ十五歲以上二十歲階級デアリマスガ英國ハ二十以上二十五歲デアアル、ソレカラ傾斜ガ幼年ニ急デ高年ニ緩デアアル、ソレダケノ相違ガアリマスケレドモ、頂上ニ至ルマデガ女ニ多ク頂上カラハ男ニ多イコトハ本邦ト同一型デアリマシテ、茲ニ研究上ノ趣味ガ伏スルノデアリマスガ今ハ省略シテ置キマス。

其次ハ結核死者ノ職業別デアリマス、内閣統計局ニ於テハ御案内ノ通り死亡者ノ職業關係ヲ先ツ有業者ト無業家族トニ分テ、ソレカラ職業ヲ二十六種ニ分類シテ觀察シテ居リマス。有業者ト無業家族ト何レガ肺結核ニ罹ルカ、之ヲ各其死亡總數ニ割合スルト有業者ハ一〇・八%デアツテ無業家族ハ五・八%デアリマス、是ハ無業家族ニハ幼者ト老者トヲ合ムカラデハアリマシヤウガ、兎ニ角有業者ハ肺結核ニ罹ルコトガ多イ、ソレカラ二十六ノ分類ニ就テ各職業者ガ其死亡總數ニ對シ幾何ノ結核死亡ヲ有スルカヲ見マスト、最モ多數ノ肺結核死者ヲ出シタルモノハ石版、銅版、木版等ノ印刷彫刻及寫眞業者デアリマシタ、先年私ハ印刷局ノ職員職工ノ疾患調査ヲ致シタコトガアリマスガ、其時見タ所デモ彫刻職工ニ多クノ肺結核患者アルコトヲ知ツタノデアリマスガ、即チ此死因統計デハ總死亡者ニ對スル四三・九%ニ當リマシテ殆ンド半數近ク結核デ死亡シテ居ルノデアリマス、凡職業上如何ナル種類ノ者ガ最モ多ク結核ニ罹リ易イカト申シマスルト、無論其人ノ體質ニ依リ天然ノ關係ニモ因リマスガ、職業上カラハ塵埃ノ立チ易イ職業者ガ多ク肺結核ニ罹リ易イ、其中ニモ角立ツタ塵埃ヲ吸入スルモノガ最モ罹リ易イ、ナゼカト云フト塵埃ノ吸入ニ因リテ呼吸器系ニ損傷スルコトガ多イ、從テ結核菌ヲ吸入シタル場合ニ容易ニ之ニ侵サル、ニ至ルノデアリマシヤウ、或ハ云フ結核菌ヲ吸入シテ傳染スル場合ハ破格デアツテ、最モ多イハ身體ノ何レカノ小創又ハ上皮膚裂カラ結核菌ガ侵入シテ血液又ハ淋巴中ニ入ルノデ、肺ハ身體中最モ毛細管ニ富ム所デアアルカラ最モ多ク結核ニ罹リヤスイトベルツ氏ナドハ云フテ居リマス、結核菌ハ左ノ徑路ヲ取カモ知レマセスガ實際ニ於テ塵埃立ツル職業者又ハ呼吸器ヲ勞スル職業者ニ肺結核ノ多イ事ハ事實デアリマス、或ハ侵入シタル結核菌ガ致シ病竈ヲ造リ易イノカモ知レマセス。英國ノ職業別死因統計ニ依ルト彫刻家彫像家ハ其總死亡ニ對スル肺結核死亡ガ一四・三五%印刷業者ガ三二・八九%石版コッビー及ステル版印刷業者ガ二六・三三%デアリマシ

タ、但シ此場合ノ總有業者ノ肺結核死亡ハ同上二五・一八%デアリマシタカ
ラ彼地ニ於テ印刷業者ガ如何ニ結核ノ器デアルカガ知ラレマシタ。次ニ
ハ教育ノ業者ガ多ク肺結核デ死ニマス、其有業者ハ死亡總數ノ三二・三二%
ダケ肺結核デ死シテ居リマス、但シ其無業家族ハ七・七〇%デアリマス、
之ハ非常ニ重大ナ問題デアリマシタ、私ハ昔テ此事ヲ國家醫學會デ話シマ
シタ、其後文部省ニ於テモ此件ニ大ナル注意ヲ拂ハレマシタ、現ニ東京市ノ
各小學校長並ニ重ナル教育家ナドニ知照シテ各學校ノ教育者ノ健康ヲ觀察
シテ其結核ニ罹ラシ居ルカ否カラ探シテ居ラル、トモ聞キマシタジ、又地
方ニ照會シタリナドシテ其調査ヲ怠ラレヌトコトデアリマス。此事實ハ
單ニ教育ノ健康保護上必要デアルバカリデナク、可憐ナル兒童ノ健康ニ關
スル、最モ重大ナル問題デアリマシタ、當局者カラ大ニ注意シテ貰ハナ
ケレバナラヌコト思ヒマス。教育ノ業者ガ何故ニ肺結核ニ罹リ易イノデ
アルカ、其弊ヲ立テ、呼吸器ヲ勞スル爲デアルカ、彼等ハ其業務上黑板ニ向
テ常ニ白墨ヲ用テ居ル、其粉末ガ非常ニ立ツ、ソレカラ小兒デハアリマ
スガ衆人群居シテ居ル中ニ塵ヲ立テ、居ル是等何レモ結核ニ罹リ易キ原因
トモナルデアリマシタ、況ンヤ其土ニ教育ノ業者ハ世ノ中カラ待遇サル
コトガ薄クテ、其與ヘラレル糧ノ料ガ甚タ少ナイ、ソレカ爲メニ營養ヲ
十全ニ攝ルコトガ出来ナイト云フコトモ非常ニ影響スルコト思ヒマス。英國
ニ於ケル事實ハ前同様ノ係數ガ二〇・四四%デアリマス、彼地ニ於テモ教
育業者一般有業者ヨリ肺結核ニ罹ルコトガ多イ、ケレドモ本邦ニ比スレバ
其割合力遙ニ低イデアリマス、是レ本邦ノ教育業者ニハ特ニ生活難ガ著
シク結核ニ罹リ易イ素質ヲ造ルコト、思ハレマス。其次ニ結核ノ多イノハ
纖維工業デ即チ織物、紡績、製糸ナドニ從事シテ居ル者デアリマス。是等
ノ業者ニハ非常ニ結核ガ多カラウトハ始メカラ想像セラル、所デアリマシ
テ、殊ニ織物紡績等ノ業者ニ多カラウト云フコトハ誰デモ想像シ得ラル
、殊ニ彼等ノ家庭ニ於テ其業ヲ取ル所謂散工テアル場合ハ何ホカ少ナ
イデアロウト思ハレマスガ、其紡績會社、織物工場等ニ居リマスル所謂集工
ハ結核ノ巢窟デアラルヤウニ思ハレマス。其非常ニ塵埃ノ立ツ處デ仕事ラシ
テ居ル、彼等ガ常ニ少ナカラズ極細纖維ヲ吸入シツ、アル事ハ誰モ目
撃スル所デ、其寄宿舎ヤ社宅ニ於ケル生活ガ頗ル不衛生ノデ、而カモ勞動ト
營業トノ收支相償ハサル彼等ヲ見テハ、彼等ガ肺結核ニ罹ルノハ無論デア
ラウト思ハレノデアリマス、然ルニ豈計ランヤ最モ大多數デアラウト考

ヘラレマシタ纖維工業者ノ肺結核ニ罹ル數ハ三〇・四七%シカナイ、教育
ノ業者ヨリモ少ナイ、印刷彫刻業者ヨリモ遙ニ少ナイ、第三位ニ居ルノデ
アリマス、之ハ頗ル怪シイコト、思ツテ居リマシタ、處ガ果シテ之ニハ理
由ノアリマスコトデ、ソレハ此次キニ申上ゲヤウト思ヒマス。ソレカラ豫
テ聞キマスル所ニ依ルト鐵山ニ移イデ居ルモノ、中炭坑ニ移イデ居ル者ハ
肺結核ニ罹ルコトガ少ナイト云フコトデアリマス、ソレヲナゼカト申マス
ト石炭ノ粉ヲ吸入シテ所謂炭肺ニ爲ルコトハアルガ、其石炭ノ粉ノ中ニハ
種々ノ防腐ノ乃至殺菌ノ物質ガ包含セラレテアルカラ、石炭ノ粉ヲ吸入シ
タルガ爲メニ殺菌的ニ働イテ、縱シヤ結核ノ「バチルレン」ヲ吸入シテ
モ結核病ニ罹ラナイデ仕舞フ、斯ウ云フコトヲ云フ人モアリマスシ、又或
ル人ハサウデナイ石炭ノ粉ハ顆粒狀又ハ層狀ナシテ居ルカラ彼ノ角立
タル結晶體ノ物ノヤウニ肺ヲ損傷スルコトガ少ナイノデアルト、又炭粉
吸入ノ爲メニ肺カ硬化セラレテ結核ノ傳染ニ不使ナルカ爲メト云フ者
ガアリマスシ、コレネツト氏ノ如キハ周圍ノ空氣ガ滋潤シテ居ルカラ人ノ
咯出シタル痰ガ凝狀ニナラナイ爲メト云フテ居マスガ、其ナラバ他ノ
鐵山ニ於テモ同様デアリンウナモノデアリマスガ炭坑ニ於テノミ少ナイ、
即チ他ノ鐵業者ガ一四・四六%デアアルノ、石炭及石油採取及精製業者ハ
八・九四%デ總有業者中最モ肺結核ニ罹ルコトノ少ナイ農林業者ハ六・九
%ヨリ唯僅ニ多イバカリデアリマス、殊ニ其無業家族ハ四・四八%デ農林業
ノ無業家族ハ三・一三%ニ比シ遙ニ多イニモ拘ハラズ有業者ニ斯ク少ナイ
ノハ諸家ノ説ノ何カノ原因ガ例テ居ルモノト思ハレマス。英國ノ本例ヲ見
マスルト鐵礦業坑夫ガ一三・六八%鉛礦業坑夫ガ一六・一四%、銅礦業坑夫
ガ二〇・〇〇%、錫礦業坑夫ガ二〇・八〇%デアアルノ石炭坑夫ハ唯九・七
五%デアリマシタ矢張本邦ノ事實ト略ボ一致シテ居リマス。農林業、石炭
坑夫ニ次テ肺結核ノ少ナイハ漁業デアリマスガ、海邊ノ清潔ニシテ濕氣
ニ富ミ而カモ緻密度ノ大ナル空氣ノ間ニ棲息シテ居ルモノハ結核ニ罹ルコ
トガ自然ニ少ナイト申スコトデアリマスガ、漁業モソレガ爲メニカ少ナ
イ、即チ一〇・〇五%デアリマス、若シ果シテ海邊ニ棲ムガ爲メデアルナ
ラバ其無業家族モ大ニ少ナカラネバナラヌ筈デアリマスガ、之ハ石炭坑夫
ノ家族ヨリハ多イ四・九二%デアリマシタ、漁業者ニ肺結核ガ少ナイト云
フコトカラ直グニ聯想シテ考ヘラレマス、ノハ然ラバ船乗ハドウデアアルカト
言フコトデアリマス、船舶運輸業者之モ果シテ少ウゴザイマシタ、併シ漁

業ヨリハ少シ多ウゴザイマスガ一一・六一%デアリマシタ、夫ノ船舶ニ搭
乗シテ開港ノ清澄ナル、而カモ水蒸氣ヲ飽和スルコトノ多イ空氣中ニ生活
スル者ハ割合ニ肺結核ニ罹ルコトガ少ナイノカモ知レマセヌ、併シ其家族
ハ七・二三%デ決シテ肺結核ニ罹ルコト少ナクハアリマセヌ。一々論ジテ居
リマスト際限ガアリマセヌカラ、職業ト肺結核トノ關係ハ先ツ此位ニシテ
置キマシテ、表ハ作ツテアリマセヌガ無業家族ニ就テ少シク詮索シテ見マ
シヤウ。無業家族ニ於テハ今申上ゲマシタヤウニ或ル職業者ガ三・一%ト云
フヤウナ大キナ數ノ場合ハ殆ト見ルコトハ出来マセヌ。大體ニ無業家族ニ
於キマシテハ安逸ノ地位ニ居ルモノガ却テ肺結核ニ罹リ易イヤウニモ見ヘ
マス。併シ此場合ニ一言シテ置キマスコトハ、有業者ヲ男女別ニスルト其
男ノ肺結核死亡ハ其總死亡ノ一・〇九%デ女ハ一・〇三%デアリマスカ
ラ大差ハアリマセヌガ、無業家族ノ方ハ男ガ四・一四%デアアルノニ女ハ七・
一%デアリマス。是ハ無業家族ノ女ニハ結核ニ罹ルコト多キ年齡者ヲ
多ク包含スルガ爲デアリマシタ、ソコデ無業家族ヲ見ルニハ男女ニ別
ツテ見ル必要ガアリマス、例ヘバ現役軍人ハ一・六三%デ有業者トシテ
ハ比較ノ少ナイニモ拘ハラズ其家族ノ女ハ一・八五%デ無業家族トシテ
ハ多イ部分ニ屬スル、又商業ハ一・八%デ是モ有業者ノ少ナイ方デア
ルガ、其家族ノ男ハ七・五六%女ハ二・七七%デ多イ方ニ屬シテ居ル、又
家計ノ職業ガ家族ニマデ影響ヲ及ボシタノデハナイカト思ハル、者モアル
例ヘバ金屬工業ハ銳利ナル金屬粉ヲ立テリテ呼吸器ヲ害シ肺結核ニ
罹リ易イト見ラレテ居ル者デ而シテ家庭工業ガ多イ、其有業者ハ二・一六
七%デ少ナクナイト同時ニ、其無業家族モ亦總數ガ一〇・〇三%其女ガ一
二・七五%デアアル、機械工業モ同一事態ニ居ル者デアアルガ其有業者ハ二・三
八三%デ無業家族ノ總數ガ一・一七%其女ガ一・四九%デアリマス。是
等ハ有業者ノ受ケルト同一害因ヲ無業家族モ亦受ケルノデナイカト思フ、
又家族傳染ノ結果デアアルマイカト思ハレル者モアル、前ニ舉ゲマシタ印刷
及彫刻ノ業者ハ有業者トシテ最モ多ク肺結核ニ罹ル者デアリマスガ、而モ
是等ノ業者ハ家庭工業デナイ者ガ多イ、ソレニモ拘ハラズ無業家族ノ女ハ
一・五九%ノ多數アリテ其男ハ一・〇五二%デアリマス。此場合ニ私ハ
一寸申シテ置キタイト思フノハ英吉利ノマンチエスターノ市ガ經營シテ居
リマスル病院ガアリマシタ、其處ヘ入院シマシタ千九百二年カラ千九百八
年迄ノ肺結核ノ患者ニ就テ、ドコカラ傳染シタカラ調べテ見タ、素ヨリ之

ハ後ニナツテ調べルノデアリマスカラ確カノモノトハ云ハレマセヌガ、
段々調べタ結果ヲ蒐メテ三通リニ分ケテアリマスノガアル、即チ確カニ是
ガ傳染源デアルト認メタモノ、恐ラクハソレガ傳染源デアラウト認メタモ
ノ、傳染源デアルト疑ハシイモノトニ分ケテ觀察シテアルノ一寸面
白イト思ヒマスカラ紹介シマス、其總體ノ數ガ確カニ傳染源ヲ是レト認メ
タモノガ千七百六十六人デ、ソレヲ段々見テ行キマスト一番傳染ノ原因ト爲ツ
テ居ル者ガ友人デアリマス、殊ニソレガ仕事ノ同僚デアアルモノカラ傳染シ
タト認ラレル場合ガ一番多クテ千七百六十六人中二百六十六人迄ハソレデ、普通
ノ友人ガ百六十九人デアリマス、即チ甲ガ總數ノ二二・〇八%デ乙ガ九・九〇
%デアリマス。斯ウ云フ次第デアリマスカラ、無論集ツテ工業ヲナスモノ
ニハ結核ニ罹ル場合ガ殊ニ多イモノト考ヘナケレバナラヌ、勿論家族間ノ
傳染ハアルガ罹ラシ居ツタカ母ガ罹ツテ居ツタト云フ者ハ少ナクハア
リマセヌガ、友人ヤ仕事仲間ニ比シマスト寧ロ少ナイノデアリマス、尤モ
家族ハ少ナシ友人ハ多シデアリマスカラ、無論友人ノ場合ガ多カラウトハ
想像サ、ルノデアリマスガ、今ハ斯様ナ調べモアルト云フコトヲ御報告シ
テ置キマス。ソウシテ結核ニ就キマシテハ之ダケノコトヲ申上ゲルニ止メ
マス。

纖維工場ノ病傷數

之ハ纖維工場ニ於ケル職工ノ病傷統計デアリマス、序デアリマスカラ此
所デ一寸解説イタシマス。ナゼコンナモノヲ出シタカト云フト、只今肺結
核ニ就テ申上ゲマスヤウニ、私ハ此纖維工場ニハ大ニ肺結核ガ蔓延シテ居
ルコト、思フテ居リマシタ、然ルニ死因統計デ見タ所デハ僅ニ三〇・四七
%デアアル、斯様ナコトハ少シク平仄ガ合ハヌヤウニ疑ハレマシタ、ソレヲ
詮索スルコトニ掛リマシタ、處ガ一昨年デゴザイマシタカ、官令ヲ帶ビテ
新潟縣ヘ出張シマシタ、縣醫師會ニ臨席シテ死亡統計ノコトヲ御話シタコ
トガアリマシタ、其序ニ醫師會ヲ傍聴シテ居リマシタ處ガ、或ル議員ガ斯
ウ云フ建議ヲシタノデアリマス。其人ハ確カ北魚沼郡ノ人デアツタト思ヒ
マスガ、曰ク自分ノ地方カラハ深山ノ工女ヲ東京其他ノ紡績會社カラ雇ヒ
テ健全ナル者ノミガ撰拔セラレテ行クノデアルガ、其工女ガ一年カ一年半
ノ間ニ歸ツテクル、其歸ツタ多數ハ肺結核ニ罹ツテ居ルノデアアル、若シ斯

ノ如キコトヲ引續キ繰返ヘサレルト、自分等ノ郷里ハ結核ヲ患フカサレルヤ
ウナコトガ出来テクル、ソレ故ニ縣廳ノ手ヲ以テドコノ工場ハドンナ風ナ
衛生設備ガ出来テ居ルカト云フコトヲ調ベテ貰ヒタイ、其結果ニ依リテハ
其衛生設備ノナクハ、自分等ハ工女ノ出稼ヲ差止メルコトヲ運動シタ
イ、ト云フ意味ノ建議デアリマス、審議ノ末其建議ハ容ラレマシテ、
サウシテ單ニ新潟縣ノミナラズ隣府縣ノ長野縣、群馬縣邊リマデモ知照シ
テ御互ニ同一ノ運動歩調ヲ取りタイト云フコトデアリマス、其時ニ始
メテ此死因統計ニ現ハレタル繊維工業者ノ肺結核死者ガ比較ノ少ナキ其理
由ヲ知り得タノデアリマス、ナゼカト云ヘバ、繊維工場ニ於ケル多クノ結
核患者ハ、其死ニ到ラザル前ニ解雇サレテ仕舞フノデアリマス、其解雇セ
ラレタル者ハ無業家族トナツテ死スノデアリマス、ソレガドノ職業ノ家
族トナツテ死スルカ知レマセムガ、兎ニ角繊維工業ニ従事スル者トシテ
ハ死亡シテ居ラスノデアリマス、然ラバ何カソレヲ知ルニ適當ナル材料ヲ
ト詮索シマシタ所ガ、恰モアツラヒ向キ斯フ言フモノ、アルコトヲ知りマ
シタ、ソレハ明治三十二年ニ内務省ノ訓令ヲ以テ工場ニ於ケル病者、負傷
者ノ届出ヲ規定サレテ居ル、其訓令ハ後ニ二回改メラレテ居リマスガ、現
行ノ規定ニ依リマス、斯ウ云フコトデアリマス。

職工徒十人以上ヲ雇使シ且寄宿又ハ社宅アル工場ニハ其舍宅内ニ在ル
職工ノ死者及疾病負傷ノ爲メ解雇ノ者アルトキハ其都府警察官署ニ届出
シメ又前記職工中疾病負傷ノ爲メ休業三十日以上ニ渉ル者アルトキハ毎
月一回警察官署ニ届出シムベシ。該届出ニハ職名、年齢、病症等ヲ附記
セシムヘシ前項届出アリタルトキハ警察官署ハ其工場ニ臨ミ患者、死者
及解雇ニ關スル救護其他ノ取扱振ヲ見届ケベシ。寄宿舍又ハ社宅内ニ職
工百人以上ヲ有スル工場ニハ毎月一回其舍宅内ニ在ル職工數及患者數、
死者數ヲモ届出シメ該職工數、患者數、死者數及其舍宅内ニ於ケル死
者、疾病負傷ノ爲メ解雇又ハ休業三十日以上ニ渉ル者ノ職名、年齢、病
症等工場別ニ調査シ翌月中ニ當省ヘ報告スベシ。

斯ウ云フコトガアリテ、之ニ依テ届出シタモノヲ、警察官署ガ觀メテ府
縣カラ内務省ヘ報告スルコトニナツテ居ル、ソレヲ蒐テ見ルコトガ餘程
有益ナルト信ジマシタ、ソレカラ内務省ニ於テソレヲ蒐メテ見テ頗ル驚
クベキ事實ヲ發見シタノデアリマス。今茲ニ掲ゲマシタハ右ノ報告ニ依
リテ知り得タル事實デアリマス。其訓令ニ依テ報告セラレマスノハ種々ナ

ル工場ノ事實デ、無論繊維工業ノミナラズ他ノ工場モアルノデアリマス
ガ、百人以上ノ職工ヲ使用シテ社宅若クハ寄宿舍ヲ有シテ居ルモノハ他ノ
工場ニ於テハ數ガ甚ダ少ナキ、少ナキ數ノ上ニハ過誤ガ傳ヘラル、庶レガ
アル、ソレ故ニ其少ナキ工場ノ事實ヲ見ルコトヲ廢メテ、多キニ就テ見
ルコトガ却ツテ過誤ナキヲ期シ得ラレヤウカト思ヒマシテ、茲ニハ繊維工
場ノミヲ取り出シテ見タノデアリマス。茲ニ繊維工場トシテ舉ゲタルハ絹
糸紡績、綿絲紡績、モスリン紡績、織物、製絲、製麻等ノ十四類デアリマ
シテ、其男女職工ノ年末現在員百人ニ對スル病者數、負傷者數ソレカラ其
病者負傷者中ノ死亡者數及未治療者數ヲ取ツタノデアリマス、明治三
十九年カラ同四十二年ニ至ル四ケ年間ノ平均デアリマス。ソレデ明治四十
二年末工場數ガ三百二十二ヶ所デ、四ケ年間平均職工ノ男ハ二萬五千六十
七人女ハ十四萬二千九百十人、男一ニ對スル女ハ五八・七ニ當リマス。此職
工總數ガ一ケ年間ニ出ス病者ノ數ハ男百人ニ付二人〇・九、女百人ニ付六
人三・八デ女ハ男ノ三倍以上ノ病者ヲ出シ、又負傷者ハ男百人ニ付三人〇
・三、女百人ニ付二人八・八デ男ハ女ヨリモ危險ニ接觸スルコトガデアリマ
ス。此病者負傷者中ノ不幸ノ轉歸ヲ取り合、宅ニ於テ死亡シタル者ハ男四
・二%女四・五%ニシテ負傷又ハ疾病ノ爲メ勞働ニ堪エズト爲シ解雇セラレ
タル者ハ男二・六%女一・四%デアリマス。ソレ故ニ男ハ死亡者ノ一ニ對ス
ル解雇者ハ〇・六%デアリガ、女ハ三・二%ニ當リ、工場ノ舍、宅ニ於テ死亡
スル者ノ三倍以上ノ勞働ニ堪エズトシテ解雇セラレテ居ルノデアリマス。
併シ此材料ハ工場ノ調査シ製表シタルモノニ依ツタノデアリマス、左マ
デノ信用ヲ措カレヌコトモアル、ソコデ次ニ工場カラ一人一人ノ事實ニ就
テ届出サセタ其原材料ニ由テ死者ト解雇者トノ數ヲ調ベテ見マシタ、是ハ
事實ノアツタ毎ニ警察官署ヘ届出デタノデアリマス、全數ヲ盡シテ居
ラスカモ知レマセムガ、事實ニ超過シテ居ルコトハ斷ジテナキ、其全數ハ
死亡者男三十七、女四百七十五計五百一十二デ、解雇者ハ男三十七、女千五
百七十六計千六百一十四デアリマス。之ヲ疾病ニヨリテ類別シ、全數ニ對ス
ル比例ヲ取リマスト、ソレデ死亡者ニ於テハ最多數ヲ占ムモノガ肺結
核ノ三九・六%デアリマシテ、其他ノ結核ハ八・四%、敗毒性疾患ハ僅ニ
〇・〇五%ナルノミデアリマスガ、脚氣ハ仲々多ク九・九五%、胃腸病ハ
四・四九%、神經系ノ疾患ハ一・一二%、心臟ノ疾患ハ二・五五%、腸胃扶
斯ガ七・四一%負傷ガ三・七〇%、其他ノ一四・二五%ガ他ノ疾患デアリマ

ス、ソレカラ解雇者ノ方ヲ見マスルト肺結核ガ四八・〇%其他ノ結核ガ
三・二%敗毒性疾患ガ〇・七四%トラホームガ二・四一%、脚氣ガ一・七
七%胃腸病ガ六・七六%神經系ノ疾患ガ四・〇九%心臟病ガ一・四九%腸胃
扶斯ガ〇・四九%負傷ガ一・四九%デアリマス。之ニ依テ見ルト四年間平均
ノ肺結核ノ死亡ノ割合ガ總死亡ノ三九・六%ニ當ルノデアリマス。此比
例數ハ人口ノ死因統計ニ於ケル三・〇四七%ト同性質ノモノデアリマシテ、
死因統計ノ方デハ總テノ纖維工業ニ従事スルモノガ皆包含セラレテアル、
所謂集工ト散工トヲ合シタ數デアリシ、コチラノ方ハ百人以上ノ職工ヲ使
用シテ居ル工場ノ舍宅ニ於ケル事實デアリマス、即チ集工ノミノ數デ
アリマス。ソレニシテハ九%ヤ一〇%ノ違ヒノアルコトハ寧ろ當然デ、私
ハ或ハ少ナ過ギルト思フ、否ナ、其少ナ過ギル所ニ問題ガアルノデアリマ
ス。又脚氣ヲ見マスルト、私ハ嘗テ脚氣ヲ調ベタコトガアリマスガ、脚氣
ハ女ニハ頗ル少ナキ、男ニ三人ノ脚氣死亡ノアツタ場合ニ女ハ僅ニ一人シ
カ脚氣死亡ガナイノデアリマス。纖維工場ニ於ケル職工ノ割合ハ前述ノ
如ク男一ニ對シテ女六弱ニナツテ居ル、左様ニ女ガ多クモ拘ハラズ、脚
氣死ガ非常ニ多ク、一般人口ニ於ケル脚氣死亡ハ總死亡ノ八乃至九%デア
リタ、二十歳以上三十歳位ノ男ガ同上三・四%デ女ガ一乃至二%デアリ、
殊ニ女ノ脚氣ノ多クハ妊娠及産後ニ關係ガアル、女ノ脚氣ニ罹ル者ノ約
四分ノ一ハ妊娠及産後ニ關係アル者デアリマスガ、纖維工場ノ工女ハ妊娠
及産後ニ關係ハ殆ントナイト見テ宜イ、ソレニモ拘ハラズ脚氣ニ罹ルモノ
ガ一般人口ニ比ベテ十倍モ多クアルノデアリ、之ヲ同齡ノ女ニ比スルモ尙
ホ五倍乃至七八倍ハアルノデアリマス。斯ノ如キハ工場衛生上餘程注目ス
ベキ點ト思ヒマス。サテ以上ノ事實ニ更ニ一歩進メテ病者ト解雇者トノ割
合ガドウデアアルカト云フコトヲ見マス、會社ガ提出シタル表デハ上述ノ通
リデアリマスガ、此原材料ニ依ツタモノデモ矢張り總數ハ死者ノ一ニ對ス
ル解雇者三・一五デアリマス。而シテ之ヲ各病ニ就テ見マスルト肺結核ハ
死亡ノ一ニ對スル解雇者ノ割合ハ三・八二ニ當リマシテ一人ノ肺結核死者
ノアツタ場合ニ解雇サレタモノガ四人弱アルコトニナリマス。ソレ故ニ纖
維工場ニ於テ肺結核死亡シタルモノ、四倍弱ハ肺結核ナルガ故ニ勞働ニ
耐ヘストシテ解雇サレタノデアリマス、之ハ容易ナラスコトデアリマシ
テ、新潟縣醫師會ノ議ニ上ツタノモ無理ナラスコト、思ヒマス。コレデ肺
結核死ガ割合ニ少ナカツタコトガ了解シ得ラル、ノデアリマス。又脚氣ノ

如キモサウデアリマスガ、一人ノ脚氣死者ガアツタ場合ニ、脚氣ナルカ故
ニ解雇サレタモノカ三・七三人アルノデアリマス。胃腸病モ同ジク一人ノ
胃腸病死者ガアツタ時ニ四・三四人ガ解雇者カアル譯デアリマス。斯
ノ比例ハ餘リ甚シイノデトレステンヘハ出シマセンデシタガ、斯ヤウニ纖
維工場ニ於テ勞働ニ耐エナクナツタ者ハ、纖維工場以外ニ於テモ同ク勞働
不可能者デアリマス。ソレハドウナルカト云フト、扶養義務者アル者ハ
レニ扶養サレテ終ニ無業家族トナツテ死亡シ、否ラザル者ハ養育院等ニ收
容セラレテ公費ヲ以テ養ハレテ死亡シ終ルノデアリマシテ、其死亡スルマ
デハ多數ノハニ結核ヲ感染セシメル機會ヲ造ル者デアリマス。斯様ノ有様
デ纖維工場ニ於ケル工女等ガ寢ニ憐ムベキモノデアアルノミナラズ、一般ノ
公衆衛生上カラ重大ナル問題デハナイカト思フノデアリマス、斯ノ如キ重
大ノ問題ガ如何ニシテ平氣ニ企業者間ニ行ハレテ居ルカト申シマス、今
日ノ本邦ハ工業甚ダ振ハザルガ故ニ、勞働者ヲ得ルコトガ容易デアツテ、
企業者ハ彼等職工ノ健康ヲ保護スルヨリハ、其健康ヲ損ジテ勞働ニ堪エナ
クナルマデハ驅使シ、愈々耐エナクナツタ時ニハ之ヲ解雇シテ、新ニ健康
ナル職工ヲ求メルノデハナイカト思フ、企業者ト雖モ血アリ涙アル者、マ
サカトマス。ハ思ヒマスガ事實ハソウ解雇スルヨリ外ニ途ガナイノデアリ
今ヤ工場法ガ制定セラレマシタ、何レハ進ンデ勞働保險ガ出来ル時モアリ
マシヤウ、而シテ企業者カ勞働者ノ健康ヲ保護スルコトガ、自家頭上ノ利
害問題デアリヤウニナリマシタナラバ、此戰慄スヘキ事態モ變ツテ來ルコ
トガアリマシヤウ、ケレドモ今日ニ於テハ私ドモハ少ナクモ纖維工場ニ對
シテハ結核ノ養成所デアルト見テ置カネバナリマセン。

腦溢血、心臟ノ器質的疾患、肝臟硬化

茲ニ特種ノ疾病トシテ私共ガ重大ニ見ルコトニシマシタノハ結核、癌及
アルコホルニ關係アル疾患デアリマス。殊ニ近來ニナリマシテ世間一般
カラ「アルコホル」ニ關係アル疾病ヲ最モ重大ナルモノトシテ見ルヤウニナ
リマシタ、近頃歐羅巴カラ歸ツタ人ノ話ニヨリマスルト、結核ノ問題ハ既
ニ過去ニ屬シテ居ツテ、今日ニ於テハ「アルコホル」問題ガ最モ重要ナル衛
生の問題デアルト云ツテ居リマスガ、恐ラクサウアルベキ點カト思ハレマ
ス。殊ニ「アルコホル」ノ影響ハ唯或ル單種ノ疾病ヲ誘起スルニ止マラズシ
テ、廣ク諸般ノ疾病ノ原因トナリマスシ、又毒酒ノ及ボス所ハ唯其患者一

人ノ上ニ止マラズシテ、ソレガ子孫ニ及ボスノ虞ガアリマス。爲ニ又一層アルコホルノ問題ヲ重大ニ視ナケレバナラスノデアリマス。併シナガラ本邦ニ於テハ「アルコホル」ノ問題ガソレ程明瞭ニナツテ居リマセス。今度私共ノ作業ノ場合ニモ「アルコホル」ノ問題ニ關シタル材料ヲ如何ニ蒐集スベキカニ就テ大ニ苦心ヲ致シタルデアリマス。明治四十二年ノ分カラハ死因ノ類別ガ細カニナリマスカラ、急性及慢性ノ「アルコホル」中毒ガ明瞭ニ判ルヤウニナリマスノデスガ、明治四十一年分マデハソレガ分ラヌノデアリマス、其處デ「アルコホル」ノ問題ヲ幾ラカ示シマスニハ何カ「アルコホル」ニ緣故アル疾患ヲ出シテ、先ヅ其問題ノ補足ニシタルドシテアラウカ、ソレニハ何處ノ國デモ普通ニヤツテ居リマスノハ「アルコホル」ノ影響ヲ受ケテ發生スルモノトシテ見テ居ルノデアリマス。其外糖尿病ナドモ其中ニ加ヘラレテ居リマス。併シ本邦デハ糖尿病ノ死亡ノ數ガドレダケアルカト云フコトハ分ツテ居リマセス。又「アルコホル」ノ影響ヲ受ケテ發生スル精神病ガアリマスガ、ソレモ數ガ分リマセスノデアリマシテ、先ヅ知ラレテ居ルモノハ「腦溢血」、心臓ノ器質的疾患、肝臓硬化ト此三ツガアルノデアリマスカラ、此三ツニ就テ製表スルコトニ致シマシタ。併シソレガ正シク「アルコホル」中毒ノ關係トハ素ヨリ云ヒ切ルコトガ出來マセヌノデ、只ダ何ガナシニ此三ツノ病ヲ掲ゲマシテ、其色々ノ關係ヲ出シテ見ルコトニ致シマシタ。

右ノ中第一ニ述ベキハ「腦溢血」デアリマス。此「腦溢血」ハバルチヨン類別ニ於テ定メラレタル同一ノ内容デアリマシテ、腦溢血ノ他ニ腦軟化ト腦充血トヲ包含セテアルノデアリマス、所ガ「腦溢血」ト總テガ「アルコホル」ノ影響ヲ受ケテ居ルカト申シマスルト無論ソウハ言ハレマセス、ケレドモ「腦溢血」ノ大部分ハ慢性動脈内膜炎カラ來ルノデアリマシテ、其動脈ノ慢性内膜炎、動脈硬化、アテローム等ハ主トシテ酒精ノ濫用ニ歸スル、誘因トシテハ血壓ヲ亢進セシムル所ノ諸障害ガ數ヘラル、ノデアリマスガ、茲ニ於テモ酒精過飲ガ其一トシテ認メラル、ノデアリマス、ソレニ次デハ微毒ガ原因ト爲ルコトガアルノデアリマスガ、先ヅ一番「アルコホル」ガ重ナルモノデアリマス。腦軟化ハドウデアルカト云フト、是ハ心臓ノ疾患ガアリマシテ、ソレカラ凝血又ハ瓣膜破片等ガ血流ニ混ジテ腦動脈ニ來リ、血管ノ或ル一ヶ所ニ停栓シテ腦血栓ト爲リ、血行ヲ妨ケラル、ニ由リテ其部分

ノ壊死ヲ來タシ茲ニ腦軟化ヲ發起スルノデアリマス、而シテ其腦血栓ノ原因ハ矢張第一ニ「アルコホル」ガ數ヘラレテ微毒ナドガ認メラル、ノデアリマス。ソレカラ腦充血デアリマスガ、此方ハドウカト申シマス、原發性腦充血ガ人ノ死ノ原因ニナラウトハ、チヨット考ヘラレナイノデアリマス、ケレドモ本邦ニ於テハ腦充血ノ死者ガ可ナリアルノデアリマス、何故腦充血ノ死ガ左様ニ多クアルカト云フト、本邦醫師ニ極ク厭ナ習慣ガアリマス、ソレハ殊ニ小兒ガ腦症狀アル疾患デ死亡シマスルト、其本病ノ何タルヲ問ハズ、之ヲ腦膜炎若クハ腦充血ト命名シテ報告スル場合ガ澤山アル、其小兒ノ所謂腦充血ト幻ノ如キ記載アル小票モ報告セラレタル場合ニハ從來ハ之ヲ腦溢血ノ項中ニ入レタノデアアル。ソレ故ニ腦溢血ノ昇降線ハ「アルコホル」ノ關係ヲ有ツテ居ルモノバカリカラ出來タモノノミトハ云ハレマセス、併シ此中ノ大部分ハ「アルコホル」ニ關係アルモノトシテ斯クハ掲ゲテ見タルデアリマス。ソコデ之ヲ見マスルト男ハ女ヨリモ之ニ罹ルコトガ多クテ、九ヶ年ノ平均ガ各性ノ總死亡ニ付男ハ三八・八、女ハ七二・九八、總數ハ七八・四、其男女比例ハ女ノ一ニ對スル男ハ一一・五デアリマス。アルコホルノ關係トシテハ尙ホ女ニ多スギルヤウニ思ハレマス。ソレカラ各年ノ狀態ヲ見マスルト一張一弛、時ニ多少ノ高キコトアルモ先ヅ平衡ヲ保ツテ居ルモノト云ツテ宜シカラウト思ハレマス。ソレカラ次ハ心臓ノ器質的疾患デアリマシテ、死亡原因トシテハ心臓ノ器質的疾患ハ内膜炎、筋質炎並ニ瓣膜諸病デアリマス。其中、急性ノ内膜炎ハ轉移性膿毒性ノモノ「ロイマチス」性ノモノ等アリマスガ之ハ甚タ少數デアリマシテ、最も多キハ慢性ノ内膜炎、筋質炎、瓣膜病等デアリマス。而シテ是等ノ諸病ハ、唯今「腦溢血」ハ腦軟化ノ時ニ申上ゲマシタト矢張リ其原因ヲ同ジシテ居リマシテ、第一ニ「アルコホル」ノ影響ニ次テハ梅毒デアリマス、サレバ「アルコホル」ノ影響ヲ觀察スル場合ニハ何時デモ此心臓ノ疾患デ死亡シマシタ者ノ數ヲ見ルノデアリマス。但シ其場合ニ其患者ガ直接ニ「アルコホル」ノ影響ヲ受ケタル者ノミナラズ、其患者ノ父母若クハ祖父母ガ「アルコホル」ノ中毒ヲ起シテ居リマシタカ、又ハ「アルコホル」濫用者デアツタ場合、ソレガ子ニ及ボシ孫ニ及ボシタル者ヲモ色合スルコトヲ考ヘナケレバナリマセヌ、ソコデ此數ハドウデアルカト申マスルト九ヶ年ノ平均デ各性ノ總死亡ニ付男ガ二四・一、女ガ二六・五、總數ガ二五・三デアリマシテ寧ろ女ノ割合ノ高イノハドウ云フモノデアリマシヤウカ、ソレカラ各年ノ狀況ハ殆ド一

定ノ率アルガ如ク年々増加シツ、アリマス。即チ明治三十二年ノ總死亡ニ對シ二・七％デアツタノガ同四十年ニハ二・八％ニナツテ居リマス。ソレカラ第三番目ノ肝臓硬化ハ殆ト總テガ「アルコホル」ノ濫用ヨリ來ルモノト見ラレテ居リマス。尤モ一種微毒性肝臓硬化ト云フモノモアリマスシ、又マラリア「ヤ」腸管扶助原因ヲ爲スコトアリト申マスガ、併シ大部分ハ「アルコホル」ノ影響デアリマシテ、肝臓硬化ト言ヘハ直ニ「アルコホル」中毒ヲ連想シテヨイホドデアリマス。原來肝臓ハ強イ「アルコホル」ヲ無害物ニ變化サセル働キノアルモノデアリマスガ、久時ノ濫用ハ遂ニ此働キノモ力ナクシ、臟器自ラガ疾患ニ陥ルニ至ルノデアリマス。ソコデ此數ヲ見マスルト、九ヶ年ノ平均デハ總死亡ニ二・三％ニ當リマシテ男ハ三・〇％女ハ一・六％デ女ハ男ノ半バデアリマス。之ヲ各年ニ見マスルト是亦遞増スルバカリデ明治三十二年ニ一・九％デアツタモノガ同四十年ニハ二・九％ニ上ツテ居マス。此三ツノ疾患ヲ斯様ニシテ見ルコトガ果シテ正シイモノカドウカト疑ヒマシタガ、先ヅ此三病ヲ無意味ニ掲ゲマシテ、見ル人ノ判斷ニ委スルコトニ致シタルデアリマス。腦溢血ハ其高低ガアマリセスカラ之ハ別トシマシテ、心臓ノ器質的疾患モ肝臓硬化モ其増加ノシカタガ男ヨリモ女ノ方ガ多イ、即チ心臓ノ器質的疾患ハ明治三十二年ヲ一トシテ同四十年ニ男ハ一・一九デアルノニ女ハ同シ割合ガ一・三〇デアリシ、肝臓硬化ハ男ガ同シ割合一・五〇デアアルノニ女ハ一・五四デアリマス、之ヲ以テ直ニ女ノ「アルコホル」ニ親シム割合ガ増加シタルト爲シ、社會的事情ヲ揣摩スルホド私ハ太早計デモアリマセスガ、併シ餘程注目シテ見ベキ現象デアルト思ハレマス。此三病ヲ合併シテ見ルコトハ一層無意味ニナリマスガ、兎モ角モ行ツテ見マシタ、所ガ腦溢血ノ數ノミ非多イモノデアリマスカラ、他ノ二病ノ數ガ打消サレテ仕舞ヒマシテ、各年ノ形ガ殆ト腦溢血ト同一ノ昇降ヲ取リマシタ、ソレ故ニ之ニ就テハ多ク申マセス。次ニ「アルコホル」關係ノ諸病ト都都トノ關係ニ就テ述ベマス。肺結核ヲ見マシタ場合ニハ都市ニ肺結核ガ多クシテ其他ノ地ニ少ナカッタノデアリマス、都會ニ肺結核ガ多イト云フコトハ變フベキコトデアリマスガ、寧ろ當然デアルヤウニ思ハレマス、何故カト申シマスルト、都會ハ左様ナ疾病ノ蔓延スルノニ適シテ居ル、殊ニ都會生活ヲ爲ス者ハ其他ノ地ニ生活スル者ノ如ク空氣ノ清潔ヲ缺イデ居ル、其他ノ生活條件總テ之ニ準ジテ不健康ニ陥ルベ

ク出來テ居ル、ソレ故ニ私ハ此現象ヲ以テ當然デアルカモ知レスト思フ、併シ都會ノ人口ハ數ノ上ニ於テハ少イ、全國ノ總數カラ見マスルトホノ一部分ニ過ギナイノデアリマスカラ、不健康ニ陥ル程度ガ強クテモ、全國體ニ於テハ左マデ大ナル影響ヲ及ボシテ居リナイノデアリマス。然ルニ此アルコホル關係ノ疾病ヲ見マスルト都市ト其他ノ地トノ間ニ殆ト差ガナイ、ノミナラズ寧ろ都市ノ方ガ其割合ガ少ナイコトニナツテ居ルノデアリマス。即チ三病ヲ合セタル所デ都市ニ於テハ總死亡ニ對スル一〇・四六九％デアリ、其他ノ地ニ於テハ一〇・七八二％デアルト云フヤウナコトデ、寧ろ都市ノ方ガ都市ヨリモ多イコトニナツテ居ル。而シテ之ヲ各病ニ就テ見マスルト、腦溢血ハ都市ニ六七・九六、其他ノ地ニ七八・二〇％總數ニ於テ七七・〇九％デアリマスシ、心臓ノ器質的疾患ハ都市ニ三四・一五％其他ノ地ニ二六・八八％總數ニ於テ二七・六〇％デアリマシテ肝臓硬化ハ都市ニ二・五八％其他ノ地ニ二・八一％總數ニ於テ二・七九％デアリマシタ、何故ニ斯ノ如キ甲乙、乙丙トノ間ニ異ナル現象ヲ呈スルカ、今ハ其原因ヲ討テテ論ゼスコトニ致シマシヤウ。先ヅ大體ニ於テ都市ヨリモ其他ノ地ニ「アルコホル」ノ影響ヲ被ムリタルト見ルベキ疾病ガ多イ、サテ此事實ハ「アルコホル」ガ吾人ノ健康ヲ毀傷スル程度ハ、結核ガ侵襲ヨリモ尙一層其範圍ガ廣クナツテ居ルト云フコトヲ考ヘナケレバナリマセス、都市ニ於テハ之ニ對スル矯正策ヲ講ズルニモ比較的易イノデアリマスガ、寧ろ都村ニ於テ廣ク此患者ガ行渡ツテ居ルトシマスルト、此アルコホル問題ヲ研究スル者ニ取リマシテハ頗ル考ヘナケレバナラスコト、思フノデアリマス。次ニ年齡別ヲ見マスルト、腦溢血ハ四十歳頃カラ漸次多クナツテ六十歳カラ七十歳ト云フ階級ガ最も高ク、心臓ノ器質的疾患ハ四十五歳以上五十歳ノ階級ガ最も高ク、肝臓硬化ハ四十五歳カラ五十歳、五十歳カラ五十五歳ト云フ階級ニ最も多イ、是ハ左モアルベキコト、思ヒマス、アルコホルノ影響デアルトスレバ、其急性中毒ヲ除クノ外ハ、餘リ若年ノ人ニハ來ルコトガ少ナイ、多クハ相當ノ年代ニ達シマシテ、即チ初老以後ニ於テ始メテ其蓄積シタル中毒ノ症狀ノ發現ヲ見ルノデアリマシヤウ、之ヲ肺結核ニ比シマスルト、其年齡別ノ關係ハ正反對ニナツテ居リマス、極ク若イ五歳カラ十歳或ハ十歳ヨリ十五歳ト云フヤウナ所ニ相當ノ數ノアルノハ、是ハ先刻申上ゲマシタル醫師ノ腦充血ト云フ名目ノ下ニ報告シタモノガ此ニ出テ來ルノデアリマス、是等ノ幻ノ如キ數ヲ取り去ルコトガ出來マ

シタナラバ、肺結核ノ年齡別ト正反對ニナルコトガ明瞭ニナルデアラウト
思ヒマス、アルコホルノ影響ハ著シテ發シタルコトガ多イカラ餘リ弱年
ニハナイ、結核ハ人ガ漸ク勞働年齡ニ入ラウトスル時ニ發スノデアリマス
カラ、全ク養育費ヲ償フニ足リナイ、ソレダケモ經濟上非常ナ損失デア
ル。ソレカラ之ヲ職業別ニ分ケテ觀察致シマス。是ハ有業者ノミヲ見タ
デアリマスガ、サウ致シマスト商業者ガ其總死亡ノ一九・一二％第一位
ニ居リ、公務及自由業ガ一九・〇％第二位デアリマス。次ニ高イモノ
ヲ求メマスト人力車挽等ガ一七・八％土木建築者ガ一六・九％飲食料品
製造者ノ一六・八％農林業者ノ一六・八％木竹類工業ノ一六・四％機
械工業ノ一六・一％等デアリマス。サレバ身ヲ安逸ニシテ居ル者ニ最モ
高ク、亂暴ナ生活ヲ爲シテ居ル者之ニ次カノ觀ガアル、就中農林業者ニ
多イノハ寔ニ遺憾デアリマスガ、本邦ノ地方人ガ常ニ「アルコホル」ニ親
デ居ルト云フコトハ、常識的ニ知ラレテ居ルコトデアリマスカラ、右ノ結
果モ亦非認スルコトガ出來ヌノデアリマス、而シテ茲デ其數ノ最モ少ナイ
ノハ現役軍人デアリマスガ、コレハ軍人ガ酒ヲ濫用シナイノデアリナイ、其
年齡ガ若イカラ「アルコホル」ノ影響ヲ見ルニ至ラナイノデアリマス。唯
此場合ニ意ヲ強フルニ足ルハ教育ニ關スル業者ガ九・七八％他ノ多
クヨリモ低イコトデアリマス。尙ホ此アルコホル關係ニ就テハ餘程深ク立
入ツテ研究セネバナラヌノデアリマスガ、ソレハ追テノコト、シテ今ハ是
ダケヲ述ベテ置キマス。

癌

癌ハ今日不明ノ病デアリマス。或ハ傳染病デアリハセスカト云フ疑ヲ
懷クモアル、イヤ全ク傳染性ノ病デハナイト云フ者モアリマシテ、現今
ノ癌ハ不明ノ病ト言ハナケレバナリマセス。此不明ノ病デアリダケニ又研
究ノ價モアルノデアリマシヤウ、即チ種々ナル方面カラ盛ニ研究セラレテ
居リマス。所ガ癌ノ死亡ハ殆ド世界ヲ通ジテ到ル所ニ其數ガ多クナツテ來
ルノデアリマス。何處ノ國ノ統計ヲ見マシテモ癌ガ少ナクナル所ハアリマ
セス、其死亡ノ割合ガ大變多クナリマス。或ハ醫學ガ開ケテ癌ノ診斷ガ確
實ニ出來ルヤウニナツタ、其爲デアリカモ知レマセスト言フ者モアリマ
スガ、兎ニ角非常ニ多クナツテ來マス。試ミニ英吉利ニ於ケル千八百八十
六年カラ千八百九十年マデノ五年間ノ平均ヲ見マスルト、人口ノ一萬ニ對

十五歳五十五歳以上六十歳ト云フ階級ガ一番多數ニナツテ居ル。殊ニ其階
級ニ於ケル女ガ多ク癌ニ侵サレテ居ルノデアリマス、サウシテ段々侵サレ
ルモノガ少クナツテ來ル。ソレハ老年ニ至ツテ癌ニ侵サレルモノハ少イノ
デアリマスガ、或ハ癌發生年齡ノ四十五歳乃至六十歳頃ニ罹リマシタ者
ガ、一度癌ニ罹ツテハ三年ノ間ニ死亡シ終ル、ソレガ爲ニ高年ニ至ルト
癌死亡ガ無イノカ知レマセスガ、斯様ナ有様ニ山ヲ作ツテ居ツテ、前後ノ傾
斜ヲ明カニ示シテ居ルノデアリマス。ソレカラ此癌ヲ都市ニ依テ分ケテ見
マス、都市ニ多クシテ其他ノ地ニ少イ、即チ都市ハ其總死亡ノ三・二九％
デアリノニ其他ノ地ハ二・七四％デアリ。ソコデ癌ガ傳染病デアリカ否カ
ト云フコトハ全ク不明デアリマシテ、或人ハ「プロトゾオン」ニ因テ發生ス
ル病ダトモ言ヒマシテ、又其プロトゾオン說ノ中ニモアレカコレカト幾ツ
モ異ナツタ説ガアリマス、研究家ノ言フガ如ク「プロトゾオン」ガ原因物デ
アルトシマシテモ、恐ラク是ハ直接ニ人ノ身體カラ人ノ身體ニ傳染スルモ
ノデアリマス、恰モ「マラリヤ」ガ蚊ニ依リテ傳ヘラレ、新瀉縣ニアリ
マスル恙虫病ガ赤虫ニ刺蝟セラレ、爲メニ發生スルヤウナモノデ、他ノ動
物ヲ介シテユルヤカニ傳播セラレ、モノカト思ハレルノデアリマス。サウ
シマスト若シ傳染病デアルトシテモ都會生活ガ必ズシモ癌ノ傳播ヲ助ケル
モノデナイヤウニ想像サレル、然ルニ茲ニ知ラレタル數ノ都市ニ多クシテ
其他ノ地ニ少イト云フノハ、果シテ眞實ノ事實デアリカ、或ハ他ニ何カ關
係ガアルカト考ヘテ見ナケレバナラヌト思ヒマス。私ハ密カニ思ヒマスノ
ニ癌ガ若シ傳染病デアルトシテモ、其病性カラ見テ都市ト其他ノ地トノ間
ニサウ差ハナイ筈ノモノデアリハセスカト、此所ニ知ラレタル都市ニ多クシ
テ其他ノ地ニ少イト云フコトハ、或ハ醫師ノ診斷ガ其他ノ地デハ都市程ニ
正確ニ行カナイ爲デアリカトモ思ヒマス。併シ一轉シテ職業別ノ方ヲ見
マス、或ハ又サウデモ無イヤウニモ思ハレマス、即チ有業者ノミニ就テ
見マシタル所、商業者ガ其總死亡ノ七・四六％ノ癌死亡者ヲ出シテ居ルノ
デ是ガ最多數デアル。ソレニ次グモノハ飲食料品ノ製造者デ六・七四％ソ
レカラ紙、皮革等ノ製造者デ六・〇九％其次ハ公務及自由業、商業常ニ胃腸ヲ
侵シテ居ツテ幾ラカ生活ノ程度ノ高イ者、公務及自由業、商業常ニ胃腸ヲ
損スルコト多キ飲食料品製造者、不潔物ニ接觸スルコト多キ紙及皮革等ノ
製造者ニ癌ノ死亡ガ多イノデアリマシテ、純粹ノ勞働者ニハ一般ニ癌死亡
ガ少ク、幾ラカ生活ノ程度ノ高イ者トカ特種ノ關係アルラシイ者ニ多イ、サ

ウシマスルト殆ト大部分ガ農林業者デアリベキ都市以外ノ地ガ、都市ニ比
シテ生活程度ノ低イノハ當然デアリマスカラ、其傳染ノ機會ト云フ方面カ
ラ見ズニ、生活ノ程度ノ低イ者ト高イ者トノ關係カラ見マスレバ、都市以
外ノ地ニ少イト云フノガ或ハ當然カモ知レマセスガ、先ヅ左様ナ事實ガア
ルノデアリマス。茲デ癌死亡ノ極少イ〇・七五％デアリノハ陸海軍ノ現
役軍人デアリマシテ、コレハ「アルコホル」ノ場合ニ申上ゲタト同ジヤウ
ニ、其大部分ナル下士卒ハ年齡ノ若イ者デゴザイマスカラ、癌ニ罹ル年
者ガ少イ、ソレガ爲ニ斯ノ如キ數ニナルノデアリマス、其次ニ教育ニ關
スル業者ニ癌死亡ガ少イ唯三・二九％デアリ、ソレハ結核ノ場合ニ於テ述
ベタル如ク、教育業者ハ其生活難ノ爲メニ結核ノ死亡數ガ多イ位デアリカ
ラ、ソレト反對ニ彼等ハ癌ニ罹ル程ノ餘裕アル生活ヲ爲シテ居ラヌノカモ
知レマセス。ソレカラ鐵道冶金業ガ一・四五％少ナイ、是等ノ職業者ノ
年齡別ガアリマセスカラ能クハ分リマセスガ、癌年齡以上ノ者ガ鐵道ニ
於テ勞働スルコトガ少ナイノデアリマス、隨分鐵道ニ勞働スル
者等ハ飲食料ノ資澤ナ生活ヲシテ居ルノデアリマスガ、ソレガ農林業者ノ
四・七八％ヨリモ過カニ少イコトハチヨツト受取レマセスガ、サテ斯様ナ
譯デ生活ノ程度ガ癌死亡ニ影響スルコトガ果シテ大デアリカドウカト云フ
コトヲ見ルニハ、有業者ト同時ニ無業家族ヲ見ルコトガ必要デアリ、無業
家族ハ職業ニ從事シテ居リマセスケレドモ、有業者カラ扶養サレテ居リマ
スル爲ニ職業ニ依リテ社會ノ地位ヲ想像シ其生活程度ヲ察スルトキハ、無
業家族ニ如何ニ影響スルカラ見ルノガ一ノ方法デアリマス、ソレデ有業者
總體ハ其總死亡ニ對スル癌死亡ガ四・八六％デアリガ、無業家族ハ一・五
九％デアリ、コレハ癌年齡ニ達セサル年少者ヲモ包含スルカラデアリマ
ス。無業家族ノ癌死亡多キモノヲ舉ゲルト、商業ノ二・六二％、公務及自
由業ノ二・七七％、現役軍人ノ二・一九％、無業業ノ二・九六％等デアツテ
茲ニ於ケル軍人ハ士官以上デアリマスカラ此位ノコトハアリマシヤウ、又
無業業ト云フノハ何レモ生活スル安居者ト思ハレル又有業者デハ少ナカ
ツタ鐵道業者モ家族ニハ相當ノ年齡者ガ多イカラシテ二・二一％デアリマス、
是等カラ考ヘマシテモ身ヲ安逸ニシテ居ル者ガ癌ニ罹リ易イ、又其生活ノ
程度ノ高イ者ガ癌ニ罹リ易イト云フコトハ考ヘ得ルコトカト思ヒマス。尙
之ニ對比スベキ他ノ癌統計ヲ得テ細ニ分解シテ見タナラハ興味アルコト、
思ヒマスガ、明治四十二年ノ死因統計ノ出來ルマデハ、餘リ詳シイ材料ヲ

シテ癌ノ死亡ガ六・三デアツタノガ、ソレカラ五年毎ノ平均ガ七・一、八・
〇、八・六ト増多シテ、近キ千九百八年ニハ九・二ニ爲ツタノデアリマス。
又普魯西ヲ見マスト千八百八十六年カラ千八百九十年迄ノ平均ハ人口一萬
ニ就キ四・一デアツタノガ同ジク五・〇、五・七、六・五ト増加シテ千九百八
年ニハ七・二ニ上ツテ居リマス。又佛蘭西等ニ於キマシテモコレハ人口五
千以上ノ地ノミノ計算デアリマスガ、千八百八十六年カラノ五年平均ハ
九・八デソレカ漸次増加シテ千九百七年ニハ二〇・一八ニナツテ居ルノデア
リマス。何處ノ國ヲ見マシテモ癌ノ死亡ハ何レモ多少ハアリマスケレドモ皆
一樣ニ多クナルバカリデアアル。本邦モ矢張御多分ニ洩レマセズ癌ノ死亡ガ
年々多クナルバカリデアリマシテ、其人口一萬ニ對スル癌死亡ノ割合ハ、
明治三十二年ガ四・三デ、ソレガ四・四ニナリ四・八ニナリ五・三、五・四、
五・四、五・五、五・六、ト増多シテ明治四十年ニハ五・七ニマデ上ツタノデ
アリマス。而シテ此九ケ年間ノ平均ハ五・二デアリマシテ男女トモ同數
デアリマス。次ニハ癌ノ年齡別ヲ見マス、癌ガ如何ナル年齡殺ノ者ニ多イ
カト云フト、嘗テハ四十歳以上デナケレバ癌ハ無イ。四十歳ヲ以テ癌發生
ノ年齡ト爲サドト云フテ居ツタノデアリマスガ、段々學者ノ研究ノ結果
癌ガモツ少シ若イ人ニ發生スルコトガ知ラレタ、少年期ノ者ニ癌ヲ發見シ
タルコトハ必ズシモ稀有デナイコトニナツタ、殊ニ子宮癌デアルトカ乳癌
デアルトカ云フヤウナモノハ餘程若イ婦人ニ見ラレル、サレバ二十歳前後
ニシテ癌ヲ證明サレタル者モアリマスシ。極ク稀ナル報告トシテハ五歳ノ
小兒ガ癌デ斃レタノヲ發見シタルモアル。或ハ十四歳ノ小兒ガ癌デ斃レタ
ト云フ報告モアリマス。我統計局ニ於テ死亡ノ小票ヲ取扱ヒマスル場合ニ
斯ノ如キ若年者ノ癌ヲ如何ニ取扱フカト申マスト、先ヅ其死亡ノ地ニ就テ
一應ハ照會スル、而シテ其主治醫ガ稀有ノ症例ヲ判定シ得ルホドノ信用ア
ル人デアツタ場合ニハ之ヲ癌トシテ取ル、併シソレカ山間僻處ノ地ナドデ
アツテ、診斷ノ疑ハシイ場合ニハ、之ヲ不明ノ病名ヲ附シタルモノトシテ
皆捨テ、仕舞フ、併シ斯様ナ疑ヲ掃ムベキモノハ極ク稀ニ來ルノデアリマ
スカラ、取テモ藥テモ數ノ上ニハ大ナル影響ハナイ、又今日マデ來タモノ
デ調べテ見ルト何レモ診斷ノ怪シイノバカリデ、ソレ等ノ非常ニ若年者ノ
癌ハ皆藥テマシテ、茲ニ出テ居ルノハ二十五歳以上ノ癌死亡バカリデアリ
マス。尤モ今マデニ藥テタ若年者ノ癌ヲ皆集メタ所デ、此描畫圖ノ中ニ入
レテモ見ヘヌ程ノ少數デアアル。ソコデ年齡ニ就テ見マス、五十歳以上五

有シマセヌノデ、思ヒ切ツテ立入ツタコトハ申上ケルコトヲ控ヘマス。痛
ノ爲ニハ本邦ニモ研究會ト云フモノアリマスルガ、統計ヲ方法トシテ
用ユル統計上カラ痛ヲ調ベタモノハナイヤウデアリマシテ、病院ノ入院
患者五十人カ百人ノ事實ニ就テノミ調ベタモノガアルダケカト思ヒマス
ガ、何レ明治四十二年カラノ死因統計ハ眞面目ノ研究家ノ好資料ニ爲ラウ
カト考ヘテ居リマス。ソレカラ重大ナル疾病トシテ舉ゲマシタモノハ肺結
核、ソレカラ「アルコホル」ニ關係アル疾病ト此痛ト三痛デアリマシテ、
世界ノ人ガ均シク見テ以テ重大ノ疾患トシテ居ル疾病ガモウ一ツアル、ソ
レハ花柳病デアリマス。本邦ハ花柳病デハ他ノ邦國ニ引ケテ取ラス程澤山
アルト人ガ常ニ言ヒマス、果シテソウデアアルカドウダカ、花柳病ノ癩ヤノ
數ハ、何處ノ國デモ餘リ公ニスルコトヲ喜バズ、勿論學者ノ會合ニ於テハ
ソナ遠慮ハナイ、花柳病ノ數ヲ舉ゲテ其調ベヲ公ニスルコトナドハ隨分
興味アル研究デアリマスガ、公衆ノ前ニ於テ花柳病ノ數ガ幾何アツテ、ソ
レガ如何ナル者ニ花柳病ガ多イナド、云フコトヲ公言スルコトハ、虚飾ト
言ヘバ虚飾デアアルカモ知レマセヌガ、先ツ左様ナコトハ避クベキコト、シ
テ居ルヤウデアリマス。ソレ故ニ今同モ花柳病ノ數ヲ出品スルコトヲ避ケ
タノデアリマス。

脚 氣

此脚氣ニ關スル材料ハ、別段統計局ニノミ限ツテ好イ材料ガアル譯デハ
アリマセヌガ、他ニ餘リ好イ材料ガアリマセヌ爲ニ、此統計局ガ有ツテ居
ル材料ガ一番有力ナル信ゼラルベキ材料トシテ認メラレテ居ルデアリマ
シテ、是ダケデハナイ、マダ澤山ニ此處ヘ出スコトノ出來ル材料ヲ有ツテ
居ルデアリマスガ、今回ノ博覽會ニ對シテ陸軍省モ矢張り色々ノ描畫圖
ヲ出品セラル、コトニナリマシテ、陸軍省ニハ臨時脚氣病調查會ト云フ
機關ガアリマシテ、茲デ脚氣ノ調査ヲ専門ニ行ツテ居ラル、ノデアリマ
ス、其脚氣病調查會カラ脚氣ニ關スル統計ノ描畫圖ガ失張此博覽會ヘ出品
セラル、コトニナリマシテ、統計局ガ有ツテ居ル材料中ノ一部ヲ其
方ヘ分給シマシタ、ソレ故ニ此處ニハ結核ノ癩ヤト同ジ形ニ現ハシ得ベキ
モノノミヲ出品スコトニナツタノデアリマス。脚氣ハ斯様ナ調査ヲ致シマス
ノニ都合ノ宜イ疾病デアリマス、何故カト申サマス、脚氣ノ診斷ハ餘リ
難カシクナイ。ソレノミナラズ漢法醫家モ亦脚氣ヲ診斷シ得ルデアリマ

ス、例ヘバ肺結核ノ如キ又痛ノ如キ疾病ニナルトノ新シイ醫學ヲ學ンデ居
ナイ者ニハ往々診斷ヲ誤ツコトガアリマスガ、然ルニ斯様ニ申シタナラ
バ、醫家カラハ何ヲ馬鹿ナト叱ラレルカモ知レマセヌガ、死亡取扱テ
居ル私ドモハ日本ノ醫師中ニハ偉クナイ人ガ随分多イコトヲ信ジテ居リマ
ス、脚氣ハ漢法醫時代カラ脚氣トシテ診斷サレテ來タ病氣デゴザイマス
ラ、脚氣ノ診斷ハ殆ト誤ラナイ、又疾病ノ性質トシテ脚氣ヲ隱蔽スルコト
フヤウナコトモ無い、或ル所デ脚氣ノアツタコトヲ言フコトヲ避ケル爲メニ末
梢神經炎ト名ツケテ報告シタナド、傳ヘラレタコトモアリマスガ、ソレモ
結局虛説デアツタラシイ様デアリマス、ソレ故ニ脚氣ハ餘程正シイ數ヲ得
易イノデアリマス。其處デ脚氣死亡人口一萬ニ比例シテ見マスト明治三
十二年ハ二〇〇デアリマシテ、爾來一、四、一、五、二、四、二、三、二、〇、
二、五、一、六、一、八ト云フ消長ガアリマシテ此九ヶ年間平均ハ二〇〇デア
リマス、又之ヲ總死亡ニ千ニ比例シテ見マスト最高一、一五八、最低七、二
四、九ヶ年間平均九、五七デアリマシテ、矢張り變動ガ劇シイ、若シ脚氣ガ
普通病デ、氣管支炎ヤ胃腸加害兒ノ如キモノデアツタナラバ、否若シ傳染
性ノ疾病カ又ハ流行性ニ來ル疾病デナイナラバ、右ノ如ク年ニ依ツテ非常
ナル變動ヲ見ルト云フコトハ頗ル疑ハシイノデアリマス。今日デハ脚氣ノ
原因ハ不明デアリマスガ、近來多クノ學者ハ食物中ニ一種ノ必要ナル營養
分ヲ缺カガ爲ニ脚氣ヲ起スノデアルト云フ説ヲ唱ヘル人ガアリマス。之ヲ
モウ少シ詳ニ申シ上ゲマス、嘗テハ脚氣ヲ以テ一種ノ傳染病ト見做サレ
タ、ソレガ爲ニ或ル學者ハ脚氣ノ病原菌ヲ發見シタコトモアリマスガ、今ハ
人ニ忘レラレタ、其後幾人モガ幾度カ脚氣ノ病原菌ト云フモノヲ捉ヘマシ
タガ、皆其報告當時少シ世ノ評判ニ上ルノミデ、段々消エテ無クナツテ
仕舞ツタ、又別ニ中毒デアラウツト唱道シタ人モアリマシテ、其第一ニ唱
ラレタノガ青イ魚ノ中毒デアルト云フ説、鰯トカ鰯トカ鰯トカ云フ
ヤウナ青色ノ魚ヲ食スル者ガ脚氣ニ罹ルト云フデアリマシタ、ソレカラ
米ノ中毒説ガ伸々盛ンデアリマシテ、麥飯ヲ食ツテ居ルバ脚氣ニ罹ラスガ
米ヲ食ヘバ罹ル、米ノ中ニ一種ノ毒素ヲ有ツテ居ルノガアル、其米ヲ食スレ
バ罹ルト云フ説、此説カラ轉化シタトモ見ラレル米ニ一種ノ酸酵菌カ出來
テ其產物ガ脚氣ヲ起サセルト云フ説ガ出マシタ、是ハ大分有力ナル説トシ
テ傳ヘラレタノデアリマシタガ、更ニソレカラモウ一層進ミマシテ、サウ
デハ無い、丁度バタバ地方或ハ印度ノ一地方デ玄米ヲ其儘食ベテ居ル、

或ハ熟米ト云ツテ被ツテ居ル中ニ蒸カシテ後取ツテ食ベル、其熟
米ヲ食ベルト脚氣ニ罹ツタ者ガ遠ル、又ソレヲ食ベテ居ルト脚氣ニ罹ラナ
イ、ソレ故ニ是ハ白米ニシテ精ケテ仕舞ツタ米ノ中ニハ米ノ成分ノ或ルモ
ノガ缺乏スルガ爲ニ脚氣ニ罹ルノデアラウツト云フコトヲ彼地カラ稱ヘ出サ
レタ、ソウシテ本邦ノ學者等モ段々此説ニ注意ヲ拂フヤウニナツテ、脚ガ
缺乏スルト云フ説ガアル、又脚ガハナイ其以外ノ有効成分ガ缺乏シタ爲メ
ダト云フ人モアル、イヤソレダケデモ無いト云フヤウナコトデ、米ヲ精ゲ
ルガ爲メニ失フ糖ニ就テノ研究ガ盛ンニ行ハレルコトニナツタ、今日デハ
モウ一層進ミテ來テ、糖モ其他ノ成分モ必要デアルガ、マダ未知ノ物質デアツ
タ或ルモノヲ失フタ爲メダト云フ説ガ出タ、是ハ農科大學教授ノ鈴木博士
ノ研究業績デアツテ、ツイ近頃東京化學會デ報告サレタ、其報告ハ専門的
ノモノデアリマスカラ、茲デハ報告シマセヌガ、兎ニ角糖ノ中カラ一種ノ
蛋白質ガ發見セラレタ、ソレハ既知ノ二十幾種糖蛋白質以外ノモノデ、之
ヲ缺イタ食物ヲ攝ルト脚氣ニナル、脚氣様疾患ニ罹ツタ動物モ蛋白質酸ヲ與
ヘルト忽チ癒ルト云フデアリマシテ、博士ハ之ニ「アンチペリペリ」カラ
轉化サセテ「アペリ酸」ト命名セラレマシタ、私ドモノ様ナ自己ニ一定ノ主
張ナキ者ハ斯様ニ糖マツタ説ヲ聞クトソレヲ信ジタナル、即チソレカラ
ラスカ私ハ此鈴木博士ノ説ヲ餘程重大ナル説デアルト思フテ居リマス。所
ガ昨年ノ年末デアリマシタガ鈴木博士ト會合スル機會ガアリマシテ、其時
ニ恰モ脚氣病調查會ノ囑託デ私ガ調ベテ居リマシタ、ソレハ本局ノ材料デ
關ベマシタ統計ヲ持ツテ居リマシタノデ、ソレヲ博士ニ見セシ、自分ノ多
少ノ疑ヲ述ベタコトガアリマシタ。私ノ疑ヒト云フノハ要スル自己ノ調査
ニ拘泥シテ居ルノデアツテ、成程アペリ酸ノ缺乏ニ因ツテ脚氣ヲ發スルコ
トガ確實デアルトスル、ソレニシテモ私ノ調ベタ脚氣ノ氣象トノ關係ニ依
テ見マスルト、氣象上ノ或ル現象ト脚氣トガ追隨スル關係ガアル、又全國
ヲ通ジテ見ルト或ル年ニハ非常ニ多ク或ル年ニハ少イ、又同ジ多イ年デモ
少ナイ年デモ、地方的ノ偏倚ガアル、斯様ナ事實ハ「アペリ酸」ノ缺乏ニ因
テ脚氣ヲ發スルト云フ以外ニ、其アペリ酸ノ缺乏ト關聯シテ外圍カラ及ボ
ス何等カノ原因ガアルコトヲ考ヘネバナラス、ソレハ米ニ勸クノカ人身ニ
勸クノカ、私ニハ素ヨリ分ル筈モナイガ、唯單純ノ動物試驗ノミナラズ、
今一步進ンデ斯様ナ關係モ研究シテ貰ヒタイト思フデアリマシタ、鈴木
博士モソレハ大變面白イ意見ダカラ君ノ調査ガ出來タラ是非見セテ呉レト

云ツテ居ラレマシタ。今回ノドレスデン博覽會ヘ出品セラレマシタ脚氣病
調查會ノ統計描畫圖中ニモ、脚氣ノ氣象トノ關係ヲ見タモノガアリマスガ、
併シ今迄見タモノハ總テ死亡ノ月ニ依テ調ベタモノデ、其發病ノ時デ調ベ
ナケレバ氣象トノ關係上甚ダ不満足デアリマス、是非發病ノ時ヲ知
リタイモノト考ヘテ居リマス。是ハ餘談デゴザイマスガ、脚氣ノ狀況ハ斯
様ナ風デアリマシテ、之ヲ地方々々ニ見マスルト、或ル年ハ或ル地方ニ多
クシテ或年ニハ或ル地方ニ少イ、其多イ少イノ關係ガ此所ニ多クカツタ年ニ
ハ全國ニ多イト云フ譯ニハ參リマセヌデ、東京ノ地方ガ多ク大阪ノ地
方ガ少イ、大阪ノ地方ガ多ク東京ノ地方ガ少イト云フヤウナ關係モ
アルノデアリマス、其等ハ今申シマシタ中毒トカ或ハ或ル營養品ノ缺乏シ
タル爲ニト云フ簡單ナ理由ノミデハ理解シ得ナイ問題デアルヤウニ思ヒマ
ス、殊ニ都鄙ノ關係ナド見マスト、成程田舎デハ副食物ガ遠フコトカ、或
ハ麥ヲ食ベルト云フ關係ハアリマセヌガ、都市ニハ其總死亡ニ對スル三、一
二、%ノ脚氣死亡ガアルノニ其他ノ地ニハソレガ〇、五、六、%デアルト云フコ
トハ餘リニ懸隔ガ大キ過ギハセスカ、又モウ一層重大ノ問題ハ男女ノ差デ
アリマシテ、一ツ家庭デ同ジ食物ヲ食ベル間デ、寧ロ其主食物ノ營養品ノ
足りナイ所ヲ副食物デ補フト云フ點カラ云ヘバ、女性ヨリモ男性ノ方ガ多
ク副食物ヲ取ルノデアリマスカラ、却テ脚氣ニ罹ラナイ筈デアルノニ、總
死亡ニ對スル男ハ一、三、五、九、%女ハ五、四、五、%デアノ一ニ對スル男ハ二、四
九、%常ルダケ男ノ方ガ著シク脚氣ニ罹ルコトガ多イ、其等ニ依ツテモ食物
ノ關係ガ脚氣發生ノ重大原因デアリマシヤウガ、併シ脚氣ノ研究ハ單純
ニ食物ダケノ問題デハ無いヤウニ思ハレマス。ソレカラ脚氣ノ年齡別ニ就
テ一言シマス、脚氣ハ男ニ於テハ十五歳乃至二十歳ノ階級ガ最も多ク、女
ニ於テハ二十歳以上二十五歳ガ最も多イ、恰モ其關係ハ結核ガ十五歳以上
二十歳ノ女ニ多クテ其次ノ階級ニハ男子ガ多イ、ソレト反對デアリマス。
併シ男ニ於テハ十五歳ヨリ二十歳ト云フ階級ガ殊ニ高イ山ノ頂上ヲ爲シ同
齡ノ總死亡ニ對スル七、八、六、%デアツテ、其前後ニ於ケル傾斜ハ頗ル急デ
アリマスガ、女ノ二十歳ヨリ二十五歳ト云フ階級ハ同齡ノ總死亡ニ對スル
二、〇、六、%デ、ソレガ山ノ頂上デハアリマスガ、左右ニ下ル傾斜ハ極ク緩
カデアツテ、僅カシカ下ツテ居リマセヌ。此際ニ特ニ注意シナケレバナラ
スコトハ女ノ脚氣ト妊娠及產後等ノ關係ガ非常ニ親善ナルモノデアルコト
デアリマシテ、之ハ他ノ材料デ見タノデアリマスガ、脚氣病調查會ヘ報告

シテ参リマスル材料ニ依ル脚氣患者統計ニヨリマスルト、女ノ脚氣患者ノ
五四・六四%ハ有配偶者デアツテ、其有配偶者ノ約半數即チ總數ノ二四・七
四%ハ妊娠及産後ノ關係ヲ有ツテ居ルノデアリマシタ、サレバ女ノ脚氣ノ
約四分ノ一ハ妊娠及産後ノ關係ヲ有ツテ居ルト云フテモ宜イノデアリマシ
テ、其間ハ非常ニ親善ナルモノト思ハレマス、ソレ故ニ二十歳カラ二十五
歳ト云フ階級及十五歳ヨリ二十歳ト云フ階級、ソレカラ四十歳位マデノ年
齡間ハ妊娠及産後ノ關係ガ多イカラ、其間ノ女ノ脚氣死ハ大ナル差ガ無ク、
山ノ頂上カラノ傾斜ガ緩デアリマス。脚氣死ハ死亡員數ノ上カラ中セ
バ、餘リ大シタ多イモノデアリマセスガ、本病ガ殊ニ本邦人ニ著シクア
ツテ、而カモソレガ青年期ノ人ニ多クアリマシテ、殊ニ脚氣ノ性トシテ人
ノ多ク集合シテ生活シテ居ル場所、例ヘバ學校ノ寄宿舎デアルトカ、或ハ
兵營デアルトカ、若クハ工場デアルトカ云フヤウナ場所ニ非常ニ多イノデ
アリマシテ、其集テ生活シテ居ル人ハ、ソレガ學問ヲシテ居ルノデモ、
或ハ兵營ニ居ルノデモ、工場ニ働イテ居ルニシテモ、何レ國民トシテ殊ニ
重要ナル人ガ多ク罹ルノデアリマスカラ、茲ニ於テカ最モ重大ナ疾病トシ
テ研究スル價アルノデアリマス。明治四十二年カラハ幸ニ統計ニ用フル
死亡原因ノ世界共通類別ガ改正サレマシテ、所謂ベルチヨン類別中ニ、脚
氣ト云フ一ノ項目ガ入ラレマシテ、世界中ノ脚氣アル邦國ノ脚氣死亡全
數ヲ見ルコトガ出來ルヤウニナリマシタカラ、世界ノ統計ノ調査ヲシ
得ル機會ニ接近シテ來タノデアリマス、今日知ラレテ居ル世界中ノ脚氣ノ
アル邦國ヲ舉ゲマスト先ヅ日本、ソレカラ支那ノ沿海地方ニ多少アルサウ
デアリマス、日本ノ領土デアアル臺灣ニハ非常ニ多クアル、又日本ノ領土内
デハ南方ノ臺灣ニアルト同時ニ北方ノ樺太ニモ澤山アリマス、又北海
道モ非常ニ多クノ脚氣ヲ有ツテ居リマス、ソレカラ日本ノ領土外ニハ比律
賓ニ多クアリマス、バタビヤ地方、海峽殖民地、印度、安南、暹羅等ニモ
アリマス、南亞米利加ニハブラジル、秘魯、智利ニモ多クハアリマセスガ
多少ハアルヤウデアリマス、サウシマスレバ随分脚氣ノ有病區域ハ廣イ、
從テ面白イモノガ將來ハ出來ルデアラウト思ハレマス。此脚氣ノ調査ニ就
テハ以上諸國ノ地位カラ見テ日本ガ中心ニナラネバナラヌコトデアリマス
カラ、脚氣ノ統計モ日本ガ中心ニナツテ今後調べナケレバナラヌト思フテ
居リマス。

ソレカラ脚氣ノ職業別ヲ見マス、是ハ瘡ヲ結核ト餘程趣ヲ異ニシテ居リ

マス。最モ多數ヲ占メテ居ル者ハ他ノ病氣ニ於テハ非常ニ少ウゴザイマシ
タ現役軍人デアリマシテ、總死亡ノ六・八〇%ノ脚氣死者ガアル、是ハ先刻
申上ゲタヤウニ多クノ者ガ集ツテ生活シテ居ルト云フコトノ關係デアラウ
ト思ヒマス、此場合ニ殘念ナコトニハ寄宿舎ニ居ル學生ノ數ヲ調べラウ
ガ出來ナイノデアリマシテ、是ハ無業家族ノ中ニ包含シテ居リマスカラ分
リマセス、併シ文部省デ年々集メテ居ラレル師範學校本科生ノ寄宿舎ニ在
ル者ノ疾病報告ニ依ツテ見マスルト、學校ノ寄宿舎ニアル者ニハ随分澤山
ノ脚氣患者ガアル、殊ニ多クゴザイマシタノハ東京女子高等師範學校ノ寄
宿舎デアリマシタ、女子高等師範學校ノ寄宿舎ト申シマスレバ妙齡ノ婦女
デアリマスカラ、固ヨリ有夫ノ婦デハナイノデアリマシテ、從テ妊娠及産後
ノ關係アル者デハナイ、ソレニモ拘ハラズ殊ニ男ニ比スレバ約三分ノ一シ
カ無イ筈ノ女ニ著シク多クノ脚氣ガアリマシタ、學生々活ガドレ程脚氣ヲ
發生スルニ便リアルモノデアラカト云フコトハ是デモ知ラレルノデアリマ
ス。ソレカラ茲デ注目シテ見ナケレバナリマセスコトハ、船舶運輸業即チ
海上ノ生活ヲ爲ス者ニ脚氣ガ大變多イ、結核ノ場合ニハ海上ノ生活ヲ爲ス
者ニハ少カツタノデアリマス、脚氣ハ其總死亡ノ六・二二%ダケアル、又
漁業者モ是ト同一關係デアアルカドウカ六・三七%アル、船舶ハ必ズシモ海
上ニ限ツタコトハアリマセスガ、多數ハ海上ノ生活ヲ爲スモノト見ナケレバ
ナラス、此ノ海ニ浮ンデ生活スル者ニハ非常ニ脚氣ガ多イ、併シソレハ何
故カ無論分ラナイノデアリマス、先年海軍ノ艦船ニ乗込ンデ居ル水兵ニ非
常ニ脚氣ガ多カツタコトデアリマス、其時分ノ説トシテ、新鮮ノ食物ヲ供
給スルコトガ不足デアアル、殊ニ野菜物ノ供給ガ不充分デ、罐詰ナドヲ餘計
ニ食ベテ恰モ「スクリボット」ヲ出シタト同ジヤウニ、脚氣ガ出タ、サレバ
脚氣モ恐ラク「スクリボット」ノヤウナモノデアツテ、新鮮ナル食料ヲ與ヘ
ラレヌ爲ニ起ルノデアラウト云フコトデアリマシタ、其趣カ後ニ「スクリ
ボット」ノ病原タル細菌ガ發見セラレテ、同時ニ脚氣菌モ發見セラレテ、兩
菌ノ性質ガ同ジイノデ、脚氣ト「スクリボット」トハ同ジデアルト云フ大議
論モアリマシタ、其學說ハ今日消エテ無クナツタヤウデアリマスガ、果シ
テ新鮮ナル食物ノ不足カラ起スカ、或ハ海上ノ生活ガ何等カノ關係ガアルカ、
是ハ私ガ數ニ依ツテノ調査ベタノデアリマスガ、兎ニ角右ノ業者ニ多イ、ソ
レガ職業ノ影響デアアルカソウデナイカ、是等ノ無業家族ヲ見ルト總無業家
族ハ其總死亡ニ對スル〇・七一%デアル場合ニ船舶運輸業ノ家族ハ一二・九

%漁業ノ家族ハ一・〇二%デ少ナイ方デハナイガ、有業者ガ總有業者ノ一・

〇六%ナルニ比シ六倍以上ナルヨリハ適カニ少ナイ。先年千葉縣安房郡ノ
磯村ニ非常ニ脚氣ガ多クアツタ事ガアリマス、其ハ統計局デ調べツ、アル
時ニ發見シマシタノデ、或ル夏其村カラ非常ニ澤山ノ脚氣死亡ノ小票ガ出
テ來マシタ、地理ニ暗イ私ハ、房州ト言ヘバ轉地療養地カ多イ、或ハ脚氣ノ
轉地療養ニ宜イトデモ云フ所デ、其轉地者ガ死亡シタノデアラウカト思ヒ
マシテ、其本籍ヲ見マスト豈圖ンヤ皆安房郡ノ者バカリガ死ンデ居ルノデ
アリマス。ソコデ甚ダ不思議ノ思ヒヲ致シマシテ、内務省ノ同僚ニ當テ安
房郡ノ郡行政ニ從事シテ居ツタ人ガ居マスカラ、段々様子ヲ聞キマシタ
ガ、其人ノ申シマスルニハ、彼地ハ脚氣デ名高イ所デアツテ、大漁ガアル
ト脚氣患者ガ出來ル、ソレハ何故カト云フト海ニ長ク出テ居ツテ歸ツテ來
ルト脚氣ニ罹ツタバタ、死ス者ガ出來ルト申シテ居リマシタ、果シテサ
ウデアリマスルト是等モ研究シテ見ルダケノ値ガアリハセスカト思ヒマ
ス。又昨年石川縣ニ輕度ノ脚氣ガ澤山アリマシタ。水ノ中ニ這入ツテ鮑ナ
ドヲ取ツテ來ル男女ノ體ガ大分脚氣ニ罹リマシタ爲ニ脚氣病調査會カラ特
ニ委員ヲ派遣シテ臨床的ニ調査セラレタコトガアリマスガ、果シテ真正ノ
脚氣デアルト云フコトデ、ソレハ何故發シタカハ分ラヌヤウデアリマスガ、
コンナコトモアルノデアリマシテ、此職業別ヲ見マシテモ特ニ氣脚ガ海上
生活ヲ爲スモノニ多クアルト云フコトハ餘程面白イ研究問題デアラウト思
ヒマス。此脚氣ニ就テハ尙ホ自分ハ現ニ調査中デモアリ、又當テ調べタモ
ノガアリマスノデ、多少材料ハゴザイマスガ、今ハ表ノ解説トシテ此位ニ
シテ置キマシテ、尙機會ガアリマシタナラバ御話スルコトニ致シマス。

死體ノ處置

次ニハ死體ノ處置、其土葬ト火葬トノ比較ニ就テ解説イタシマス。此土
葬ト火葬トノ比較ハ餘程新ラシイ比較デアルト思ヒマス、火葬ノコトハ世
界中何處ノ國ヨリモ、日本ガ最モ火葬ノ行ハレテ居ル國デアリマス、火葬
ノ事ノミハ外國ニ向テ衛生上誇ルニ足ルノデアリマス、何故ニ火葬ノ事ガ
衛生上誇ルニ足ルカト申シマス、御承知ノ通り火葬ヲ行ヒマスルト死體
ヲ全ク灰ニシテ仕舞フノデアリマスカラ、死體ガ土中ニ埋葬サレテ保存サ
レテ居ナイ爲ニ、死體ノ腐敗カラ及ボス影響ヲ受ケナイ、土地ヲ清潔ニ保
ツコトガ出來ル、又死體ガ傳染病ニ因ツテ死亡シタル者デアル場合ニハソ

レガ爲ニ傳染病ヲ存積セル虞ガナイ、從ツテ傳染病ノ蔓延スル機會ヲ
無クスルノデアリマスカラ、衛生上カラ申シマスレバ總テノ死體ヲ火葬ニ
スルノガ一番望マシイノデアリマス。死體ノ處置ノ中ニハ或ハ水葬ニスル
ト云フコトモアル、又或ハ林葬ナド、申シマシタ林ノ中ノ樹ニ掛ケテ置イ
テ乾カシテ仕舞フ、或ハ埃太ノヤウニ砂ノ中ニ埋メテ乾燥サセテ仕舞フ方
法モアル、又印度ノ或ル地方ニアルト云フコトデアリマスガ、鳥ニ噬マシ
テ無クシテ仕舞フ方法モアルサウデアリマスガ、是等ハ衛生上ノミナラ
ズ、風俗上カラ考ヘマシテモ褒メタコトデハ無イカモ知レマセス、先ヅ火
葬ガ完全ニ行ヒ得ラレマスレバ最モ宜イノデアリマス。併シ是ニハ宗教上
ノ關係ガアリマスカラ、基督教ヲ奉ズル國ニ於テハ火葬ヲ非常ニ忌ミマ
ス、死體ヲ焼イテ仕舞フト子孫ガ繼續シナイトカ、死者ニ對シテ甚ダ慘酷
ナル行爲デアルトカ申シテ居ルノデアリマス、又支那人モ儒教カラ來タ迷
信デアリマシヤウガ、死體ノ保存ヲ重シテ之ヲ火葬ニスルコトヲ忌ンデ
居リマス、併シ近年ニナツテ歐洲ニ於テモ火葬ガ行ハレルヤウニナツテ、
殊ニ獨逸ハ中流以上ノ人ノ進デ火葬スルモノガ段々多クナルト云フコト
デアリマシテ、昨年物故セラレマシタコッホ博士ノ如キ、我屍ハ火葬スベ
シト遺言セラレタト云フコトデアリマシテ、即チ其終焉ノ地ノバーデンバ
ーデンニ於テ火葬セラレタノデアリマス。併シソレニシテモ歐洲ニ於ケル
火葬ノ數ハ寔ニ少ナイモノデアツテ、之ヲ日本ノ火葬ニ比スレバ非常ニ差
ガアルノデアリマス、ソレ故ニ本邦ノ衛生的ノ諸條件中、彼ニ向テ誇ルコ
トノ出來ルハ唯此火葬ノミデアリマス。其處デ火葬ノ數ハ、其材料ヲ蒐集
スル上ニ於テ餘リ困難デナイ、ソレハ何故カト云フト本邦ノ制度ニ於テ、
死體ヲ處置スルニハ必ズ埋火葬認許證ヲ受ケネバナラス、ソレニハ死體ノ
處置ハ火葬ニスルトカ土葬ニスルトカ云フコトヲ記入サレルノデアリマシ
テ、此埋火葬認許證ヲ下附スル場合ニハ、其諸條件ヲ帳簿ニ記入シテア
ル、ソレ故ニ之ヲ算ハ報告サヘスレバ多少年ヲ經タル後ニ於テモ、間違ヒノ
ナイ材料ヲ蒐集シ得ラレ、ソウシテ其材料ハ信用シ得ラル、モノデアリマ
ス。今回用非タ材料ハ、特ニ内務省衛生局ガ蒐集シタモノト、一半ハ數年
前ハ警視廳ニ於テ時ノ第三部長山根正次氏ガ集メラレタノデアリマス、
警視廳ニ於ケル山根氏蒐集方法モ亦内務省ニ於ケル蒐集方法モ、其ニ府縣
ノ手ヲ經タル同一方法デアリマシテ、内務省ノ調査ハ明治三十八年カラ同
四十二年迄ノ五ヶ年間、警視廳ノ山根氏ノ調査ハ明治二十九年カラ同三十

三年マデノ五ヶ年間デアリマシテ、此兩調査ノ間ニハ四ヶ年ノ隔リガアリマス。ソコデ先ツ全國ヲ通シタル、各年ノ状況ヲ見ル、明治二十九年ニハ死體處置ノ總數ニ對スル火葬數ガ二六八%其他ノ七三%ハ土葬デアリマシタ、爾來年々火葬數ガ増加シ明治三十三年ニハ二九%ニ上リ、此五ヶ年間ノ平均ハ一七%五%火葬一八%五%デアリマシタ、是ガ山根氏ノ材料ニ依テ得タル係數デアリマス、此五ヶ年間ノ火葬ノ増加率ハ毎年ノ總數ニ對スル二%四%デアリマス。又ニ内務省ノ調査ヲ見ルニ其明治三十八年ハ一六%六%火葬三三%八%デアリマシテ、山根氏調査ノ最終年ト比シ火葬數ハ四%三%ノ増加デ此年間ノ増加ガ各年平等デアツタトスレバ、一ヶ年平均五%〇三%ノ増加率ニ當リマス。又内務省調査ノ各年ヲ見マスルト是亦年々増加シ明治四十二年ニハ火葬數ガ三四%八%ニ上リマシタ、而シテ此五ヶ年間ノ平均ハ土葬六六%四%ニ對スル火葬三三%六%デアリマス、又此五ヶ年間ノ増加率ハ一%五三%デ、前五年ト後五年トノ火葬率ノ比較、後調査ノ増加率ハ一%一%デアリマシタ、此差ハチト大キスギマスヤウデ、兩調査ノ間ニ多少ノ違ヒノアルコトガ思ハレマス。サテ此火葬ノ多クナルコトハ先刻申上ゲタヤウニ、衛生上ニ利益デアアルコトハ當然デアリマスガ、其衛生上ノ利益ノ以外ニマダ利益ナル點ガアルデアラウト思ヒマス、ソレハ何デアアルコト申シマス年々歳々墓地ノ段別ガ増加シテ來ル、ソレガドノ位増スルモノカヲチヨット調ベテ見タノデアリスガ、民有地ノ免租地ニナツテ居ル面積ヲ見マス、明治四十三年一月一日現在ノ墳墓地ハ二萬三千八百二十二町七反歩アリマス、其墳墓地ノ宅地ニ比例シテ見マス宅地ノ總反別一〇〇〇ニ對スル六二%四%ニ當リマス、田畑ヲ耕地ノ總デアアルト見マシテ、田畑ノ合計ニ比例シマス〇%四%ニ當ルノデアリシテ、隨分狭マカラス墳墓地ガアリマス、其墳墓地ガドウ云フ割合ニ増加シテ居ルカ、或ハ少クナツテ居ルカト見マス、此五ヶ年前ノ割合ニ比較シテ見マス、即チ五ヶ年間ノ間ニ百〇四町八反歩ガ増加シテ居リマシテ、其増加ハ一ヶ年平均二十町五反六畝歩ニ當ルノデアリマシテ、ソレガ恰モ墳墓地ノ〇%八%ガケツ、増加シテ行ク割合デアリマス、是ハ近キ五ヶ年間ノ割合デアリマス、此通リニシテ長ク繼續シテ増加スルモノデハナイカモ知レマセスガ、先ツ墳墓地ガ段々増加シテ行クコトハ事實デアリマス。然ルニ若シ火葬法ガ盛行ハレ之ガ普及シマスレバ、土葬ガ三分ノ二ヲ占ムル今日ニ比シ墓地ヲ餘程狭マクスルコトガ出來ルデアラウト

思ヒマス。歷史上ノ事實等ハ今私ガ申上ゲマセデモ、既ニ諸君ノ御承知ノコト、思ヒマスガ、是一度高野山ヲ御踏ミノ御方ハ御承知ノ通り、高野山ニハ納骨堂ト云フモノガアル、アノ納骨堂ハ諸國カラ骨灰ノ一部分ナル所謂舍利ヲ持つテ行キテ納メタルデアアルトカ聞マシタガ、若シ彼ノ様ナ方法ガ到ル所ニ出來マシテ、遺骨ヲ合葬スル風ガ行ハレマシタラバ、其埋葬法モ最モ簡便デアツテ、且多クノ人ガ同一墳墓ニ參詣シテ自分々々ノ思ヒノ父母ナリ兄弟ナリヲ祀ルト云フコトニシタラハ、恰モ忠良ナル國家ノ干城ガ合祀セラレタ靖國神社ノ如クニ、至極面白クハナイカト思ツテ居リマス、ソレニシテモ弘法大師ガ遺シヤ高野山繁榮ノ一策デアツタトハ言ヒ、彼ノ納骨堂ヲ設ケラレタノハ蓋シ千古ノ卓見デアツタト感シ入ルコトデアリマス。

ソレカラ次ニハ、近キ五ヶ年間ノ平均ヲ取リテ、府縣別ニ土葬ト火葬トノ比例ヲ見マシタ、本邦ニ於テハ火葬ガ盛行ハレハルコトハ前述ノ通りデアリマスガ、併シ之ヲ府縣ナル行政區劃ニ依ツテ分ケテ見マス、非常ニ火葬ヲ行フコトノ多イ所ト、殆ド火葬セラレナイ所トアルノデアリマス。或ル地方例之ハ沖繩(〇%三七%)宮崎(〇%六四%)鹿児島(〇%一九%)高知(〇%七五%)ノ如キ、又ハ埼玉(一%九四%)千葉(四%六一%)山梨(三%五〇%)宮城(四%五六%)鳥根(四%九〇%)ノ如キ地方ニ於テハ、殆ド歐羅巴ニモ讓ラナイ位ニ火葬ヲ行フコトガナイノデアリマス、又例之ハ北陸ノ石川(九%八四%)富山(九%九七%)又ハ茨城(九%八七%)大阪(八%九六%)廣島(七%七四%)ノ如キ地方ニナリマス、少數ノミガ土葬ニセラレテ死體ノ大部分ハ火葬ニ附サレタルデアアル、就中富山縣ノ如キハ土葬無シト云フ位ニ火葬ガ多イノデアリマシテ、僅ニ〇%二八%ノミガ土葬セラレテ居リマス。斯様ニ土地ヲ異ニスルニ依ツテ非常ニ差ガアル、ソコデ唯單ニ地方別ノ火葬數ヲ知ツタゲデナク、モウ一步進メ如何ニシテ斯ノ如キ現象ガ生ズルカ、其原因ヲ訪ネテ見ヨウト思ヒマス、ガ併シ是ハ原因ガ幾ラモアリマセウシ、又材料モ充分デナイノデ能クハ調ベラレマセンガ、大體ニ三ツノ原因ガアルト思フ、其第一ハ急性傳染病ガ多イコト、法律ヲ以テ定メラレマシタ傳染病ノ死體ハ總テ火葬ニスルコトガ原則デアリマシテ、或ル特別ノ場合ノミ土葬ニスルコトヲ許シマス。ソレ故ニ傳染病ガ非常ニ多クハ火葬ノ數ガ多クナル筈デアアル、第二ハ或ル宗教ハ火葬ヲ勸メタル、本邦ハ殆ド佛敎國デアリマスガ、其佛敎中ノ或ル宗派ハ、死體ヲ處置

スルニハ火葬デナケレバナラヌヤウニ勸メル、又或ル他ノ宗派ハ火葬ヲ餘リ勸メナイ、ソレ故ニドノ宗派ガ多イカノ關係ニ依テモ火葬ノ多少ガアル、ソレカラ第三ハ其地方ニ於ケル特種ノ習慣デアリマス。ソコデ傳染病ノ關係ヲ見マス、理窟トシテハ正シイガ、實際ニ於テ傳染病ガ縱シヤ餘程流行シテ多ク死ニマシタモ、ソレガ全體ノ死亡ノ上ニ影響シテ、火葬ノ數ヲ澤山ニスルト云フヤウノコトハ先ツ殆ドナイ、明治十九年ノ虎刺刺トカ明治二十六年ノ赤痢トカ僅ニ影響シタ位ノモノデ、左ル大流行デナイ場合ハ、唯一小部分ニ於テ其反應ガ知レル位ノモノデアリマシテ、總體ノ上ニ傳染病ノ影響ハ餘リ無イヤウデアリマス。然ラバ宗派ノ關係ハドウデアラウ。私ハ宗派ノコトハ頗ト存シマセスガ、聞ク所デハ眞宗、本願寺ニ屬スル宗派ノ者ハ火葬ヲ勸メルト云フコトデアリマス。然ラバ眞宗ノ數ノ多イト少イトガ、火葬ノ數トドウ云フ關係ヲ持つデアラウカ、ソレヲ統計的ニ數字ヲ以テ示スコトヲ、一ノ興味ヲ有テ調ベマシタ、併シ敢テソレガドウ云フ結果ヲ及ボスカラ眞宗ヲ多クシナケレバナラヌト云フヤウナコトヲ主張スルノデアリマセスガ、先ツ之ヲ調ベテ見タノデアリマス。ケレドモ眞宗ノ信者ノ人口ガドレ程アルコト云フコトハ金ク不可知デアリマス。ソコデ私ノ用非マシタ材料ハ、内務省ノ宗教局ノ調べデアアル全國ノ寺院ノ數ソレガ宗派別ニナツテアリマス、其中カラ眞宗ニ屬スル寺院ヲ一府縣内ノ寺院ノ總數ニ割合シテ見タノデアリマス。是モ勿論正シイ見方デハナイガ、大體ヲ探クルノ川ニハ供シ得ラレル、サウシマス、非常ニ眞宗ノ多イ所ト、甚ダ眞宗ノ少イ所トアル、眞宗寺院ノ一番多イ所ハ何處カト申シマス、トレハ鹿児島縣デ、縣内ノ總寺院數ノ八五%九二%ガ眞宗デ其他ノ僅ニ一四%〇六%ガ他ノ宗派デアリマス。然ルニ鹿児島縣ハ火葬數ハ日本ニ少ナイ所デアアル、殆ド火葬ノナイ處ガ却テ眞宗ガ一番盛ナル、斯様ノ狀況デ少シク變易シタノデアリマスガ、併シソレハ唯一地方ノ事實ニ過キマセスカラ強テ全國ヲ觀察スルコトニ努メマシタ、其結果沖繩縣ト北海道トヲ除外シマシテ、他ノ四十五府縣ヲ以テトインニス氏ノ比較法ヲ試ミタノデアリマス。サウシマス、ト今ノ鹿児島縣ノ如キ地ヤ、ソレカラ反對ニ眞宗寺院ノ極ク僅カ九%九%シカナイ茨城縣ガ火葬ノ非常ニ多イ所デアルト云フヤウナ、例外ガ幾ツモアリマシタガ、結局トインニス氏法デハ十%〇%ト云フモノガ出マシテ、之ヲ換算スルト兩現象ノ相稱ノ値ガ三一%九四%デアアルコトガ知レマシタ、サレバ眞宗寺院ノ多イ地ニハ火葬ヲ

行フコトガ多イ、是ハ常識デ考ヘマシタト同一ノ結果ガ見エマシタ、併シ茨城縣ノ如キ鹿児島縣ノ如キ其他ノ例外ヲ示シタル府縣ハ、即チ第三ノ原因トシテ算ヘマシタ其他ノ習慣ガ働イタノデアアルコトハ多ク申上ケルマデモナイコト、信ジマス。ソレカラモウ一ツ火葬場ノ數ヲ算ヘテ出シマシタガ、此火葬場ノ中ニハ唯柱ヲ四本立テ、火葬ノ場所ヲ拵エタノモアルシ、町屋ノ火葬場、日暮里ノ火葬場、若クハ大阪ノ安倍野ノ火葬場ノ如ク完全ニ出來テ居ルモノモアル、ソレガ何レモ一個ノ火葬場トシテ數ヘタノデアリマス、無論此所ニ出シマシタ數ハ信用サレル數デハアリマセスガ、火葬場ヲ以テ描圖ヲ製作スル場合ニ圖面ノ調和上カラ茲ニ掲ケルコトニシマシタ、併シ斯ウ唯比較シテ見マス火葬場ノ多イ所ニハ火葬場モ多イト云フ狀況ハ見エマス。ドレスデンノ博覽會場ニハ町屋ノ火葬場ノ模型ガ出品サレテアリマス、尼ヶ崎火葬場ノ模型モ出テ居ル筈デアリマス、此描圖ト對照シテ見タ場合ニ獨逸人等ガ新潟縣ニハ三千幾ラト云フ斯ナ立派ナ火葬場ガアルコト云フテ、確カニ驚カダラウト思マス。

死亡原因別死亡數

死亡原因別死亡數ハ二表製作致シマシタ、其ハ死亡原因中ノ主ナル三ツヲ撰出シテ、ソレ等疾病ノ各年ニ於ケル消長ヲ示シ、他ノ一八九ヶ年平均ノ各死亡原因ノ分量ヲ示シタノデアリマス。先ツ死亡原因別死亡數ノ九ヶ年平均ノ方カラ申上ゲマス。

斯ノ如キ統計ハ、時間的ニカ空間的ニカ比較ニ依テ始メテ活用セラル、デアリマスガ、今回始テ九ヶ年平均ヲ取ツテ見タノデアリマス、時間的ニ以前ニ遡ツテ比較スルコトガ出來マセス、ソレデコ、デハ外國ノ事實ト比較シテ、本邦ノ或ル死亡原因ガドノ位地ニアルカ、多クツタカ少ナカツタカト云フコトヲ申上ケルコト、致シマス。所ガ外國ノ死亡原因別死亡統計ヲ蒐メテ比較スルニハ、ナカ(困難ガアリマシテ、世界共通ノ死亡原因類別ナドガアルニモ拘ハラズ、チヨット簡單ニ總テヲ比較スル譯ニハ行キマセス、ソコデ其中ノ主ナル疾病ノミヲ英、獨、米、佛ノ四國ト比較シテ見ヨウト思ヒマス、ガソレスラ思フヤウニ出來マセス、已ムヲ得ズ佛蘭西ハ人口五千以上ノ都市ノ統計ヲ取り、英吉利ハ英倫及威爾斯ノ事實ヲ、獨逸ハ代表國タル普魯西ノ事實ヲ取りマシタガ、亞米利加合衆國ノミハ、御承知ノ通り合衆國全體ノ事實ハ十年ニ一回宛シカ是等ノ調査ヲ致

シマセスノデアリマシテ、比較スベキ事實ヲ得ルニムツカシイノデアル、依テ其各州中ノ年々人口ノ動態ヲ調査シツ、アルマサチウーセツツ、ミシガン、メイン、コンネクチカット、四州ノ統計ヲ蒐メマシテ、以テ亞米利加ヲ代表スルモノトシテ比較ノ用ニ供シマシタ。サテ此比較ニ當リテ、第一ニ注意ヲ要スルコトハ、本邦ノ死亡表ヲ總覽シタル所デ、他國ニ比シテ急性傳染病死者ノ數ガ甚ダ少ナイコトデアリマス、比較的急性傳染病死者ノ數ガ多クナイ、即チ非傳染性病、假リニ之ヲ普通病ト云フテ置キマシヤク、其普通病ガ多イノデアリマス、是ハ餘程注目スベキ價值ノアルコト、思ヒマス。急性傳染病ガナイノデアリマセシケレドモ、他ノ諸國ト比較スルニ表面ニ知ラレタル數ガ甚ダ少ナイノデアリマス。即チ試ニ其主ナル疾病ニ就テ申上ゲテ見マシヤウ。其第一ハ腸管炎、本邦ガ如何ナル狀況デアアルカト云フト、腸管炎ノ死亡數ハ別ニ申上グベキ機會モアリマス。レドモ、明治三十二年カラ九ヶ年間ノ平均ニ於テハ總死亡ニ對スル六・〇%ダケシカナイノデアリマス。ソレハ外國ト比較シマスト、他ノ諸國ノ分ハ近キ四年間若ハ五年間ノ平均ヲ見タノデアリマスガ、例ヘバ佛蘭西ト比較シマスト、佛蘭西ハ總死亡ニ對スル九・七五%ニ當ツテ居ルノデアリマス。又亞米利加ノ四州ノ平均ハ一五・九八%ニナツテ居ル、又英吉利ヲ見テモ、是ハ一七・八五%デアツテ本邦ヨリ多イ、唯本邦ヨリ少ナイノハ普漏西デハ四・九二%デアリマス。サレバ此普漏西以外ノ諸國ハ孰レモ本邦ヨリモ腸管炎ノ死亡數ガ多イ、此腸管炎ノ消長ニ就テハアトデ再ヒ申上ゲルトキニモウ一遍申上ゲマスカラソレニ譲リマシテ、今ハ薛ク申上ゲマセス、ソレカラモウ一ツ注意セラレテ居ル傳染病、痘瘡、一モ再ヒ申上ゲル機會ガアリマスガ、一モ本邦モ亦外國トノ比較上腸管炎ト同ジコトデアル、能ク世間デハ、本邦ニ非常ニ多ク痘瘡ガ在ルヤウニ言ハレテ居リマスガ、近來ニナリマシテハ、本邦ハ非常ニ痘瘡ノ少ナイ國ノ一ニナリマシテ、今日デハ他ノ諸文明國ニ比較シマシテ最少ナイモノ、一ツデアリマス。是モ本邦ヨリ少ナイノハ唯獨逸ノミデアツテ、他ノ各國ハ皆獨逸ヨリモ亦日本ヨリモ多イノデアリマス、此九ヶ年平均デハ殆ド描圖ニ入リマセヌホド少ナイノデ、痘瘡ハ此圖中ニ這入ツテ居リマセヌガ、其數字ヲ申上マス云フト、總死亡ノ千ニ對シ唯值ニ〇・一%ニ當ル、此〇・一%ヨリ少ナイノハ、普漏西ノ〇・〇六%デアリマス。其他英吉利ノ如キハ餘程痘瘡ノ能ク行届イテ居ル國デアリナガラ二・三四%ノ痘瘡死者ガアリ、

亞米利加ト雖モ一・一六%デアリマス。亞米利加ハ近來仲々痘瘡ノ流行ヲ見ルヤウデアリマシテ、華盛頓ノ衛生局週報ニ出マスノヲ見テモ、アチラコチラノ州ニ痘瘡流行ノ報告ガアリマスガ、茲ニ揭ゲタル數ハ四州ノ事實デアリマシテ、偶々其流行少ナキ地方デアツタカモ知レマセヌ、佛蘭西ハ御承知ノ通りナカ、痘瘡ガ多イ、露西亞ヨリハ少ノウゴザイマスケレドモ、他ノ諸國ニ比シテハ大變多イ、即チ總死亡ニ對スル痘瘡死者ハ五・八二%ニ當ツテ居ル、斯ノ如クニシテ本邦ハ痘瘡死者ガ少ナイ方デアリマス。又小兒ノ重要ナル死亡原因トシテ、アトデ再ヒ申上ゲマスガ、麻疹モ亦本邦ニ於ケル死亡數ガ少ナイ、此死ナイト云フトニ付テハ理由ガアルト思ヒマスガ、ソレハ後ニ一緒ニ申上ゲヤウト思ヒマス、兎ニ角麻疹ニ因ル死者ハ甚ダ僅少デ、總死亡ニ對スル二・六%デアリマス、之ヲ外國ニ比較シマスト、佛蘭西ガ七・四九%デ即チ本邦ノ約三倍デアリマス、又亞米利加ノ四州ノ平均ガ五・四八%デ是モ倍以上デアリマス、又英吉利ハ一九・四一%ハ遙ニ多クシテ七倍以上ニ當リマス、普漏西ハ一四・五四%デ是モ五倍半ホドニ當ルヤウデアリマス。ソレカラ猩紅熱、是モ大ニ注意スベキ傳染病デアリマス、本邦ニ於テハ眞ニ猩紅熱ナキカ、將タ猩紅熱ヲ發見シ能ハスノデアアルカ、其何レデアアルカ知ラヌノデアリマスガ、兎ニ角知ラレタル猩紅熱死者ハ唯獨逸ノ地ニ少シバカリアルノミデアリマス。ソレデアリマスカラ、茲ニハ描圖ニ記入スルコトガ出來マセヌ、描圖シ能ハスバカリデナク、九ヶ年間ヲ通ジテ、一ヶ年平均二十一人シカナイノデアリマスカラ、一ヶ年約百萬ノ死亡者中ノ二十一人ハ、トモモ比例數ニモ上ラヌホドノ〇・〇二%デアリマス。是ハ果シテ猩紅熱ガ本邦ニナイノデアアルカ、或ハアツテモ知ラヌノデアアルカ、統計ニ現ハレタル猩紅熱ハ左様ニ少ナイノデアリマス。而シテ外國ノ事實ヲ見マスト、佛蘭西ハ頗ル猩紅熱ノ少ナイ所デアリマスガ、ソレデモ總死亡ニ對スル一・七四%デアリマス、最モ猩紅熱死者ノ多クアリマスノハ獨逸デアリマシテ、殆ド小兒死亡ノ大部分ヲ此猩紅熱ガ占メテ居ル有様デアリマス、即チ普漏西ニ於テ總死亡ノ一六・八六%ニ當リマシテ、英吉利ハ其殆ド半數ナル八・三六%、亞米利加ハ更ニ少ナクシテ六・六六%デアリマス。ソレカラ是ハ法定ノ傳染病デアリマセヌケレドモ、小兒死亡ノ原因トシテ重大ナル百日咳、本邦ニ本病ノ患者ハ隨分多イヤウデアリマスガ、併シ其死者トシテ報告セラル、者ハ餘リ多クナイ、元來本病ト麻疹トノ間ハ、餘程親善ナル關係ガアリマシテ、兩者

ノ流行ガ前後相尋キ、若クハ同時ニ流行スルコトガ多イ、私ハ先年之ヲ調査シタコトガアリマスガ、其當時ハ麻疹ノ死者ノ多クツタ其後ニ百日咳ノ死者ガ多クツタヤウニ覺エテ居リマス。近來ニナリマシテ病理學者ヤ細菌學者ノ百日咳ヲ研究スル人ガアリマシテ、百日咳ノ病原菌ヲ捉ヘタト云フ者モアリ、百日咳ハ一種ノ細菌系ノ疾病デアツテ、近キ所ニ百日咳ノ病兒ガアルト、他ノ兒ガ之ヲ眞似シテ癩癩性ノ咳ヲスル、大人ノ咳嗽癩癩ナルヲ見テ、小兒ガ眞似シテ癩癩性ノ咳ヲスル、ソレ故ニ是ハ一種ノ神經系病デアルト云フ人モアリマス。ソレカラアラスカ或ハ文化ノ程度ノ進ンダ所ニ百日咳ガ多イト云フコトヲ言ヒマス。果シテサツデアアルカドウカハ分リマセヌガ、本邦ノ百日咳死者ハ甚ダ少クテ總死亡ニ對スル二・三%デアリマス、之ヲ外國ニ比較スルト、佛蘭西ハ五・一七%、亞米利加ノ四州ノ平均ハ七・〇七%、英吉利ハ遙ニ多クシテ一八・四四%、普漏西ハ一八・五五%デ殆ト英吉利ト伯仲ノ間ニアリマス。ソレカラ小兒死亡ノ原因トシテモ、又然ラザルモ重要ナル疾病デアル所ノ實布理亞ニ就テ述ベマス、是モ後ニ再ヒ申上マスガ、本邦ニ於テハ本病患者死者ノ數ガ一時非常ニ多クナリ其後漸々少クナリマシテ近頃デハ又少シク多クナリカ、ツテ來マシタハ、ドナタモ御承知ノ通り本病ノ治療法トシテハ最モ確實ナル北里ベリリシグ兩氏ノ發見セラレタル實布理亞治療血清ガアリマシテ、其發見以來、實布理亞ノ死亡者ハ著シク少ナクナツタノデアリマス。即チ發見前、否、本邦ニ血清藥院創立前七ヶ年間ノ平均ハ實布理亞患者中ノ死者ハ五・七二・三%デアツタノガ、血清藥院ニ於テ血清賣下開始後七ヶ年間ノ平均ハ三二・九五%デアアル、又ソレ以來今日マデノ平均ハ二九・二八%ニナリマス。斯ク血清療法ノ成績ガ著明デアリマスカラ、一般ガ實布理亞ニ對スル恐怖ガ薄ライデ來タ、ソレ故ニ之ヲ公ニ届出ツルコトモ比較的平氣ニナリ、又當該官廳モ其消毒ナドヲ餘リヤカマシヤラナクナツタ爲メニ之ヲ隱蔽スル者ガ少ナクナツタノデアリマシヤウ、之ガ一時俄然トシテ患者數ノ増加シタル原因ト思ヒマス。併シ本邦ハ他ノ諸外國ニ比シテ、實布理亞ノ死亡數ノ少ナイ方デアリマスガ、是ハ今モ尙ホ多ク隱蔽サレテ居ルノデアアルカ、或ハ實際少ナイノカ知レマセヌガ、其死亡數ハ總死亡數ニ對スル五・〇%デアリマス、之ヲ他ノ外國ニ比シマスト、孰レモ三倍乃至四倍ニ上ツテ居リマス、即チ私ノ調查メシタ四ヶ國ニ於テ一番少ナイ英吉利ト雖モ

一四・二二%デ約三倍ニナリマス、是ハ次デハ亞米利加デ一六・五六%、ソレカラ佛蘭西ガ一七・七四%、普漏西ハ二一・八七%ト云フヤウナ多數デアリマス。此場合ニ一寸申上ゲテ置キマスコトハ、此實布理亞ニハ何レノ國デモ格魯布ヲ包含セシメテ見ルノヲ普通ニシテ居リマスガ、獨リ英吉利ノミハ格魯布ヲ包含セシメテナイノデ、近ク改メラレタ英國ノ死亡原因類別ニハ呼吸器病ノ部ニ格魯布ト云フ一項ヲ設ケラレマシタガ、ソレマデハ全ク格魯布ノ數ヲ知ルコトガ出來ナカツタ、之ヲ英國ニ於ケル死因統計ノ一缺點デアルトモ申テ居リマシタシ、又右ニ掲ケタル數中ニモ之カハラスデ他ノ諸國ト正シキ比較ニナラヌノデアリマス、英國ガ他ノ三國ヨリ少イノモノレガ爲メト言ハ、言ヘルデシヤウ。

次ニハ流行性感冒ニ就テ申上マス、インフルエンザハ仲々ニ重大ナル疾病デアリマス、能ク風引ナド、言ヘバ簡單ノコトノヤウニ思フ人モアリマスガ、死亡ノ原因トシテ可ナリニ重キモノ、中ニ數ヘラレテ居ル、輕症ノ「インフルエンザ」ハ勿論怖ルベキモノデアリマセヌガ、重症インフルエンザ「カラ肺炎ヲ起シタル場合」ノ如キ往々ニシテ多數ノ死者ヲ出シマス、殊ニ小兒又ハ老人デアリマスルト、流行性感冒モ亦死ニ誘フノ原因トシテ重大ナルモノニ算ヘラレル。ソコデ此インフルエンザ死亡者モ矢張り本邦ニ少ナイ、即チ公知ノ數ニ上ガツテ來ルモノハ大變少ナイ、併シ事實ハモウ少シアルカモ知レヌダラウト想像シテ居リマス。ナゼサウ云フ想像ガ下タサレアルカト云フト、單ニ感冒ト名ヲ付ケテ報告スルモノガ、ナカ、多數ニアル、日本デ唯感冒ト云フモノ、中ニハ氣管支炎モ這入ツテ居リマス、鼻加答兒モアリマスシ、或ハ喉頭加答兒モアレバ、勿論インフルエンザ「モ包含シテ居ルモノト見ナケレバナリマセヌ、併シ統計局ニ於テハ「インフルエンザ」トカ若クハ流行性感冒トカ記シテナイモノハ、即チ唯感冒ト記シタモノノ如キハ總テ不明ノ病名ヲ付シタルモノトシテ取扱テ居ル、要スルニ之ハ醫師ノ注意ヲ惹ツタ爲メニ生スル誤謬デアリマス、而シテ其數ハ未タ確ニハ數ヘマセヌガ、流行性感冒ヨリモ、ヨリ以上ニ多イト思ツテ居リマス。併シ明治四十二年ノ分ヨリハ感冒ト記シタモノ、ミヲ集メル頂ガ出來マシタカラ其數ガ知レルヤウニナリマシヤウ、ソコデ本邦ノ「インフルエンザ」死者ノ數ハ總死亡ニ對スル二・七%デ、之ヲ外國ニ比スルト佛蘭西ハ三六・四%デ非常ニ多イ、ソレカラ亞米利加ガ一七・二三%、英吉利ハ二・〇八%デアリマス。普漏西ノ數ハ一寸私ノ手許ニアリマセヌカラ茲ニ

ハ比較ラキマス。

次ハ本邦ノ急性傳染病中ニ在テ特色ヲ爲シテ居ルモノ即チ赤痢ニ就テ述ベマス、赤痢ハ殘念ナガラ本邦ガ名物國ニナツテ居ル、歐洲ノ文明國ニ於テハ殆ト無イ、佛蘭西ノ如キハ之ヲ普通ノ下痢ノ中ニ包含セシメテ居ル、ソレカラ亞米利加ニハアリマスガ本邦ノ半分シカナイ、即チ本邦ノ赤痢死亡ハ總死亡ニ對スル一〇・一％デ、亞米利加ノハ五・二％デアリマス、普通西ニモ少クアリマスガ、ソレハ〇・七％デアリマス。是ハドウモ甚ダ遺憾ノ至リデアリマス。嘗テ第一回ノ死亡原因別會議ガ巴里ニ開カレタ時ニ、亞米利加ノ委員デアツタカト思フ、大類別中ニモ赤痢ノ一項ヲ置キタシト述ベタ、其時會議ノ意圖ハ、赤痢ナドト云フモノハ文明國ノ疾病デハナイ、ソレ故ニ細類別ノ中ニハ加ヘ置ク必要ハアルガ、大類別ニハ必要ガアルマイト言フコトデアリマシタ、當時原案者ノベルチヨン氏ハ是ニ答ヘテ申シマスノニ、赤痢ハ必ズシモ必要トハ言ハレス、尤モ吾々共歐羅巴ニ於テハ、赤痢ノ項ヲ存スルノ必要ハナイケレドモ、御互各國ガ殖民地ヲ熱帶地方ニ有ツテ居ル、其處ニ於テハ依然トシテ赤痢ガアルノデアル、ソレ故ニ此野蠻國ニ於ケル疾患モ亦一項ヲ有シテ見ナケレバナラスノハ、殖民上カラ研究スル必要ガアルニ依ツテ存シテ宜カラウト云フコトデアリマシタ、然ルニ本邦ニ於テハ、其野蠻國ノ疾患デアル所ノ赤痢ガ急性傳染病中ノ主ナルモノトシテ數ヘラレテ居リマス、殊ニ本邦ノ赤痢ハ、外國デ詳フ所ノ熱帶赤痢即チ「アミーバ」赤痢デハナイノデ、醫學博士志賀潔氏ノ發見セラレタ赤痢菌ガ其原因ヲ爲シテ居ルノデアリマス。而シテ此九ヶ年間ニ於テ最モ多キハ明治三十年ニ二萬四千四百人ノ死亡者ヲ出シ、最モ少ナキ明治四十年ニ五千八百人ノ死亡者ヲ出シテ居ル、而シテ其少ナキト云フノハ果シテ患者ノ發生ガ少ナイノデアアルカ、或ハ隱蔽數ガ多クナツタガ故ニ少クナツタノデアアルカ知レマセスガ、九ヶ年ヲ平均シテ一ヶ年ニ九千六百人ノ死亡者ヲ出シテ居ルノデアリマス。

以上ハ急性傳染病ニ就テ申上ゲタノデアリマスガ、前述ノ通り此中デ赤痢ヲ除キマス、他ノ急性傳染病ハ總テ外國ニ比シマシテ少イノデアリマス、是ハ實際ニ少ナイノデアアルカ、或ハ他ニ原因ガアツテ少ナク公知セラレテアルノカ、其邊ノコトハ餘程考ヘテ見ナケレバナラスダラウト思フノデアリマス、ソコデ急性傳染病以外ノ死亡原因ニ於テ、何ガ然ラバ他ノ外國ニ比シテ多イモノデアアルカト言ヒマス、前ニチヨット申上ゲマシタ彼

ノ腦溢血ガ多イ即チ是ガ死亡原因中ノ大部分ヲ占メテ居ル、其總數ヲ中マ

スト、九ヶ年間ノ平均デ總死亡ニ對スル七八・四％即チ八八％バカリニ當ルノデアリマス、斯ク多數ノ腦溢血死ノアルコトハ強チ他ノ外國ニ例ノナイコトハナイ、外國ト雖モ腦溢血死ハ少クナイ、ケレドモ本邦ハ英、米、獨、佛ノ四ヶ國ニ比シマシテ、其死亡數ガ著シク多イノデアリマス、即チ亞米利加ハ五・二％、佛蘭西ハ六・九％、英吉利ハ六・二％、普通西ハ六・二％、一％デアリマス。之ヲ本邦ニ比シマスルト一〇％乃至二〇％以上少ナイコトニナツテ居リマス、之ガ先ヅ主グツタ大ナ死亡原因デ、モウ一ツ大キイモノハ腦膜炎デアリマス、本邦人ノ腦膜炎死者ノ數ハ、其九ヶ年平均ガ總死亡ノ七・一％アル、此腦膜炎ハ本邦人ノ死亡原因中困ツタモノノ一デアリマシテ、勿論他ノ國デモ腦膜炎死者ハ少ナイコトハナイノデアリマスガ、本邦ノ如ク多數ノ腦膜炎死者ノアル邦國ハ他ニ全クナイ、例ヘバ佛蘭西ニ於テハ二・六％、〇・八％、亞米利加ニ於テハ二・〇・七三％デアリマス。英吉利モ普通西モ他ノ疾病ト合併シテ揭ケラレテアリマスカラ、特ニ腦膜炎死者ノ數ヲ數ヘルコトハ出來ナイ、其甚シク多カラサルコトハ他カラ推シテ知リ得ラレル、ソレカラ茲ニ揭ケタ腦膜炎ハ即チ單純腦膜炎デアリマシテ、死亡票ニ單ニ腦膜炎ト記シタルモノノミヲ舉ゲタノデアリマシテ、彼ノ結核性腦膜炎ノ如キハ此中ニ包含セラレナイ、ソレハ結核性疾患ノ方ニ入レテアル、ソコデ此多イ本邦人ノ腦膜炎ハ如何ナル者ニ多イカト云フト、之ヲ年齡別ニシテ見マスレバ孰レモ幼少ナル者ニ多イ、十歳以上ノ年齡者ニハ腦膜炎死ハ甚タ少ナイ、五歳以下ノ幼者ガ總數ノ七〇％以上ヲ占メ、十歳迄ガ一〇％ヲ占メ殘リ二〇％ガ十歳以上ノ各年齡者ニ分配セラレテ居ル有様デアリマス。此腦膜炎ガ斯ク澤山アルト云フコトガ若シ眞實デアルトスレバ、是ハ山々數ヶ問題デアリマスガ、實ハ此腦膜炎ト名ケラレタル死者ノ多數ハ眞ノ腦膜炎デナイト言フ者ガアル、其人ノ言ヲ聞クト、本邦ノ醫師ニハ一種ノ習慣ガアツテ、小兒ガ疾病ニ罹リマシテ、ソレガ熱性病デアルトカ、又ハ消化器病デアルトカ云フ場合ニ、強キ腦症狀ガアル、例ヘバ抽搐ヲ起ストカ癲癇ヲ發スルトカ云フ症狀ガアル、ソレデ其患兒ガ死亡スルト、醫師ハ之ニ腦膜炎ト命名スル、其不確實ノ結果ガ腦膜炎死者ノ數ヲ増加スルノデ、此腦膜炎中ニハ多クノ胃腸病モ包含シテ居ヤウ、又少ナカラ小兒ノ熱性病ガ包含セラレテ居ルノデアルト、私ハ此言ヲ以テ實際ヲ穿テ得タルモノトシテ信ズル者デアリマス、前述ノ

急性傳染病死者ノ少ナカツタコト、殊ニ麻疹、流行性感冒等ノ少ナカツタ

コトガ、此言ヲ信ズルニ依リテ略ホ理解セラレ、ヤニ感スルノデアリマス、勿論ソレハ想像デアリマシテ、數ヲ以テ證據立テルコトハ出來マセスガ、前後ノ關係上ソウ想像シテ宜イト思ヒマス、又サウ想像シテ宜カルベキ一ノ例トシテ見ラレルコトハ、結核性腦膜炎ノ本邦ニ少ナイコトデアリマス、結核性肺炎即チ肺結核ガ仲々多イモ拘ラズ、本邦人ニハ結核性腦膜炎死者ガ甚タ少ナイノデアリマス、之ヲ佛蘭西ニ比シマスルト其三分ノ一ニ當リ、英吉利ニ比シマシテモ矢張り約三分ノ一デアリマス、即チ本邦ノ結核性腦膜炎死者ノ數ハ總死亡ニ對スル四・四％デアツテ、英吉利ハ一一・四八％、佛蘭西ハ二・七二％デアリマス。勿論推測デアリマスガ、斯ク結核性腦膜炎死者ノ數ガ少ナイコトハ、單純腦膜炎ノ多イノカラ考ヘテ見テモ事實デナソウニ思フ、否、事實デナイト斷ジテモ宜イ、即チ結核性腦膜炎ノ大部分ガ單純腦膜炎中ニ包含セラレテ居ルノデアアル、既ニ結核性腦膜炎ガ單純腦膜炎中ニ包含セラレテ居ルト見ルコトガ出來ルモノナラバ、之ト同一事情ノ下ニ在ルベキ前記ノ諸病死者ガ此腦膜炎ニ包含セラレ、ルコトガアルモノト見テ差支ナイト思ヒマス、サウシマスルト前ニ述ベマシタ急性傳染病ガ少クナツタト云フコトニハ、裏面ニ斯様ナル事情モアリテ、隱レタル急性傳染病死者ガアルト云フ想像ガ下シ得ラル、ト思フ、ソレカラ此單純腦膜炎ガ總死亡ノ七・一％アルコトガ既ニ他ノ諸外國ニ比シ三倍以上ノ多數ニ當ルノデアリマスガ、本邦ニハ此腦膜炎以外ニ腦膜炎ト同一ニ看做サルベキモノガ尙ホ他ニアルノデアリマス、ソレハ我ガ統計局ニ於テハ抽搐及子癇（痲癇及產後痲癇）ナル項ヲ設ケテ之ニ入レテアル一團ノ死者デアリマスガ、醫師ノ死亡診斷書ニハ驚風トカ急癇トカ記サレタルモノデアリマシテ、要スルニ五歳未満者ノ腦症狀アリシ不明ノ疾病ニ因ル死者ノ集體デアリマス、此集團ノ大サハ總死亡ニ對スル二・〇・七％ニ當ルノデアリマシテ、之ト腦膜炎ト合スレバ實ニ九・〇％餘ニ當リ、ソノ中ニハ多數ノ他ノ疾病ヲ包含シテ居ルコト、思ハレル、又更ニ詮索スレバ此外ニ前申上マシタ彼ノ腦溢血中ノ一部モソレデアルト云フコトガ出來ル、ソレハ前ニモ申上ゲタ通り此項中ニ腦充血死ト云フモノヲ包含シテ居ル、其腦充血死ト云フモノハ矢張腦膜炎死ト同ジ性質ノモノデ、少クモ小兒ニ於テ同一性質ノモノト思フテ差支ナイ、ソレ故ニ此腦溢血ノ數ヲ見テ直チニ外國ヨリモ大變割合ガ多イト云フコトガ出來ルカト申シマスルト、殆ト同ジ

原因カラ來ル、否、兩者ノ間ニハ因果ノ關係アル疾病デアリナガラ、心臟ノ器質的疾患ハ外國ニ比シテ非常ニ少ナイ、サウシテ見マスルト腦溢血死者ト云フ者ノ中ニハ、心臟ノ器質的疾患死者モ少ナカラズ含シテ居ルコトヲ想像サレマスシ、又年齡ノ關係カラ見テ所謂腦充血死ナル小兒ノ腦症狀アリシ他病ノ死者ヲモ含シテ居ルモノト想像セラレ、サレバ上記ノ腦膜炎、抽搐、子癇及此腦充血中ニ潛メル數ヲ探ツテ見タナラバ、案外ニモ急性傳染病死者ガ本邦ニ少ナイノデナイカモ知レマセス。ソレカラ心臟ノ器質的疾患ガ本邦ニ非常ニ少ナイト申上ゲマシタガ、ソレヲ數字デ申上ゲマスト、本邦ノ心臟ノ器質的疾患死者ハ總死亡ノ二・五三％ニ當リマシテ、佛蘭西ハ七・〇・三七％、亞米利加ハ七・九・七七％ニ比スレバ過ニ少ナイ、又英吉利ハ動脈ノ疾患ヲモ包含シテ居リマスカラ少シ多クナツテ九・七八三％アリマス、最モ少イ普通西ハ三・六・八％デアリマシテ本邦ヨリモ多イノデアリマス、併シ私ハ之ガ蓋シ當然ノ現象デアリハセヌカト思フノデアリマス、ナゼナレバ因果ノ關係アル此兩病ガ共ニ「アルコホル」ノ影響ニ出ツルコト多キハ論ナキデアリマシテ、腦溢血ノ場合ニ本邦ガ他ノ諸國ヨリモ遙ニ多キカツタノデアリマスカラ、心臟ノ器質的疾患ガ他ノ諸國ヨリ少ナルベキ管デアルト思ヒマス、ソレ故ニ不明ノ小兒病トモ見ベキ小兒ノ腦充血死ヲ除クコトガ出來タナラバ、此兩病ノ合計ハ歐洲ノ諸國ヨリモ本邦ガ少ナイ、下位ニ在ルデアロウト思ヒマス。尤モ本邦人ニハサマデニ「アルコホル」ノ中毒者ガ多クナイカモ知レマセス、何トナレバ他ノ統計即チ精神病統計ニ依テ見ルニ他國ニ比シ麻痺性癱瘓ノ多キモ拘ハラズ中酒性精神病ノ甚ダ多カラズノデ爾カ思ハレマス。

ソレカラ次ニ氣管支炎ヲ見マシヤウ、本邦ニ於テハ此氣管支炎ハ急性氣管支炎ト慢性氣管支炎トニ別ケテ見ルコトニナツテ居リマス、是ハ慢性氣管支炎ノ方ニ肺結核ヲ包含スル場合ガアルカラデ、要スルニ急性氣管支炎ヲ觀察スルノト、慢性氣管支炎ヲ觀察スルノトハ其目的ガ違ウノデアリマスカラ、即チ之ヲ二ツニ別ケテ見ルコトガ重要デアリマス、本邦ノ統計ヲ見マスルト、急性氣管支炎ハ總死亡ノ四・二・八％、慢性氣管支炎ハ二・二％デアリマシテ、兩者ヲ比スルニ慢性氣管支炎ノ死者ハ急性ヨリモ遙ニ少ナイ、然ルニ他ノ諸國ヲ見マスルト、之ト全ク反對ノ現象ヲ呈シテ居ル、即チ佛蘭西ニ於テハ急性氣管支炎ガ一・八・一八％デ、慢性氣管支炎ハ二・九・二九％デアル、又亞米利加ハ急性ガ一・六三％、慢性ガ一・四・一五％ニ當リマ

ス、英吉利ト普通西トハ私ノ見マシク所デハ急性、慢性ヲ一ツニ集メテ居
リマスカラ、是ハ直ニ比較ノ材料トスルコトハ出来ス、ソコデ兩者ヲ合セ
マス、普通西ガ三九・三三%、之ヲ英吉利ノ七八・二三%ニ比スレバ殆
半數デアリマス、英吉利ハ何故ニ斯ク多イカ、是ハ想像デアリマス、ケレド
モ、猩紅熱ガ普通西ニ非常ニ多クシテ、英吉利ニ其ダ少ナイノト何等カノ
關係ヲ有ツテ居マスマイカ。

其次ハ肺炎デアリマス、外國ニ於ケル肺炎ハ、傳染病デアル所ノ格魯布
性肺炎ノミヲ舉ゲテアル、昔テ佛國ニ於ケル萬國死亡原因別ノ會議ノ際
ニ、或ル國ノ代表者ガ、加答兒性肺炎ノ爲メニ一項ヲ設ケタシト述ベタ、
當時會ノ考デハ加答兒性肺炎ハ獨立シタル疾病ニアラズ、他ノ諸病ノ一症
候トシテ來ルノデアアル、ソレ故ニ加答兒性肺炎ヲ其主病ニ編入スヘシ、若
シ主病ヲ示サナカッタ時ニハ、ソレハ不明ノ病名ヲ附シタル者トシテ取り
扱フヘシト云フコトデアリマス、所ガ本邦ノ事情ハ、仲々サウ簡單ニ行
キマセス、ソコデ統計局デハ加答兒性肺炎モ此中ニ包含セシメテアリマ
ス、ソレ故ニ項目ノ名ハ肺炎及氣管支肺炎トシテアリマス、ソレデ他ノ國
ト比較スルニ當リテハ、比較ノ基礎ヲ異ニシテ居リマス、ケレドモ、假リニ
茲ニ其名ニ因ミテ比較シマス、本邦ノ肺炎及氣管支肺炎死者ハ總死亡
ノ五四・五%ニ當リマス、佛蘭西ノ肺炎死者ハ四七・二%デ之ハ本邦ヨリ
少ナイ、英吉利モ普通西モ又亞米利加モ唯格魯布性肺炎ノ死者ノミナルニ
モ拘ハラズ加答兒性肺炎死者ヲ合併シタル本邦ニ比シ遙ニ多クアリマシ
テ、英吉利ガ七七・七七%、普通西ガ七九・九八%、亞米利加ガ七五・九六%デ
アリマシテ、先ツ約八〇%ニ當リ、此格魯布性肺炎ハ傳染性ノ疾患デアリ
マス、ケレドモ、其罹患者ノ多イ少ナイト云フコトハ、緯度ノ高低ニ依ツテ
差ガアル、又空氣中ニ水蒸氣ノ飽和サレテ居ル其度ニ依ツテモ遠ヒガア
ル、又一日ニ於ケル氣溫ノ高低ノ差ガ大デアアルカ小デアアルカ其程度ニ依
リテモ多少ガアル、ソレ故ニ進テ氣象トノ比較ヲシテ見タナラバ餘程得ル所
ノアルモノト信ジテ居リマスガ、今ハソレマテニ取調ベテ居リマセス。
ソレカラ本邦ノ死亡原因トシテ殊ニ特色アルモノハ非傳染性ノ疾患ニ
多イト云フコトヲ前ニ申シタガ、其中ノ一トシテ注目ニ値ヒスルモノ
ハ消化器系ノ疾病デアリマス、是ハナカク本邦人ニ澤山アル、亞米利加
ノ紐育ニ居ラレマスアインホルント云フ胃腸病ノ大家ガアリマスガ、原
此人ハ獨逸人デアツテ、此學問ニ於テハ隨分高名ノ人デアリマシテ著述モ

澤山ニアル、其先生ガ申サレマスニハ、亞米利加人ニハドウモ非常ニ胃腸
病ガ多イ、之ヲ歐羅巴ノ諸國ト較ベルト其約三倍以上モ亞米利加人ハ胃腸
病ニ罹ツテ死ス者ガアル、ソレハ主トシテ亞米利加人ガ玉蜀黍ヲ盛ニ食
スルニ基因スル、即チ多量ノ含水炭素食ヲ攝取シテ胃ヲ勞スルコトガ多
カラ、ソレデ胃腸病ヲ起スモノガ多イノデアアラウ、斯ク云フコトヲ言フテ
居ラレマスガ、亞米利加モ地方ニ依ツテ多少違ヒアリマシヤウケレド
モ、私ノ見マシタ所ノマサチウセツ、ミシガン、コシネスチカツト、メイ
ン州デハ總死亡ニ對スル胃ノ疾患死ガ一六・八三%デアリマシタ、之ヲ
佛蘭西ニ比シマス、佛蘭西ノ胃ノ疾患死ガ一六・八三%デアリマシタ、之ヲ
ニナリマス、併ナガラ更ニ之ヲ本邦ニ比シマス、佛蘭西ノ胃ノ疾患死ガ
ルニ足ラナイ、本邦ノ死亡原因中ニ於テハ腦溢血、肺結核ニ次クモノハ胃
ノ疾患及腸ノ疾患デアリマシテ、胃ノ疾患ニ因ル死者ハ實ニ六八・〇%ニ
ナル、之ヲ亞米利加ニ比シマス、其約四倍ニ當リマシテ、佛蘭西ノ如
キハ僅ニ十分ノ一ニ足ラナイノデアリマス、是ハ本邦人ノ食物ノ然ラシム
ル所デアリマシタ、寔ニ已ムヲ得ナイコトデアリマス、或ハ之ヲ支那人ナド
ニ就テ調ベマシタナラバ面白イ現象ガアルカモ知レマセスガ、今ハ勿論出
來マセス、本邦人ノ主食物ハ含水炭素物デアアル、ソレガ爲ニ非常ニ多量ニ攝
取シナケレバナラナイ、爲メニ胃ヲ勞スルコトガ大ナルニ依ルノデアアラウ
ト思フ、又一面カラ考ヘテ見マス、經過ノ長イ慢性病ガ胃腸病トシテ
報告サレルヤウナ場合ガ往々アル、長ク病癒ニ居ル者ハ孰レモ胃腸ヲ害サ
レル場合ガ多イ、サウスルト目前ノ患者ノ主訴ナル胃腸障害ノミヲ報告シ
テ、本病ハ何處ヘカ隠レテシマツテ胃腸病ノ死者ト變スルコトガ往々アル
例デアリマス、右ノ胃腸疾患死者モ實際ヨリ多クナツテ居ルカモ知レマ
セスガ、兎ニ角本邦人ニ於ケル胃腸病ハ著シク多イモノデアリマス、然ラバ
此胃腸病ハ要スルニ一系統ノ疾病デ、胃ニ患者ガアレバ腸ニ波及スル、多
クノ胃病ハ腸病ヲ兼スル、云フ點カラ考ヘテ、本邦人ノ胃腸病ハ胃病ト
シテ多ク報告サレルカラ腸病ハ少イコトハナイカト疑ガ起ル、所ガ腸病
モ亦決シテ少クハナイノデアリマス、是ハ亞米利加ニ比シマシテモ、佛蘭
西ニ比シマシテモ多イ、亞米利加ガ五四・三七%デ、佛蘭西ガ五九・〇二%
デアアルノ、本邦ハ六二・一%ヲ出シテ居ル、併シ此中ニ包含セラルベキ
小兒ノ下痢、腸炎ノ少ナカラス數ガ先刻申上ゲタヤウニ所謂腸膜炎、ソレ
カラ腸病、子痢トカ腸充血トカ云フモノ、中ニ移行シテ居ル、小兒ノ下痢腸

等ニ於テ腦症狀ヲ起シタル者ガ、腦疾患ラシク報告セラル、ノ弊アルコト
ハ此場合ニ於テモ考ヘナケレハナラスコトデ、又實ニ腸病ガ此報告以上ニ
在ルコトモ思ハレルノデアリマス、細密ノコトハ今茲テ申上ゲマセスコト
ニシマシテ、コレカラ比較ノ重大ナル死亡原因ニ就テ申上ゲマス、先
ヅ第一ガ腎臟炎デ、近頃大層腎臟炎ガ多クナツタコト云フコトヲ聞クノデア
リマス、成程死亡數ノ上ニ於テモ腎臟炎死者ノ數ガ年々多クナツテ來
マシタ、明治三十二年ニハ總死亡ニ對スル一四・二%デアツタノガ、一四・
四%ニナリ、ソレカラ一五・一%、一六・四%、次ニ一九・一%、一九・六%
ニナリ、一〇%カラ二二・五%、二二・二%ト進ンダデアリマシタ、九ヶ
年ノ平均ヲシマシタ所デハ一八・一%ニナツテ居リマス、是ハ實際ニ腎臟炎
ガ多クナツタノデアアルカ、或ハ腎臟炎ノ診斷ガ正シク爲サル、コトニナツ
テ來タノデアアルカ分リマセスガ、多クノ觀察者ハ腎臟炎ノ診斷ガ正シク爲
サル、コトニ基因スト云フテ居リマス、ナゼカト申シマス、近頃ニナ
リマシテカラ化學的診斷法ガ闡明シテ之ガ盛ニ行ハレテ來マシテ、何處
デモ化學的診斷ヲ爲シ得ルルヤウニナリマシタノデ、尿ノ検査ガ爲シ
易イ、又色々ナ蛋白計ナドガ發見サレマシテ、尿中ノ蛋白質ヲ計量スルコ
トガ容易ニ開業醫ノ手ニ依ツテ爲シ得ラル、ノデアリマス、ソコデ腎
臟炎ナルコトヲ確認セラル、數ガ多クナツテ來タカモ知レス、之ヲ外國ニ
比シマス、佛蘭西ハ二四・一二%、英吉利ハ二二・三三%デアリマシ
テ、一ハ本邦ヨリモ少シク多ク、他ハ少シク少ナイノデアリマス、然ルニ非
常ニ腎臟炎ノ多クアリマス、ハ亞米利加デアツテ四六・四四%ノ腎臟炎死
者ガアルノデアリマス、是レ果シテ何ニ原因スルノカ今ソレヲ調ベテハ居
リマセス。

ソレカラ本邦ニ產熱ガ少ナイト云フコトデアリマス、夫ハ果シテ產熱
ガ清潔ニ行クノ實際ニ少ナイノデアアルカ、ソレトモ醫師ノ申告ガ不行届
デアアルカ知リマセスガ、兎ニ角統計ニ由リテ知ラレタル本邦人ノ產熱
死者ハ總死亡ノ二・〇%デアリマス、之ヲ外國ノ事例ニ照シマス、英國
ハ二・八三%、普通西ハ二・八四%デ本邦ヨリ少シク多ク、亞米利加ハ二・
七七%デ可ナリ多ク、佛蘭西ハ四・五三%デ最も多クアリマス、次ニハ先
天性體質ノ死者ヲ見マス、ベルチヨノ類別ニ於テハ生後十五日以内ニ死亡
シタル者ノミヲ算ヘルコトニナツテ居マス、ソレデ先天性體質ト云フ項中
ニハ稟賦薄弱ナル者、ソレカラ畸形、肺ノ膨張不全、初生兒瘰癧皮症等ヲ包

含シテ居マス、其死亡數ガ本邦ニ於テハ總死亡ノ四四・六%デ餘リ高クハ
アリマセス、英吉利ハ少シク高ク五〇・二六%、亞米利加ハ更ク高クシテ五
一・五八%、普通西ハ一層高クシテ六五・二九%デアリマス、又老衰死者ヲ
見マス、本邦ニ於テハ各國トモ六十歳以上ノ老衰者ノミヲ取ルコトニナツテ居
リマスガ、本邦ニ於テハ總死亡ニ對スル六〇・九%、英吉利ハ之ヨリ少ク五
六・六二%、亞米利加ハ遙ニ少ナク三一・五三%デアリマス、然ルニ普通西
ノミハ非常ニ高ク一〇七・三四%ニ當リ、本邦ノ老衰ハ先天性體質
ノ死者ガ如何ニシテ斯ク多少ガアルカト申マス、是ハ單純ノ觀察デハ
イケン、先ヅ其邦國ノ人口ノ年齡構成カラ先キ研究シナケレバナリマ
セン、又其邦國ノ出生率ヲモ參照セナケレバナラスコトハ當然デアリマ
ス、併シ今ハ深クハ詮索セスコトニシテ概要ノミヲ申上マシタ、底デ先天
性體質ノ老衰ノ多イコトガ衛生上幸福ノ事能カドウカト申マス、老衰
ノ増加ハ天命ヲ究フシ枯木ノ倒ル、ガ如クニ近クノデアリマス、老衰
ノ死者ノ増加ハ決シテ喜ベカラザルモノデアリマス、若シモ老衰ノ
年齡ガ益々高クナリテ其數ヲ増セバ最も喜ベキコトデアリマシヤウ、先
天性體質死ノ多キコトハ老衰死ト反對デ是レ決シテ喜ベキ事態デハナ
イ、是等ノ死者ノ多イト云フコトハ其母ノ身體ノ健全ナラザル影響デアツ
テ、間接ニ其母ガ體質的ノ疾患ヲ有ツテ居ルトカ、營養不良デアルトカ、
妊娠中ノ攝生カ充分ダトカ云フコトヲ説明スルモノデ、此數ノ増加ハ甚ダ
不良ノ徵デアルト思ヒマス。

最後ニ述ベキハ變死、自殺デアリマス、變死ノ數ハ本邦ニ於テ變死ト
云フモノハ、總テノ外傷性ノ死亡ヲ指シタノデハナイ、警察ノ手ヲ經タル
外傷性ノ死者ノミノコトデアツテ、其他ノ外傷性ノ死者ハ單ニ外傷死トナ
ツテ居リマス、ソレ故ニ正シク海外諸國ノ變死ト比較ヲ爲サニハ變死ノ
一六・二%ト外傷死ノ四・九%トヲ合セタモノ即チ二一・一%デナケレバナ
リマセス、而シテ亞米利加ハ四〇・〇一%デ非常ニ其數ガ多ク、英吉利ハ二
四・七七%デ少シク多ク、普通西ハ一九・二七%デ本邦ヨリ少クアリマス、
又自殺ノ數ハ近來ニ至リマシテ餘程其數ガ多クナツタヤウデアリマス、即
チ總數ヲ括ツテ申マス、八・一%デ、普通西ハ九・二%、本邦ヨリ高キコ
ト約一%デアリマス、亞米利加ハ六・七〇%、英吉利ハ六・一八%デ其本
邦ヨリ少ナアリマス、(變死自殺ニ就テハ後ニ詳述シマス)先ヅ以上ヲ以
テ死亡原因ノ總體ニ關スル説明ヲ終ツタモノト致シマス。